

---

# 痛みとウサギと追いかけっこ

こぎん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

痛みとウサギと追いかけて

### 【Nコード】

N9719Y

### 【作者名】

こぎん

### 【あらすじ】

少年は異世界に迷い込んだ、勇者と魔王でもない第3の存在として、  
世界征服しちやいなよ！あとついでに神様も殺っちゃいなよ！  
すれば君は神様だ！  
そんなかんじで世界征服始まります。

## プロローグ

「あと・・・5分だけ・・・」

いや、わかってるんだ

ここが自分の部屋じゃないことくらい

「現実逃避してても始まらないか」

目を覚ますとそこは金の苔のベットとよくわからない木の根が見える壁にに囲まれた洞窟だった。

それにしても夢ではなさそうだなあ

つねった頬が痛いや・・・

苔で覆われてるけどこのふかふかしたベッドみたいなのは何なんだろうか・・・

ああとつても気持ちいいなもう一眠りしてもいいかな？

ごめんよ、パ ラッシュとつても眠いんだ・・・

そのままもう一度夢の中へ落ちていった

俺はたしか翌日が休みって事もあって最近熱中しているRPGゲームをしていて

気がつけばもうすぐ3時って時間までやりこんでいた

明日、というか今日は友達と一緒に旅行に行く約束をしていたので睡眠を取らないとダメだと踏んで布団に入ったはずだったんだった

「ふっ、認めたくないものだな二度寝したのにも関わらずまったく状況が変わってません！実は夢でしたーっていう夢落ちを期待したんだけど」

俺はいつもどおりジーパンに通気性のいいTシャツというラフな部屋着だった

「そつえば寝巻着は着てたはずなんだが」

寝間着よりかはマシなのでうるついでみようかな

これはまたマイナスイオンがたっぷりと補充できそうな・・・ジャングルですね

そして目の前に自分の身長+20cmくらいの向日葵にしか見えな植物が生えていた

おれの身長は170くらいだから十分育った向日葵なんだなあ  
周りの木が日の光なんて遮ってて他の植物がほとんど無く苔がはえているのにもかかわらずその向日葵はとてもキレイな大輪の花を咲かせていた

怪しいと思いつつも近寄ると向日葵が『嗤った』

これはやばい

とっさに後ろに下がろうとしたが手に噛みつかれてしまった

「ぐっ……はなせっ！」

「ギャー」

無理やり向日葵を引っ張るとあっけなく向日葵は途中からちぎれて動かなくなった

「いつから向日葵はこんなに活発に栄養を求めるようになったんだよ」

栄養が少ないのかそれとももともと肉食植物なのか

幸い腕の傷はかすり傷程度ですんでいた

「こんな向日葵でも種は食用になったりしないかな・・・」

痛みより食欲が勝った瞬間だったがしばらく種等を観察していると向日葵は小さな紅い石のようなものを残して消えてしまった

キレイな石だったのでそれをポケットに入れると壁伝いに歩いていった

「RPGならお金とか薬草とか落としてくれるはずなのに石ってどういうことなんだ」

しばらく歩くと滝がありここを下っていけばきっと人のいるところ

に着くだろうと川沿いに歩いて数分後

遠くから金属のこすれる音、と多くの足音が聞こえてきた

ここはまず日本であるわけが無いというより地球であることすらあやしい・・・

そんな所で金属の音+足音って言われても安心できないむしろさっきの向日葵みたいなモンスターの可能性もある

さてここで問題です

俺はどうすればいいでしょうか？

- 1 何かの大群に助けを求める
- 2 このまま隠れて様子を見る
- 3 見つかる前に別の道を探して逃げる

俺は2を選ぶ！

1は論外うかつすぎる、3は見つかる可能性が高い、2ならばダンボールで敵の目を欺く作業員もいることだしきつといける！

おっと来たみたいだ

何を言ってるのかわからないけど馬？に似た動物に乗り両刃の剣を  
持ったおっさんが何か叫んでる

「イーツ？ ニョルニンド？」

ダメだ、日本語でないどころか英語ですらなさそうだ・・・実は英  
語で俺がヒアリングできてないだけという可能性は無きにしも非ず

「よし、行つたな」

ますます異界である可能性が高まってるんだけどここで捕まったら  
解剖されてBADEND？

「うわぁ・・・これってフラグ？」

がさがさ・・・がさがさ・・・

「！！！？？」

そこには簡単に言えばデフォルトキャラクター

間違つてもかわいいとは呼べない生物、

耳に傷があり、手にはキセル、背中に秋刀魚を背負ってるウサギ

という3頭身しかないモノがそこにいた

「1s5rk2521fs34。smvk」

今度はまったく理解できない言葉だったが敵意は感じられない

「えっとここはどこで町はどこでどちらでしょうか？」

そのデフォルトキャラクターはおもむろに手？を輝かせると

鳩尾に強烈なボディーブローを決めた

「ぐふっ……げぼげぼ……」

「いえ……わしのこぶしはひやくまんぼるとじゃけえのお……」

デフォルトキャラクターに殴られたとたんに奴の話している言葉が理解できるようになった

「あー、なんで殴られたのかとか聞いてもいいかな？」

「おう！ぼーず！いいしつもんだあ……それはなそこにいぶんかこつりゆうがあるからよお！」

「うん、わからん。まあ言葉が通じるようになったのは感謝するよ」

「ぼーず！ここであつたのも何かの縁だ！ええもんやるか！てーだしな」

「そーいやぼーず！てめえの名前はなんてえんだ？」



「俺の名前は森 修・・・」

「だまらっしやいー!」

「へぶっ」

あれ、自分の名前を言おうとしたら突然殴られたよ？痛みは無いけど口の中切ったみたい鉛の味がする

「あんたみたいなのは名無しで十分なんだよっ」

どうしよう、いきなり俺の名前は名無しになったようです

「って、人の名前をいきなり改名してんじゃねえよ！俺には修ってなm・・・」

「せか んど ふり すき ー!ー!ー!」

「ぐはっ」

「おいらぁ 呼ぶときは疾風のジョーって呼べ やぁ」

「おか・・・しい・・・だろ・・・」

デフォルメキャラクターのアップパーで俺の意識はそこで途切れた。

## その1〜RPGの基本は情報収集から〜

あの不思議な生き物に殴られてからどのくらい時間がたったのかわからないが太陽の位置から大体昼過ぎだと判断する

ここが異世界なのはよくわかったけどこれからどうすればいいのだろうか

変な生き物のおかげで言葉は通じるようになってるみたいだし

RPGの定番からするとこの世界の魔王的なラスボスを倒せば元の世界に返れたりするんだろうけどそういった場合大抵は、召還されて

「おお異世界からの勇者よ！私たちのために魔王を倒してくれ！」

つてのがお決まりなはずなんだけど

と視線を感じて後ろを振り向くと

これが山賊です！っていう皮の装備に身をつつんだマッスルさんがびっくりした顔で立っていた

「えっと・・・どこから見えました？」

振り向いた状態で問いかけてみる

「あーるピージーのていばんからって所あたりから」

ふむ、心の中の呟きのはずが口から漏れていたらしいわっ！ハズ

カシ！

体ごと振り返って咳を一つ、きつと自分の顔は真っ赤なんでしょうねー

「オホン！・・・初めまして、町はどちらでしょうか？」

数人いた山賊が全員一定方向を指差してくれた。

「ありがとうございます！では！さっきのは忘れてください！」

では！のあたりですでに全力で指差した方向へダッシュしている。

「お、追えッ！逃がすんじゃないよ！」

後ろの方から追っ手がやってくるのがわかる。

もしかしたらこのまま逃げ切れるかもなんて都合のいい考えだったようだ。

すぐに追いつかれて囲まれてしまう。

振り返って一人に話しかける

「えっとお金なんて持ってませんよ？」

とりあえず金銭を持ってないことを自己申告

「俺等は金が欲しいだけじゃねえんだ」

「・・・何が欲しいんです？」

「全部だよ、とりあえず《イツ》について知ってることを吐きな  
イツ・・・そういえばさっきそんな単語を聞いたな。

「それなら向こうへ向かう集団がそんなことを言っていましたね、それ以外は知りませんよ」

「そうか、ならてめえは用済みだ、こんなところでゴブリン共の餌にするより奴隷商にでも売って俺等のために金に換えてやるか！」

困った！大ピンチだ

自分の周りにはさっき話して奴を含めて4人、ナイフを持ってるから一気に襲われたらひとたまりも無い  
となると

「先手必勝！」

大声で叫んで走り出す一步を踏み込むその瞬間前にいた2人はナイフを構えて腰を落とした

それを確認すると後ろへ全力で飛ぶ肘が右にいた山賊の顔に当たり倒れる、

そのまま右へ方向転換して走り出す。

少し距離が開いたところで足元の地面が消え俺は落ちた。

落ちた高さとしては1mくらいだろうそこから急な坂になっておりここまで転げ落ちてきた

周りの壁は自然とできたにしては整いすぎているところからみてきつと人の作ったものなのか魔物の巣なのかのどちらかだと思う

「いてて・・・ここは地下か」

周りの苔が薄く発行しているので真っ暗とまではいかないが見える範囲はせいぜい2メートルも無いだろう

向日葵のような生物がいなくても限らないので落ちて乾燥していた根っこの切れ端を持って出口を探して彷徨いだした

細い通路を歩いていると前の方から子供くらいの大きさの影が複数こっちへ向かっていた慌てて近くのわき道に隠れると

所謂　ゴブリン　と呼ばれるモンスターがゴフ！ゴフ！と言い

ながらゆっくりと通り過ぎていった。

「ゴブリンということは魔物の巣で間違いなさそうだな。」

さっきの山賊が言ったことを信じるならゴブリンは肉食でパクリといかれちまうそうだ。

ほんと、この世界はいろんな意味で退屈させてくれないな、ご飯にされそうになったり、奴隷にされそうになったり

さっきのゴブリンとは逆の方向へ向かうと少し開けた場所に出た

そこにはゴブリン4体とひときわでかいゴブリンのリーダーのようなのが2体の合計6体がいた

さてこの世界の基準は知らないけど俺の知っているRPGならゴブリンはチュートリアルにでてくるような雑魚扱いなんだが

ゴブリン達の装備は棍棒と木の棒かなリーダーの方はナイフのようなものを持っている

今俺の武器はずっと持つてる乾燥した根っここと『安全靴』だ

普通の一般人は日頃安全靴なんて履いてないと思うんだが

俺の場合は過去に細い道でトラックとすれ違ったことがありその時に靴をタイヤにはさまれたことがある少し大きめの靴を履いていたこともあり骨折どころか怪我も無かったんだがその頃から安全靴を履くようになった。

ただし所々手が加えてあつて走つても不自由が無いようになってい  
る。

手を加えてない安全靴で走ろうとしたことがあつたがその時は鉄板  
の端が足の甲などに当たりとても痛かつた。

さてまずは6体いっぺんに相手をする と確実に負けるだろうからで  
きれば2体くらいをこちらにおびき寄せて片付けたい

ちなみにこの時の俺は『異世界』、『ダンジョンちつくな場所』と  
いう二つの理由でハイテンションだった。

その部屋から少し離れると足元から石を拾い上げて投げる

カツンつと小さな音を聞きつけたリーダーゴブリンは下っ端4体に  
命令を出して確認させに来た

一列にならんだゴブリンが狭い通路を歩いてこちらへやってきた。

ゴブリンは天井が少し崩れて音を立てたと判断したのだろう後ろを  
向いたその瞬間

俺は後ろから根っこを振り上げて一番後ろにいたゴブリンになぐり  
かかった。

根っこは折れて使い物にならなくなったが襲われたゴブリンは倒せ

たようだ。

いきなりの奇襲にゴブリン達は少しの混乱を見せているその間に殴り倒したゴブリンの持っていた棍棒を拾い上げるのと同時に2体目のゴブリンの顎目掛けて振りぬいた。

ゴツっという鈍い音を立てて2体目のゴブリンが後ろに飛んだ。

2体目のゴブリンは3体目のゴブリンとぶつかったところで俺は2体目のゴブリンを踏みながら3体目のゴブリン胸元に蹴りを入れた

3体目は4体目を巻き込んで後ろに転がった。

3体目のゴブリンの喉を思いっきり踏みつけて4体目のゴブリンの顎を蹴り抜く。

4体とも動かなくなったことを確認する4体とも腹が動いているところを見ると気絶しただけのようだ、頑丈だな・・・ゴブリン

さっきの広場まで戻ってくると2匹のリーダーゴブリン達は広場の真ん中辺りにいた

まだリーダー2匹の他にはゴブリンは見当たらないがナイフぼいも  
のを持った相手を二人相手するのはしんどいのでこっちに來てもらうことにしようか

作戦は石をリーダーに向かって投げると後ろの通路の曲がり角を曲がったところで待ち伏せる。



追ってきたリーダーが曲がり角を曲がったところで棍棒による一撃と蹴りで一匹しとめる

残り一匹も流れでしとめるといふ考えだった。

足元の石を拾い手前のリーダーに向かって投げる！走ってくるリーダーを曲がり角まで・・・って火の玉！？

リーダーは魔法なんて使えるのかよおー

曲がり角をまがった所で火の玉が壁に当たり火の粉を散らした。

俺はゴブリンが角を曲がりきる前に棍棒をフルスイングするとリーダーその1は頭を軸に半円を描いて地面に倒れた。

間髪入れず顎を全力で蹴り抜く！さっきのゴブリンとは違ってゴリっという手応え？足応え？があった

最後のリーダーはナイフを振り上げてこちらへ走ってくる棍棒の持ち手をぐっと握ると思ひ切り突き出した

リーダーその2は棍棒は叩くもので突くことは無いと思っていたように顔面に直撃する。

後ろに2、3歩下がったのでそのままの勢いで胸を蹴り飛ばす

1メートルほど飛んだのを確認し足元からリーダーその2が落としたであろうナイフばいものを拾い上げると起き上がるうとしてい

リーダーの頭を蹴る

最後の1撃は靴の角がクリーンヒットしたらしくリーダーその2は転がっていった。

そのあと少し待っているとその1とその2は向日葵と同じように緑の石とナイフばいものを残して消えていた。

「またこの石か今度は緑色って何かあるのかな」

とりあえずさっきの4体のゴブリンが戻ってくる前にここを離れるか

広場の奥にまた道を発見したのでそちらを進んで行くと鉱石のような石やきつとここでやられた人間の鎧と思われる物などが置いてあった。

「これは宝物庫だよな、となるとさっきのリーダーだと思ったゴブリンはこのボスだったのかな」

所々に金、銀のコインが置いてある！これはこの世界のお金かな

おれの中のRPGの鉄則

その1勇者とは家捜しするもの！

その2魔物の宝は勇者の物！

その3魔物と戦う時は全力で！

その4出会った魔物はとりあえず倒してみよう！

という鉄則があるのでとりあえず使えそうな物ををいただいでいこう  
ざっと見回すとコインの詰まった袋、ボロボロの鎧、何かの石  
そして・・・腕輪？

必要なのはコインの袋の中に石を入れて腕輪を左手にはめる

「ちゃちゃちゃん！なぞのうでわを装備した！・・・もしかしてこれ単なる装飾品かな？」

こっちの鎧は使い物にならないな・・・というより着方もわからないや

宝物庫に入った時と出てきた時では見た目が少し変わったただで実際際の戦闘力に変化は無かった。

出口を探して彷徨っていると階段を見つけた！ただし下り・・・  
降りてみると悪臭が漂っていた。

ここは牢屋のようだが人がいれば助けてみるかもしれないし  
つてるかもしれないし  
牢屋だけあって見張りがいるな2体だけかな？ならこのナイフだけでいけるはず

2体のゴブリンの内一人は椅子に座って眠っていた。もう一人はその近くに立っていた

階段に背を向けた瞬間にすばやく近づいて立っていたゴブリンの口を押さえながら首をナイフで切る。

寝ているゴブリンも同じようにして倒した。

ゴブリンたちが消えると牢屋の鍵だと思われる鍵束と棍棒と両刃の剣が残っていた。

牢屋に近づくと牢屋の中には鎖に繋がれた人型の影がいくつも見えた。

「大丈夫ですか？」

俺の声に反応して数人の声が聞こえる

「たすけ・・・なのか？」

「たすかったの？」

ふむ生存者がいたようだ、地下に出口は無いだろっからって理由で降りずに出口探索しなくて正解だった。

「すぐにここから出しますね」

生存者は4人

最初はもっと数がいたらしいが一人また一人と数が減ったらしいこと

商人のキャラバンが野営中ゴブリンの大群に襲われここにいるメン  
バーが連れ攫われたらしいこと

後で聞いた話なのだがキャラバンというのは品物を買付けに行く  
際いくつかの商人などが襲われにくくするために集まって行動する  
集団のことを指すらしい

なんとかゴブリンの巣から出た俺と貴族の娘だというリーナさん、  
リステイさん、がっしりした体格のベルムンドさん、商人のグルマ  
さんの4人は近くの村まで一緒に行動することになった

しばらく歩くと大きな川がありその近くに村があるそうなので野営  
の装備もない俺等は急ぐこととなった。

衰弱しきっていたリーナさんを背負いながら近くの村を目指した。

村の入り口に差し掛かると警備の兵士の一人がこちらを見て走って  
近づいてきた。

「大丈夫ですか！酷い様子ですがどうしましたか？」

「ゴブリンの巣で捕まっていたので保護して来ました」

「わかりました、こちらへ」

その兵士さんはすぐに衰弱した人たち部屋へ寝かせるとと医術士の手配をしてくれた。

その1〜RPGの基本は情報収集から〜（後書き）

小説は難しいとつくづく思ってしまう。

これから主人公にはいろいろと無双してもらったりハーレムをつつて考えてるとストーリーがめちゃくちゃになる不思議

その2つ回復アイテムは大事（前書き）

サブタイトルはその場の思いつき！

前は穴に落ちてゴブリンをドーン！ - 人質救出！ - 町到着！  
イ  
マ  
コ  
コ

追記：通貨に問題が出てきたので多少変更しました



## その2 回復アイテムは大事

「君が助けてくれた人たちはこちらで保護しよう、今日の宿は決まっているかい？」

商人のキャラバンがゴブリンの集団に襲われたのは一週間前らしく「ギルド」から搜索も出ていたそうだ

「いや、これから宿屋を探すんだがおススメの宿とかあるか？」

「コニード亭にするといい美人な女将さんがうまい飯を出してくれる」

兵士の一人はギルドの方に連絡しておくから明日報酬を取りに行ってくれという別の兵士に呼ばれて行ってしまった

「うまい飯とやらを食いにコニード亭とやらを探しますか！」

夕方ということもあり店じまいを始めている姿がちらほらみえる目的のコニード亭はすぐに見つかったというより看板の自己主張がはんぱなかった。

他の店の看板は木を彫って作ってあるのにここのカンバンは極彩色の光を放っていた。

「いらっしやい！泊まりなら10G食事・湯付なら20Gだよ！おや、みない顔だけどこの町は初めてかい？」

「もろもろ付でお願い、今日着いたばかりだね」

「そうかい！ようこそフューデイル1の宿コニード亭へ！」

現在の持ち金2235G 金貨、銀貨、銅貨等いろいろな貨幣と価値について説明をしてくれたコニード亭の《おねーさん》はこの女将さんでメリルさんというそうだ。

食堂ではメリルさんの旦那さんであるジョーイさんが料理を作っていた

厨房の中で赤いトカゲに羽根の生えたような生物が飛び回っていた衛生面とか大丈夫なのだろうかと気になったが他の宿泊客やジョーイさんも気にしていないようなので放っておく事にした

晩飯はスープとパンでスープは薄味がこのあたりでは主流だそうだ。

満腹になった俺は自室に引っ込むと自分の持ち物を確認した。

ナイフつばいもの2本

コインの入った袋

よくわからない腕輪

以上・・・

ふわふわしたベットで眠れるのだから満足する・・・か

ベットに入ったとたんに眠気が襲ってきた。ZZZ・・・

「おい・・・聞こえるか　・・・くそっナナシじゃないと通じないのか」

「ナナシ！私の声は聞こえているな」

あーはいはいばっちり聞こえてますよー

「我は貴様だ、いや貴様のなかに植えつけられた種というべきか」

種？そのうち俺の体を食い破って成長するの？

「いや実際の貴様の体の中にいるわけではない、貴様が出会った生物がいたであろうあやつ能力は　あの生物が　望んだモノを相手に与える代わりに対となす同等の何かを相手に与えるというものでな」

ナニソレコワイ勝手に与えてその分料金を払えって詐欺みたいな能力

「今のところわかるのはやつがきさまに与えたのは「解説」と「俺様」くらいだな対となすのは「貴様の名」と「不運」と「俺様」だな」

うん、おかしいね！対って言うてるのにメリットが2つでデメリットが3つだよ、そして与えた「俺様」とその対の「俺様」ってなによ

「我には能力がありそれには反動もあるとそういうことだ、おそろく貴様も同様の能力が使えるはずなのだがそのうちわかることだ」  
「いまいち納得いかんのだが・・・ところでさっきから俺と話してるあんたは誰だ？」

「我は貴様に廃k・・・いや与えられたモノもとより名など無い」

今廃棄つて言ったよあの生物俺の中に自分にはやっかいなものだから廃棄していったのかよ  
あんたじゃ味気ないなよし！『レオ』って呼んでやるう自分でも我つて言ってるし

「いいだろう！我、レオはいつも貴様ともにある今はこのような時でなければ会話もできんがいつか語り合える時もこよう」

朝か・・・

今日も一日世界が平和でありますように

山賊とかゴブリンとかファンタジーはそれほど呼びでないんだよね実際のゴブリンは思った以上に気持ち悪くて全力で「殺し」にいったんだよねえ

ちなみに俺はふつーの一般人であって伝説の暗殺一家の息子だとか  
凄腕の殺し屋でもないただの人だ

ライトノベルとゲームを好み友人と《拳で》騙りあったりする普通の  
人だ。

さてご飯でも食べて「ギルド」とやらに行ってみるか！

【ギルド】モンスターの討伐・捕獲から家の掃除の手伝いなど数多  
くの依頼を冒険者等に紹介する仲介屋、各地に点在しその地域に応  
じた依頼があるFから始まりSまでのランクがありそのレベルに応  
じた依頼を達成し一定額を納めることでギルドランクを上げること  
ができる。当然ランクが上に上がるほど難易度・報酬も上がっていく

ギルドに行く中に入るとたくさんの人の間をすり抜けるよう  
にしてカウンターの前へ

「すみません！昨日守護隊の人にここへ来るように言われてたので  
すが」

「はい、ゴブリンの巣から救助なされた方ですね」

受付のおねーさんはとてもほんわかしていて話していると周りの時  
間ゆっくり進んでいる気がする

「えーっとおギルドにー登録はーされてますかー？」

おおー揺れた！おねーさんが笑顔で小首を傾げた瞬間たわわな果実がユサツと揺れたのを俺は見逃さなかった

「と、登録はしてないんだ」

おっといけないいけない慌てて声が上がってしまった、あくまで紳士的に、紳士的に

あ、おねーさんも笑ってる・・・

「ではーこちらのー登録用紙にー記入してーくださいねー」

おお、我様の言ってた【解説】のおかげなのか文字が読めるぞして書ける！

「ではーこちらへーどーぞーこの水晶にー手をーかざしてーしばらくーおまちーくださいねー」

水晶にしばらく手をかざしていると水晶の中心が黒く濁りだした

ナナシさんのおランクはあFランクからあスタートとおなりますうギルドカードはあ明日に完成しますのでえまた明日来て下さいねえ依頼は今からでもお受けることができますよおとのことだった

疲れるあの間延びしたしゃべり方はずっとも疲れる

ゴブリンの方の報酬は300Gで依頼としてはFランクの依頼だったそうだ。

ギルド加入の際に粗品としてもらったこの手甲付のグローブそれなりに使いやすそうなので装備して出店でも見て回ろうかなとギルドから出たところで声をかけられ振り向くと

キラキラの宝石がたくさんついた派手な鎧を来た剣士とケバイ化粧のねーちゃん、大剣を持った剣士の三人組が立っていた

「俺様はレイナルドⅡスフィリアス！スフィリアス伯爵家の次男である」

「私共はレイナルド様に使えておりますレイリアと」

「バルガスと申します」

「どうも、ナナシです」

伯爵ってどのくらい高い地位だったのかな

「やあやあナナシくん！君はとても運がいい！この私はこれからオーク討伐の依頼でダンジョンに行くのだが君も一緒に来ないかね？」

俺の見立てが正しければ盾か雑用を探していてちょうどいいところにFランク《新米冒険者》の俺が来たってところか

「報酬は300G、薬草とこの盾は前報酬であげよう」

まあダンジョンとやらに興味がないわけでもないから着いていつて

みるかな

「いいですよ！ただ道具を入れるバツクが無いので買ってきます」

「いいだろうではこちらで依頼をしておくので東門の所で落ち合う  
ことにしよう」

いろんな店があるけどバツクなんてどこで売ってるんだろう

おお！獣耳の美人さんを発見した！あの人に道を聞いてみよう

「すみません！道具屋ってどこにあるかわかりますか？」

おや？このおねーさん驚いているように見えるんだけどなんでかな  
俺変な事言っただけかな？

「私は獣人族だよ？」

「そうなんですかーかわいい耳ですね」

顔が真っ赤になってうつむいてる姿もいいです！

獣耳、少し褐色肌、金色の髪、ライトブルーの瞳そしてもっふもふ  
のしっぽ！

いいよね！尻尾を持つものは正義だよね！



「あつちに・・・道具屋があるよ」

「ありがと！おねーさんの名前は？」

「・・・イスカ」

「俺の名前はナナシ！」

と自己紹介したところで彼女がビクツと震える

「・・・どうしたの？」

「なんでもないの・・・またねナナシ君」

彼女は駆け足で人ごみの中へ消えていった。

どうしたんだろ・・・何か用事でもあったかな？とりあえず道具屋へ行くこつ

「いらつしゃーせー！ランタンから回復薬まで何でも揃うボルドー商会だよー」

あつっ！？あの店の周りだけ人が逃げてるよ・・・

「すみませーん」

「はい！いつもニコニコボルドー商会！今日のお求めは何でしょうか！本日はランプ油がともお買い得となっております！さあ！お客様は私どもの店に何をお求めになってまいられたのでしょうか！」

「ごめん、ちょっとこわい、ものすごい勢いでしゃべってるよこのおにーさん」

「今日冒険者になったんですがバッグとか必要なものを買いに来たんですが」

「ざわ……」

離れてこちらをみていた人たちが一斉にざわめきだした

「かわいそうに」 「誰だよ初心者にボルドーさんとこ教えたいの」

「私今使える最上位の回復魔法用意しとくからね」

「あのおねーさんの下着は黒だった」

よし、わかった……とりあえず最後の人その話を詳しく聞こうか！  
じゃなかった……おや目の前のボルドーさんがガッツポーズのよ  
うな感じでフルフル震えている

「我らボルドー商会！」

ん？後ろから声が……

「いついかなる時でも」

「お客様第一に考え」

「いつでも安全な商品を」

「お届けいたします！」

おい・・・どここの戦隊物ですか？爆発したよ？ボルドーさん後ろにいたはずなのにいつの間そこに？

「ボルドーさんの爆発が控えめだと！？」 「おいおい・・・明日フェーデル壊滅か？」

「いやまで！まだ終わったわけじゃない」 「あれは幻のF！？アレの為なら牢屋に入ることでも厭わない！」

最後の人！待てそのFを掴むのはおr・・・ゲフンゲフン確かにFは魅力的であるがいきなりおさわりは犯罪だ！ここは一言「素敵な胸ですね！揉ませていただけませんか？」と断りを入れるべきだ！

「そうだったな・・・ありがとうございます・・・」

言葉に出てないのに通じちゃったよ・・・

「お客様！失礼ですがお名前を伺ってもよろしいですか？」

「ああ、ナナシといいます」

「ナナシ様！私もボルドー商会は今後貴方様と友好的関係を築いていけると確信しております！」

「お求めの商品ですがこちらなどはいかがでしょうか！」

「商品A-15をここへ！」

「「「「よろこんで！……！」」」」

「」

もうここ道具屋じゃないよね

「こちらの商品は冒険者必須のバッグから水、薬草、野営装備など基本装備一式が詰まってお値段なんと500G！」

高いのか安いのかさっぱりわからん

「おや、ナナシ様この商品少し高いんじゃないかという顔をなされてますね！さすが！冒険者様！私どもも商人そのこの駆け引きは忘れておりません！いつもなら500Gのこの商品！今回はなんと300Gにて御提供させていただきます！」

一気に200Gも減ったよ

「やらにー！」

まだ何かあるのかよ

「今ならこのランプ油と戦闘でも採取でもどんなに乱暴に使っても切れ味の落ちにくい万能ナイフもつけてお値段そのまま300G！これでいかがでしょうか！」

すでに赤字じゃないのかこれ……

「あの、こ「んー！ナナシ様は商売上でいらっしやる！仕方ありま

せん！さらにこの雨をはじめ寒さか身を守るのにとても役立つコートを3枚つけましょう」「

あーうんこんなにつけて大丈夫なのかって聞こうとしたんだけどコトトついちゃったよ

「・・・それでいいです」

「「「「「ありがとうございますごさいましたあ！」「」「」「」

商人こえええ・・・

ゴブリンを倒したお金は飛んだけどいっぱいつけてもらえたしまあいいか

さて東門へ行こうか

その日、フェーデルの村で「胸を揉ませてください」と言いながら魔法使いの胸をつかんで黒こげとなり全治一週間の怪我を負った勇者がいたと翌日の朝刊で広まった

## その2 回復アイテムは大事 (後書き)

商人が元気になりすぎました

獣耳っていいよね・・・上目遣い涙目で獣耳たまりませんね・・・

さて次は伯爵さまとダンジョンです

どうするかなそろそろエロス&グロ交えていかないとテンションが持たないね

その3 戦闘開始 (前書き)

人物紹介ってひつ・・ようかな？

### その3 戦闘開始

「まだ来ないのか？くそっ！あのガキこのレイナルド様を待たせるとは！これも貴様があのガキを使えば楽にダンジョンを進められるというから入れてやったというのに・・・」

「申し訳ありません」

この貴族様：レイナルド「スフィーリアスが東門についたのは3分程前だというのに従者とこのやり取りをすでに5回以上も繰り返ししている・・・従者つてのはよほどMな精神の持ち主か大きすぎる器の持ち主でないとできない仕事だと門番は思い出した頃にナナシがやってきた。」

「お待ちせしました」

「遅いぞ！さっさとダンジョンへ行くぞ！」

「かしこまりました」

ダンジョンとは世界が自然と生み出した洞窟のようなもので気付いた時にはそこにあつたとされるためいつ誰がどのようにしてダンジョンを作っているのかは定かでない。

目当てのダンジョンは町の近くにあるらしいのでそこまで歩いていくこととなったがダンジョンに着くまでレイナルドの「俺様つてすごい話」を延々と聞く事となり戦闘が始まる前から気疲れしてしまつた。



「よし！ここが『力』のダンジョンだ！よし！ナナシ貴様から先にダンジョンに入れ！」

「入れといわれても入り口が無いんだけど」

「・・・それに触れれば入れる」

ダンジョンの入り口は小さなオブジェのようなもので手で触れると自分の周りが輝いたと思ったら次の瞬間には洞窟の中にいた。

そのあと俺、バルガス、レイリア、レオナルドの順に入ると持ってきたランプをつけて歩き出した。

今回はゴブリンのときとは違って盾があり初PT戦だったがレイナルドのくだらない話の合間にダンジョンの様子聞いていたおかげでぼんやりと理解していた。

地下1階はゴブリン、スライム、大蝙蝠などのモンスターで1対1なら俺でもなんとか倒せるレベルだった

このときはまだ自分が囿としてこのPTにいれられたことを理解していなかった。

地下2階へを降りていくと大広間があり入って数歩進んだところにソレはいた。

2mほどの高さのゴブリンのような姿、防具のようなものを身にまとい、口から垂れた唾液、手に持った棍棒・・・アレがオークか

「一匹だけか俺様にかかれれば楽勝じゃないか！お前ら！俺様の勇姿をみてるよ！」

とレイナルドが剣を抜いて切りかかる

「くらえええ！」

バキン！

音を文字に表すとそんな感じだろうか

レイナルドの剣はオークに傷つけることなく折れてしまった。

ブオオオオオオ！

「グホッ！」

オークの一撃でレイナルドが吹き飛び壁に叩き付けられる自慢の鎧はオークの一撃で丸い凹みが見えた

「レイリス！坊ちやまを！ナナシ！行くぞ！」

バルガスさんが叫ぶのに従い、オークへ駆け寄り近くで見るとさらに大きく見える。

ここに来るまでに学んだ事、俺の役割は相手をひきつけておいてバルガスさん達の攻撃のチャンスを作ること、なのでナイフっぽいものでオークを切りつける折れはしなかったものダメージもほとんどなさそうだ。

「避ける！」

バルガスさんの声が響いているが俺はとっさに盾を構えてしまった。オークの一撃は盾を砕き、レイナルドとは逆方向へ吹き飛ばされた。バルガスさんの大剣がオークの頭を粉碎し、オークの巨体が倒れる。バルガスさんはオークを倒した証拠としてオークの素材を剥ぎ取っていき、へこみのできた鎧を着けたレイナルドがレイリスさんと共にこちらへやってくる。

「おい貴様！貴様のせいで俺のこの剣は折れ、鎧はこの通りへこんでしまったではないか！すべて貴様のせいだ！」

見ていろって言ったのは自分ですよ？

「この剣と鎧の修理代として10万G払え！」

おいおい、そんな金持ってるわけ無いだろ？俺は初心者冒険者だぜ？2235Gしか持ってないぜ？

「そんな金持ってるわけ無いだろ？」

「これだから庶民は・・・貴様はこれから俺の奴隷としてこき使ってやる！」

ナニソレそろそろキレてもいいよな

「お！あんなところに宝箱があるではないか！見つけたのは俺様だから中身も俺様のものだ！」

宝箱に目掛けて走っていくクソ貴族様、毒針でもささって死なないかな・・・。

「レイナルド様！いけません！」

バルガスさんが制止をかけるがそれを聞かずに宝箱を開けるレイナルド

「中身は・・・」

カチツ

カリカリカリカリカリカリカリカリ・・・

壁の一部が開いていくのと同時に入り口が閉じていき、開いた所からオーク数匹のオークが押し寄せてくる。

「うわああああ」

レイナルドは叫びながらこちらへ戻ろうとしているが慌てすぎてこけてしまう。

《アイスバレット》【双断】

レイリアさんは氷の弾丸を打ち出しバルガスさんは大剣を振るうがオークの数が多く押され気味である。

四方をオークの群れに囲まれてしまった俺達に

「坊ちゃま！このままでは全滅です！撤退しましょう！」  
バルガスさんがクソ貴族に進言するが

「俺様がオークごときを相手に逃げれるか！」

と突っぱねてしまう。

そこへひととき大きく紫のオークが現われた。

周りにいたオークは雄たけびを上げるだけで仕掛けてこないようになり紫のオークがどんどん近づいてくる。

「デイスオークだ！？このダンジョンにそんなモンスターはいなかったはずだ！」

バルガスさんは舌打すると剣を構えてデイスオークに向かっていく！  
剣を振り下ろした時

何が起きたかわからなかった

大剣が折れて飛び

バルガスさんの体が粉々に砕ける。

デイスオークは持っていた剣を振っただけだった。

一番近くにいた俺は血飛沫を浴びてしまっていた、とても金臭い匂いがあたりに充満している。

「レイリス！あいつにオークどものが集中している今のうちに逃げるぞ！」

レイナルドとレイリスは水晶のようなものを持つと一瞬まばゆい光を出して消えてしまった。

オークたちの笑い声が響く

残るは俺とオーク達だけ

俺はまだ死にたくは無い、怪我は無いが恐怖で体が動かない。

震える足で立つと

ふっと静まり返る・・・

「貴様は逃げないのか？」

見た目はオークというモンスターなのに人の言葉を話している

「ひ、人の言葉を話すのか？」

声は上ずっていたが通じるだろう、足がガクガクしている

「人の言葉を話しているわけではない、人間！貴様は俺の言葉がわかるようだな」

楽しそうに笑うオークは不気味である。

「先ほど貴様達が殺した亡き戦友の弔いとして貴様を殺す」

ブウオオオオオオ！！

雄たけびと共に突っ込んでくるデイスオーク！唯一の武器であるナイフのようなものを構える。

周りはオークに囲まれていて逃げることは不可能、なら近づく！

俺のナイフをディスオークの胸に突き立てるがディスオークの剣は俺の体を貫いていた。

体から力が抜けていく・・・

とてもここは寒い・・・

体のそこから凍えていくようだ・・・

・・・おいおい、まだ敵は生きてるんだぞ？もう終わりか？

だって俺、剣で刺されたんだから、死んだんじゃないのか？

俺様の体があんな鈍らで斬られた程度で死ぬ体なわけないだろ？

ちっ！しゃーねーなー！お前に自分の体の使い方を見せてやるよ・・・  
・ ・ ・ ちゃんと《見て》るんだぜ！

「貴様如きでは傷もつけれんと思ったが、俺にナイフを突き立てるとはのだがこの程度かすり傷でしかないわ」

デイスオークが笑う、周りのオークたちもそれにつられて笑う



「そうか、ならば二回戦を始めようか」

剣で貫かれたはずの体から紡がれた声にすべてのオーク達から驚きを隠せなかった。

「馬鹿な・・・俺は貴様を貫き確かに殺したはず・・・」

「そうだな、確かに貴様は体を貫いた」

「ならばなぜ貴様が生きている」

「体を貫いた程度で俺が死ぬと思ってるのか？」

カカカと笑う、この異様にはこの部屋にいるすべての生き物が恐怖した。

「貫いて死なぬのならば！粉々に砕いてくれる！」

ディスオークが剣抜き走っていく

「これで砕け散れええ！ 剛腕爆砕」

爆音とともに周囲に砂煙が立ち込めるディスオークの剣は床に大きなクレーターを残す

周りを囲んだすべてのオークがディスオークの勝利を確信した今度こそあの人間は粉々になったと

砂煙がおさまっていくとうつすらとディスクオークの姿が見え出した  
剣を振り下ろした姿のままディスクオークは動かない。

「当たらなければどれだけ威力があっても無いのと変わらないのだ  
ぞ？」

砂煙がおさまった後オークたちが見たのは素手で体を貫かれたディ  
スオークと鱗に覆われた尻尾と額から1本の角を生やし鎧のような  
鱗を纏った『レオ』の姿だった。

「本調子ではないがちょうどいいディスクオーク貴様を喰らって我の  
魔力としてやろう」

ディスクオークの姿が一瞬揺らぐと『レオ』の中へ吸い込まれていっ  
た。

「オーク程度では腹の足しにもならんな・・・ああ、安心しろ貴様  
ら、すぐに同じところに送ってやろう」

レオは一番近いオークに近づくと半分に引き裂いた

それを見たオークたちは我先と開いている扉へ走っていく、しかし  
通路は開いていて向こう側が見えているのにまるで壁でもあるかの  
ように進むことができない。

レオはゆっくりと一番近いものから順に肉塊へ変えていった。

一面オークの屍骸で埋め尽くされた部屋で嗤う一匹の異形

数時間後にやってきたほかのPTは足の踏み場が無いほどに捨てられているオークの死体を見てまるで地獄のようだとつぶやいたという。

\*\*\*森の中\*\*\*

「ここは・・・町の近くかな？」

・・・おっ目覚めたか！・・・

「だれ？」

・・・俺だ、レオだ！・・・

あれは夢じゃなかったのか・・・

・・・どーだ、人間の限界とやらは味わえたか？・・・

人間のつていうか今の俺の限界だけどね

・・・安心しな、お前にもう限界は無い・・・

限界は無いって寿命とか向き不向きとか人には越えられない壁とかあるじゃないか

・・・ナナシ今の見た目こそ人のなりをしているが今のお前はれつきとした人外だ・・・

たしかにエロスは人一倍好きであの手この手を使っていたらいつの間にかエロスの人外ってあだ名がついてたけどそれでもやっぱり人間だよ！！

・・・ナナシ、そういうことではない嘘だと思つたのであればそこの木を殴ってみよ・・・

木？これすつごく立派な木だよ？俺が三人いてよつやく囲めるくらい、どこそこの御神木とかじゃないよね

・・・そこいらに生えてる木だ気にせず殴れ・・・

結果：木を貫通しました。

・・・というわけだ・・・

木が倒れるんじゃないやなくて貫くなんてどんな力してんだ俺。

……貴様はこの世界に来たときからこの力は持っておったが、  
大きすぎる力は貴様の身も滅ぼすと思ひ、我が抑えておったのじや  
が……

抑えてたのに？

……オークと戦つてる時に面倒になつてな（笑）我もおるし何  
かあれば起こつてから何とかすればよいだろうと思つてな……

面倒つて、そういえばオークと戦つてた時の姿は？

……本来の我の姿が人の形を取つたものだな……

そつか、さて町でこの姿だつたら不審者だよな

今現在の装備はこんな感じ

ぼろぎれに近い服胸の辺りに大きな穴

ズボンはホットパンツに近い

極め付けに全身が人間の血とオークの血でパリパリになっている

……このままでは無理だな、そういえば向こうに川があつた  
な……

いや血を落としてもズボンの替えなんて買つてないし

バッグはレオが回収してくれていたようだ

……今の貴様なら自分の魔力を変換して服程度簡単につくれるであろう？……

俺そんな便利なことできるの？

……本来のイーツとなったナナシにできぬことなどほとんどないわ……

ほとんどって……ん？イーツってなにさ？

……イーツとはこの世界で勇者と魔王が神の意思をはずれ世界に歪みが出た時に現われるという存在だな……

そのイーツとやらはその世界で何すんの？

……今の勇者は魔王を倒さず世代交代したとか聞いたことがあるな今は3代目だったか、そして魔王は魔王で魔物を増やし世界征服を狙っており、通常であれば勇者が魔王を倒すもしくは負けるなどとしてサイクルが回るはずだったが倒さないことによつてサイクルが滞りおぬしもみただろう先ほどのディスプレイのような例外が多発するようになるのだ……

じゃあ勇者に魔王に挑戦させればいいのか

……何の為にイーツにこのような力があると思ってるのだ？貴

様は勇者と魔王を倒して世界を征服する神となるのだ……

なるのだ！じゃないよ世界征服するなら魔王でいいじゃないか

……今の魔王にそこまでの力はないせいせい村を息一つで焼き  
尽くす程度だ……

魔王こわっ！それでよわいの！？

……全盛期なら吐息で町4つは簡単だったな、とにかくナナシ  
は世界を征服してついでに神を殺っちゃえばそれでいい……

神様の殺害を殺っちゃえって軽くないか？

……まあこの世界の神は概念だけであって意思などないからな  
……

と話をしている間に川についたな

流れも緩やかだしもぐってみるか魚が取れたらいいな

……そつと掴むんだぞ今のお前は粉々に砕きかねないからな  
……

お、おう

そーっと……

そーつと……

ここだあ！

……ここだあ！じゃないほらみてみる見事に魚の跡形も無いぞ、  
今なら魚の動きが簡単に追えるだろうに……

人のときの感覚でやつちゃうんだ

……こんなことでは女性の手もおちおち握れぬな……

うおおお！ソフトに！やわからかに！相手を傷つぬよう我が手は栄光  
を掴み取る！

……わざわざ無駄に魔力を使って時を止めて魚を掴むでない……

ご飯ゲットー！生……は怖いから火を起こさないと  
荷物から火打石を出そうとしたところで

……火もだせぬ男など女性は歯牙にもかけぬであろうな……

はあああああ！俺の魔力よ！炎なって燃え上がれええええ！バアー  
ニーング！

何も起きなかった。叫んだ俺の声はむなしく轟いた。少し恥ずかしく  
かった。

……そういえば、ナナシには魔法の使い方の説明をしてなかった  
な、ナナシの場合だと、【対象】【現象】【時間】さえ頭の中で



イメージできれば魔力の方が勝手に行ってくれるだろう……

ではもう一度、《魔力よ！燃え上がれ！バーニング！》

空高くまで炎の柱ができました。

……魔力の伝達率がよすぎるせいか……

その後服を作りコニード亭へ帰ってきた俺はとりあえず布団へダイブして意識を手放した。

その3 戦闘開始 (後書き)

主人公チートが始まります

きつとここまでがチエートリアルなんだろう。

その4〜誰でも最初はたたかう一択〜（前書き）

構成が甘すぎて物語が迷子

前はダンジョンへーこんなはずではー！セカンドチャンス！は逃さないっ！

その翌日のお話から始まります

その4〜誰でも最初はたたかう一択〜

「んー！いい朝だ！」

・・・ふむ心地よい朝日だな！・・・

レオの声が聞こえる・・・やはり昨日の事は夢でもなんでもなかったようだ。

そういえばこんな時の為の歌があったな・・・らら〜ら〜言葉にできない

現実逃避しても何も変わらないのでギルドに行つて昨日のクエストの報酬をもらいに行こう、あのクソ貴族がきつと報告を終わらせてるだろうから最悪死亡届けの撤回が必要となるかもしれない。

ギルドの入り口に立つと中から怒鳴り声が聞こえてきた

「おい！貴様！受付の分際で俺様を馬鹿にしているのか！同じことを何度も言わせるな！残り二名は死んでもうこの世にいない！さつさと報酬をよこせ！」

おつと聞き覚えのある声が聞こえて・・・相変わらず不快感がうなぎ上りするお声ですね。

「ですがナナシ様のギルドカードはまだ起動しておりまだ生存状態となっております、よってギルドとしてはクエストの報告を受け付けることはできませんー」

\*\*\*基本的にギルドは冒険者を縛る規則などは無いのだが初心者いきなり無理なクエストへ放り出すこともできないので最低限の

ルールが存在する、その中の一つにクエスト受注者Aが初心者BをPTとしてクエスト受けクエスト報告の際にAのみで報告することはできない、ただしBが生存している場合に限るというものがある  
\*\*\*

「そんなはずはない！バルガスが死んでいるのにあの初心者が生きているわけが無いだろう！ちゃんと調べる使えないクズが！」

あの馬鹿の頭がぱーんってならないかな・・・

昨日のすばらしいバストのおねーさんに向かって使えないクズとはあの胸はすでに凶器といっても過言ではない！現にほら入り口に立ってたはずの俺はフラフラといつのまにかカウンターにまで足を進めてしまっているではないか。

あれは一種の魅了だよね、恐るべし。

「き、貴様！？」

おっと、おねーさんの魅了に負けてカウンターにやってきた俺に馬鹿が気付いたようだ。

「ああ、悪いな死んでなくて、というわけでおねーさんは悪くないしクズでもない、クエスト報告いいかな？」

そういえばさつきまで口調がのびのびじゃなかった気がする、おねーさんもこんな奴相手だとむかついたりするんだろうか

「はいー報告はー終了ですーナナシさんはーEレベルーおめでとーございますーこれでーいちおーいっぱんレベルのー冒険者レベルとーなりますーそれとー先ほどはーありがとーございましたー」

会話に割り込んだ際に実は馬鹿が剣を抜こうとしていて気付かれなように腕つかんで止めていたのだがどうやら気付いていたようだ。

「でもー女性とはなすときはー目をみてくださいねー」

こちらがどこを見ていたかも御存知でした。

「おい、ここにもう用は無い！おい行くぞー！」

クソ貴族様が去って行く、付き人はレイリアさんの他にフードを被り、ジャラジャラと鎖に繋がれた人だったが慌ててがこける。

「おい！とろとろするな！さっさとついてこい！」

・・・胸糞悪くなるな・・・

手足を鎖に繋がれた人がそんなに早く歩けるわけが無い。

「おい、くsレイナルドさん」

いきなり猫がはがれるとこだった。

「なんだ庶民！この俺様にまだ何かあるのか！」

こけた人に手を差し伸べながらクソ貴族に話しかける

「この人なんで手足を鎖で繋がれてるのはは知らないけどあんたみたいに早く歩けない事くらいわかるだろ、鎖を解くか、ゆっくり歩かしたらどうだ」

「ふん！奴隷をどう使おうか俺様の勝手であるう？それにその女は獣人なのだぞ鎖に繋がれているのがお似合いの下級民族ではないか！」

クソ貴族は近づいてくると奴隷のフードをとった・・・

そこにいたのは金髪に獣耳をつけた褐色肌の獣人で昨日広場で会ったイスカだった。

「バルガスが死んだ代用品になりそうな奴隷を見繕っていたら昔、俺様に齒向かってきた獣人がいてなその時慰謝料代わりにこの娘を俺様の奴隷としたのだ！まあ齒向かった獣人は切り殺してやったのだがな！ははは！」

我が物顔でベラベラと話す馬鹿

逆に俺は冷めていった・・・どこまでも

「だまれよ馬鹿貴族」

イスカの鎖を千切って馬鹿の足元へ投げる。

「貴様！自分が何をしているかわかっているのか！俺は貴族で貴様は一般の冒険者！その一般の冒険者ごときが貴族である俺の物に手をだすということを！」

「悪いな、俺は自分の好きなように、やりたいようにやるだけだ！」

・・・ははは！いいなあ、それでこそ俺のナナシだ！・・・

顔を赤くしていた馬鹿にレイリアさんが何かを伝える。

「勘違いしているようだが奴隷の契約はすでに終わっている！闇神：  
デイルアの力を用いて装着者を主人の意のままに従わせる 従属  
の首輪 !その首輪がその獣人の首に着いているのがその証拠だ  
!」

「こんなもの壊してしまえばいい」

「闇神：デイルアの力の宿りしアイテムがそう簡単に破壊できる  
ものか！それを破壊しようとした者が闇に包まれて消滅したという  
話もあるがそれでも試すか？いいだろう首輪が破壊できればその奴  
隷を貴様にやろう、まあ無理だろうがなあ！ハハハハ！」

何がそんなに面白いのか高笑いする馬鹿を無視してイスカに話しか  
ける。

「イスカ・・・もしかしたら失敗して一緒に闇に飲まれちゃうかも  
しれないけれど挑戦してもいいかい？」

「・・・あいつの言いなりになるくらいなら死んだほうがマシ」

「OK」

首輪を千切ろうと力を込める、とたんに全身に痛みが走る！

「ぐっ・・・」

—— 汝、己の過ちを認めぬ気が ——

レオと話すように頭の中に声が響く・・・



イスカはぶつかっただけで奴隷にされたんだ、下級民族だからと罵られて

——我、汝を障害と認定、排除する——

イスカの首輪より黒い触手のようなものが俺の体を締め上げていく  
・・・この程度か！、我を内包せしナナシを傷つけるなら全力でか  
かって来い！・・・

「ああああああ」

首輪に亀裂が入る

「そんな馬鹿な！《服従の首輪》にヒビ！？まさか！そんなこと聞いたことも無いぞ！」

レイナルドは首輪を外そうとして消えていった愚か者を何人も知っているだからこそ闇に包まれて消えた愚か者と一縷の希望を失った愚か者という結末が当然待っているものと思っていた。

——馬鹿な！私の攻撃がまったく効果を成さぬだと！？このよう  
なことはあつてはならぬ——

・・・認めぬか、ならば認めさせてやろう！これが我らよ！・・・

「砕けるおおお！」

首輪が砕けるとあたりに光の粒が舞っていた。

「馬鹿な、嘘だ・・・」

ぶつぶつとつぶやき続けるレイナルド、まわりでみていた冒険者や町の人々もこの結果を予想できた人間はいなかったようだ。

イスカは「ありがとう、ありがとう・・・」と泣いている、その頭を撫でながら

やっぱり獣耳と尻尾はいいものだ・・・とナナシは呟いた。

夜になってようやく宿に戻って来ることができた。

首輪を壊した後、レイナルドはレイリアさんに連れられて屋敷へと帰っていった。

この国の権力は内包する魔力に比例するものであり、これまで町の人々は貴族の一方的な理不尽にも耐えるしかなかった。

それを一般人であるナナシがイスカを助ける事によって初めて貴族

に「反抗」したのである。

これを見ていた町の人々は大いに喜び今の今まで広場でこれを食べなあれを飲みなどというもてなしを受けたのだった。

イスカはいろんな人からお酒を振舞われて酔いつぶれて宴の終わりまでずっと俺の膝を枕にして眠っていた奴隷から解放された事が伝わったイスカの両親が眠っているイスカを見て「娘を頼みます」と言ってきた時には焦った。

・・・ナナシ、良き宴だったの・・・

ああ、楽しかったな

そんな時ドアがノックされた。

「開いてますから、どうぞ」

おっと、これまで誰も来るはずがないと思っていた分警戒してなかったけど部屋の中でレオと話しているのを聞かれたら独り言を言ってる怪しい人扱いじゃないか！

ドアを開けて入ってきたのは、イスカだった

「あ、あの！きよ、今日は本当にあるがとつごじゃいまひた！」

真っ赤になってカミカミな台詞で頭を下げる獣娘・・・イイネツ！じゃなかった。

「俺はしたい事をしたただだよ、それに感謝の言葉は昼間たくさん聞いたよ」

「あの、それで……ですね……」

なにか言いたそうにもじもじしている彼女に椅子に座ってもらい俺はベッドに腰掛けた。

彼女の顔は火が出そうなくらい真っ赤になって下を向いている。

ふむ、何か伝えたいことがあるようなんだが何を伝えたいのだろう。

……ナナシ、このメスの様子を見て何をしに来たのかわからぬのか？……

「顔を真っ赤にしてもじもじしている獣娘ってかわいいよね」（何かを伝えに来たというのはわかる）

「ひう!？」

イスカから変な声が漏れてこちらをずっと見ている……少し潤んだ上目遣いで

ん？もしかして漏れてた？

……ああ漏れていたな……

「あの……私を貴方のモノでいいので連れて行ってください!」

「あー、俺のモノって?」

「貴方の奴隷という事です」

イスカが手渡してきたものは昼間壊した首輪と似た物だった。

・・・獣人族が自ら自分をもらってくれと言っか・・・

「イスカ」

「はい」

「ダメだ」

「どうしてですか!？」

「俺は君に自由に生きて欲しかったから首輪を壊したんだ、なのに君は自分から首輪をつけてくれという」

「私は一度奴隷としてあの貴族に飼われました、獣人族は誇りを重視する種族なんです、ですが魔力は弱く襲われて奴隷にされて戦闘の盾にされたり慰みものにされることも珍しくないんです。」

「だから俺に君を飼えと・・・」

「ナナシ様は私を助けてくださいました!広場で会った時にナナシ様は私の耳や尻尾、首輪を見たくて私に話しかけてくださいました、アレがなければ私は舌を噛み切って死んでいたかもしれませんが、なんでもします!食事の用意も戦闘だって!それに・・・ナナシ様が望むのであれば夜の相手であつても!ですから私に首輪をつけてください!」

従属の首輪は2重にかけることはできないらしくナナシにつけても  
らえばいやな貴族に襲われることもなくなると考えたらしい

さてどうしたものかな?レオ

・・・今ナナシに足りぬものはこの世界に対する知識、この娘を連れて行っても問題は無かるう？それにお前はこの娘が嫌いなわけではないであろう？ならば何を迷う？・・・

いや、この子に首輪をつけて縛りたくないっていうのと奴隷っていうモノになじみが無くて

・・・ふっそんなことであつたか、首輪の方は我が何とかしてやるう・・・

レオと話し合いイスカと向き合う

「イスカ・・・本当に俺でいいんだな？」

「はい！」

「わかつたその気持ちうれしく思う、だが俺は君を首輪で縛りたくないんだ」

「でも、それだと・・・」

「だから君自身に俺のモノだつていう紋章を刻み込む」

「でもそんな魔法聞いたことがありません」

「ああ、だから俺に任せて欲しい、いいかなイスカ？」

「はい、私はすでに貴方のモノですから」

イスカがふんわりと笑った、その笑顔はこれまでの彼女のどの表情より美しく、可愛らしかった。

レオが提案した従属の首輪対策は従属の首輪に組み込まれているデイルアの魔法をイスカの体に刻印として刻むものだった。

心の臓に近ければその効果も大きくなるというので月明かりだけが照らす部屋の中でイスカは上半身をあらわにした。

彼女の金の髪が月明かりの中美しく輝き、豊満ではないがメリハリのあるボディラインと形のよい胸にナナシは息を呑む。

「で、では刻むぞ」

ナナシがイスカの胸にキスをすると不思議な模様が浮かんだ。

・・・これで首輪の魔法でこの娘は操れんよ・・・

「これで大丈夫だ・・・」

よと続けたかったがイスカに唇でふさがれてしまつて最後まで告げることができなかった。

「これからどうぞよろしくおねがいしましゅ！」

夜はまだ長い、このままイスカを押し倒してしまおう！そうしよう！

……我は何もみておらんし、利いておらん……

夜の闇が支配する部屋の中、月明かりというスポットライト、二つの影が再び近づき……

重なる。

後日、獣人族にとって首輪は婚約指輪のようなものと教わりイスカと二人で首輪を買いに行った



その4〜誰でも最初はたたかう一択〜（後書き）

ようやくヒロイン登場！

全部書き終わってから自分で読み返すことを楽しみにしている筆者です

マイリストに入れてくださっている方がいてびっくりしました。  
のんびりマイペースで投稿して行こうと思います

私の下手な小説でも読んでくださった方ありがとうございます。

少し変更しました！

その5〜時には逃げることも戦術〜（前書き）

前回は！

報告に行こう！ 貴族様コンチャー！ 首輪なんぞしてんじゃねえ！

とらごとの続き

その5〜時には逃げることも戦術〜

コンニチハ！ナナシです！現在ベッドの上で右腕に認めたくない重さとやわらかさがあります！

右腕を枕にして眠る美少女獣人のイスカ、ここでもし俺がタバコをくわえていたら・・・バードボイルド事後です！きつとメリルさんにも「昨夜はお楽しみでしたね」って言われる！

まあまあ俺！落ち着いて、れれれ冷静になれ！

「んっ」

ワーニン！わーにん！カカシ隊長殿報告いたします！イスカ's美乳が我が腕に押し付けられてトランスフォームしております！

・・・カカシ・・・

レオ殿！現状を打破する画期的な方h・・・

・・・くくくっ！煩惱にまみれた我が半身よ！理性のストックは十分か！？・・・

という問答をしているとパツとイスカの眼が開く、琥珀色の瞳がこちらを見つめている。

「えっと・・・おはようございます」

恥じらう顔がまたかわいい！

クリーンヒットオ！理性が砕けちったあ！そんな声が聞こえた

10分ほどイス力をぎゅっと抱きしめる

うむ！やわらかい！いい匂い！これはもう手放せない！

そんなことがあって少し遅めの朝食を取っていると銀の鎧を来た集団が入ってきて女将さんと何か話す少し困ったような顔をした女将さんが俺の方を指差す。

「我らは銀翼の守護騎士団副団長ヴリニア＝リーダールトである！ナシという冒険者がこの宿にいるとの情報を得て参上した、ナシというのはお前か？」

おや？何か雲行きが怪しい気がする。

「確かにナシは自分の名ですがどうかしましたか？」

「堂々としたものだな自分の行いを考えればなぜ守護騎士団が来たかも予想できるのではないか？」

何かしたかな？まずこの世界に来てから騎士なんていう知り合いを作った覚えも無いんだが

「思い当たる節があるようだな一緒に来てもらおうか！」

手を縛られて連行される

イスカも同じように手を縛られているようだ

「どこへでも着いて行きますよ」

ピコピコと耳が揺れる、癒されるなあ……

「ナナシの奴隷か、一緒に連れて行け」

表に止まっていた馬車に乗せられると馬車はすぐに出発した

「えっとこの馬車はいつたどこに向かっているのでしょうか？」

「守護騎士団本部のある王都ベルリアに決まっているではないか」

王都って事は首都みたいなものか、でつぶりして白いひげをたつぷり生やした王様が宝石のついた杖とか持って長いマントを引きずって歩いてる絵を頭の中に思い描く

イスカはナナシの隣にぴったりとくっついていた。

御者台で馬を操っていた兵士の一人が悲鳴を上げて『燃える』

「敵襲！総員戦闘準備！」

今の位置からだ敵の姿は見えない、魔法を使ってくるのであれば必要な詠唱こえがあるはずだがさっきの魔法には詠唱こえは無かった、ということは……魔法ではないのか？

……修練を重ねた魔法使いならば無詠唱でも魔法を使うことがで

きるのだぞ・・・

そうだったのか

隣にいたイスカにとってこのような争いごとは苦手なのである。耳を伏せて身を抱きしめている

仕方ないイスカのためにもこの襲撃を止めに行くかな

「イスカ、少し待っててすぐに終わらせてくるから」

イスカの頭を2回ほど撫でると馬車から降りた。

あたりの地面には赤より黒に近い大輪の華が咲き乱れ倒れた兵士や襲ってきた者が無数に目に入ってきた

OK！OK！落ち着けスプラッタやホラーは映画でそれなりに見えてきたじゃないか！吐きそうだが吐くのは後だ、イスカのためにもとりあえずこの騒ぎを止める

レオ、動きを止めるのに適した魔法ってないのか？

・・・無いわけではないが相手を視覚がとらえる必要がある、それよりも相手の死なない程度に痛めつけて動きを封じる方が手っ取り早いぞ・・・

なら電気を使つて麻痺させるか

ー我が魔力よー

「なんだこの魔力は!？」

「我に害する敵を貫け」

「いかん！総員防御体勢を取れ！」

疾走する雷

「横に・・・落ちる雷だと・・・!?」

おや、自分の敵だけ当たるかと思ったけど騎士の方々にもあたってるねえ

やっばい、副団長さんすつごい見てる

カカシの魔法の範囲外にいた兵士の皆さんに手伝ってもらい盗賊の確保としぶれて動けない騎士の方々を運んでもらった。

動けるようになった副団長さんに「貴様の魔法は危険すぎる」といわれ現在猿轡をかまされてます

「むーむー」

何かを話したいわけではないのですが猿轡をかまされるとムームー言ってみたくになります。

「えっとナナシ様が何か言ってるけどわからないです」

隣で困ってるイスカを困らせてしまったのでポンポンと頭に手を載せてなんでもないとジエスチャーで伝えるさて暫く静かにしていきましょうか。

・・・ナナシが騎士団なんぞに捕まる必要など皆無なのだから蹴散らしてしまえばよかるう？人が相手ではやりにくいというのであれ

ば我が代わりにやってもよいぞ・・・

いや、特に暴れる必要もなさそうだとおもう、イスカや俺に危害を加えそうになったら反撃はするけどこっちから手を出す必要は無いよ、お尋ね者になって追い掛け回されるのもごめんだしね

半日ほどかけて王都ベルリアへ到着した俺達は城へ到着したのだった。

王都ベルリア：初代ベルリア王により建国され魔王軍との戦も減っているとはいえ魔王領に近いこの国では年に一度武術大会が開催されることでも知られていた。

縛られたまましばらくここで待てと言われて暫く周りの様子を眺めながら自分の連行された理由を探していた。

王様が来てからは早かった・・・王様は玉座に座ると

「お前達には武術大会に出てもらおうそれまでは客間にて滞在するが  
いい」

「あの武術大会になんて出る気無いんですが」

「余はおぬしに発言の権利を与えた覚えは無い」

拒否権無しですか・・・近くにいた兵士がもつと敬わんかとか言っていた気がするが無視でいいだろう



で

王のおっしゃった客間はベランダはあるが結界が張ってあるよう  
で手すりから外に手を出すことができない仕様で扉の前には護衛とい  
う名目で常時二人以上の兵士がついていた。

城の中は歩き回ってもかまわないと許可はもらっていたがこれも見  
張りがつくこととなっている

「 武術大会に出す為にわざわざ俺を呼んで来た理由はなんだろうな  
武術大会って言うからには武術をきそうんだろうけど俺は武術なん  
て知らないしなあ」

「 えっ？ そうなんですか？ 」

おや？ イスカの前で武器の類をもったことも喧嘩した覚えも無いん  
だがなぜそんなに驚いているんだろうか？

「 ナナシさんは私の首輪を引きちぎるほどの魔力を持ってらしたの  
で当然相当な地位にいるお方で剣なども使えるものだと思っていま  
した」

この世界では魔力量が高ければそれなりの地位に多いことが多  
い。つまり魔力量が多い＝貴族のようなお偉いさんという式が出来上  
がっていたわけだ。

そして貴族達の間ではほぼ同じ魔力量を持つ場合武術によって階級  
が分かれることもあるため地位が高くなればなるほど武術も使える  
という事がいえるわけである。

ただし魔力量が桁違いに多い王族や一部の魔法使いは魔法に特化し  
武術が使えない…いや使う必要がないらしい

見張りの兵士に聞いたところ試合は降参するか相手が気絶するまで続くそうだ。

「仕方ないな、一試合目で降参して帰らせてもらおうかな」

やることも無いのでイスカの髪や尻尾をブラッシングしつつそんなことを言っていると

「邪魔するわよ」

ドレスに身を包んだ美少女登場！歳は17くらいで手入れの行き届いた金髪が腰辺りまで伸びている

「これが今回の挑戦者？これまでと比べると頼りない感じねえ」

「あなたは誰で何のようだ？」

「え？私の事しらないの？・・・ホントに？さっきお父様と一緒にあったのに？」

この突然現れた美少女さんはびっくりしたようにそんなことを言っていた、当然俺はこの間もイスカのブラッシングをしていたのだが

「私の名前はフィルネシア、フィルネシア＝ベルリア！第2王女よ」

「そっか、で用件は？」

「えっと、私は第2王女なの・・・よ？」

このような対応されたことが無いのだから、急にオロオロしだす王女様、ブラッシングが終わったので王女様に向き合ってイスカにやるように頭をポンポンと撫でながら

「そうだな、フィルネシアはえらいねー」

「そうなの！フィルは偉いの！ってそうじゃない！」

おー王族もノリツッコミってするんだな

「貴方が今度の武術大会に出るって言うてきた凄腕の冒険者なんでしょ？」

「いや、朝のおいしいご飯中に拉致された一般庶民だ」

「くっお父様、嘘の情報を流したわね」

何でも次の武術大会で優勝した相手と婚約を取り決めるという今回は庶民からの参加者もいて庶民が優勝した場合婚約を破棄してもよいと約束をしたらしい

「へー、優勝候補ってどんなやつなの？」

「キリアン公爵家のダリル」キリアンよ、武術と魔法の腕はこの王国一だって聞いているわ、ただどかなりの自己陶醉者でおまけにミシエル」キリアンにべったりなのよ！」

「ミシエル」キリアンってのは？」

「ダリルの母親よ」

ナルシストのマザコンとは・・・このお嬢さんも大変だな

「まあ頑張れや！」

・・・ナナシ、お主は鬼か・・・

「え！？なんでよ！ここまで聞いたんだから普通なら貴方のために優勝をささげますってなるところでしょ！？」

「ははは、馬鹿も休み休み言えよ？優勝しても俺にはなんのメリットも無い上に俺はいきなり連行された身だ、一回戦が始まると同時にリタイアするんだよ」

「メリット？リタイア？」

「意味は利点と降参だな」

「なんでよー」

軽く涙目になってるフィルネシアはかなりかわいかった・・・

「失礼しますよ！」

おっと客のよく来る日だな

「おや？フィルネシア王女いつもお美しい！このような場所でお会えるとは恐悦至極にございます」

ダリルはフィルネシアの手にキスをする

「ダリル公爵ここへは私に挨拶に参られたのですか？」

「おお！そうでした、初めまして！私はダリル「キリアンと申します！真紅の騎士の二つ名を持っております、貴方が庶民から武術大会に出るといふ奇特な冒険者ですか？対戦時にはせいぜい頑張つて私の美しい勝利の礎となれることを誇りにおもつがいい！」

今気がついたとばかりにオーバーリアクションを取るダリル公爵、顔立ちは整つてるしさらさらの金髪体つきは赤い鎧を着ているのでわからないがフィルネシアの腕に鳥肌が立っているのが見えるイヌカも怖がっておれの後ろに隠れている

よっぽど苦手なんだな。

「これはこれは、ダリル公爵様こんな私のためにこんなところまで来ていただけるとは貴方の噂はかねがねより聞かせていただいております、私などでは貴方様とお話するなどとても耐えることができませんぬどうかととお帰りやがってくださいませ」

ばっちり営業スマイルつきだぜ？

・・・うむ、ダリルとやら青筋が浮かんでおるな・・・

「貴様いい覚悟だ！当日は八つ裂きにしてオークどもの餌にしてやるから覚悟しろよ」

「楽しみに待っててやるよ！ほらさっさと帰れよお家でママが待ってるんだろ？」

「失礼する！」

さて、勢いで喧嘩を売ってしまったがどうしたものか

「貴方、一回戦で負けるんじゃないやありませんでしたの？」

不思議そうな顔をするフィルネシア

「そのつもりだったんだ美人さんが嫌がってるのは無視はできないかな」

イスカとフィルネシアの頭をポンポンと撫でてふと思いつく

「なあ、一回戦の相手をあのナルシストにすることはできないか？」

王族ならそれくらいできそうだと思ったが

「残念ながら武術大会には王族といえど干渉することはできませんそれに彼はアレでも前回優勝者なので準決勝までのシード権を持っております」

アレが前回チャンピオンとは世も末だな

「よく考えたらおれはあいつに当たらずに武術大会を去る事もできるのか」

「このまま戦わずに去るときつと貴方に暗殺者がつきますよ」

・・・ナナシ自体に暗殺者をつけても返り討ちに遭うだけなのだが  
イスカを守りながらだと難しいと言わんが面倒だろうな・・・

「わかりました、ならば優勝すれば金貨20枚でいかがでしょう？」

お金が特に困ってるわけでもないんだがな

「いや別に金には困ってないから」

「なら・・・」

「だがな美人さんの頼みだからな優勝狙ってみるわ」

つくづく美人に弱い俺・・・そのうち美人局にもひっかかるんじゃないのか

「ありがとうございます、これから私の事はフィルと呼んでかまいません」

「わかった、フィル、ところで剣を売っている店はあるか？」

「ええ、城下に行くつかありますよ」

「なら明日は城下に行って武器探しだな」

「御自身の剣はありませんの？」

ずっとこれだったからとゴブリンの持っていたナイフのようなものを見せる

「こんなもので戦っておられたのですか・・・」

まあねと返すとフィルは兵に呼ばれて去っていった。

夕食は部屋に料理が運ばれてきたが奴隷用の食事は別に用意してありますといわれた時にそっちは結構ですと断って二人で運ばれてきた料理を食べた、まさか異世界に来てあーんが体験できるとは思わなかった。

この国には沐浴はあってもお風呂にはいる習慣は無いそうでお湯をもらって体を拭いた、そのうちお風呂に入ろうと固く誓う

その夜、奴隷にはベッドは与えられず床で眠るのが普通だそうだが俺はイスカと契約してから必ず床ではなくベッドに寝かせるようにしていた。

いつもは別々のベッドなのだが今日は同じベッドで眠ることになった。

朝というものは必ずやってくるものだ、とりあえず目の前で幸せそうに眠る獣娘を抱きしめてから布団から出て顔を洗おうかと考えていると扉が勢いよく開く

「ナナシ！入りますよ！」

ノックという礼儀は無いのね  
扉を豪快に開けて入ってきたのはフィルだったが、開けたポーズのまま固まっている。

「どうかしたか？」

「あの、差し支えなければ教えていただきたいのですが、貴方達の



「関係は奴隷と主ですわよね？」

「いや？」

「でも彼女の首には《従属の首輪》がありましたわよ」

なるほど、イスカの首には首輪がついている、服従の首輪にそっくりな単なる首輪だったのだがフィルには服従の首輪に見えるのだろうか

「あれは普通の首輪だ、だが他の奴等に取りられないように保険をかけてあるのさ」

「そ、そうでしたの、とりあえず服を着ていただけませんか？」

「おっとこれは失礼」

この世界に着てから眠る時は上半身は裸でズボンのみという格好だった。イスカにいたっては下は下着上は何も無しという格好で寝ている、イスカいわくこれが普通だそうだしシャツの着て未だに眠り続けているイスカに布団をかけなおすとフィルの方へ振り向いた

「それで？何の用だ？」

「ナナシ貴方は少しは私を敬おうとは思わないのですか？」

もう仕方ないなあフィルさんは・・・（どこぞの青いタヌキの声っぽく）

「フィル、このような時間に貴方のような美しい方が私を訪問して

くださるとはとてもうれしく感じます。」

と少しタカ ツカをイメージしつつオーバーリアクションをつけながら手を差し出してみる。

フィルはゆっくりとその手を取るだけで何も言っていなかった。

おや？何か言ってくるかと思ったのだが無反応か・・・ならばもう少し遊んでみようかな

「きゃっ」

その手を引きフィルを抱える

「フィル、貴方のきれいな目を見ていると思わず手が出てしまいました。」

アワアワするフィルこれはこれでかわいいな  
さて仕上げだ

顎に手を添えて顔を近づけていく、フィルは目を閉じる。

目を閉じたところで鼻をつまんでやる

「ふにゃ！何するのよー！」

「寝ぼけているお姫様に目覚ましをしてやったただけだよ？で？用件はどうしたよ」

「あ、え、ん？あ、そうー剣のことよー！」

「俺の使う剣か？」

「そう！今日一緒に鍛冶屋まで行くわよ！」

百面相したあとにそついい残すと足早に去っていった。

鍛冶屋に行くならイス力を起こしておかないとな、イスカーおきろーあさーあさだよー朝ごはん食べて鍛冶屋に行くよー

「抱きしめてくれたら起きれる気がするー」

抱きしめるついでに頭をぐりぐりとなでてやる

朝食時はちゃんと二人分用意されたので朝食を取って鍛冶屋に行くのはいいがどこで待ち合わせるのだろうか？と考えていたらフィルの方から来てくれた。

「さあ！鍛冶屋にいくわよー！」

ワンピースを着てどこかの令嬢という感じに変装？しているフィル

「そんな・・・」

そんなに焦るなよって言おうとしたがここはからかう方向でいこうか

「フィル、その服とてもよく似合っているよ、今すぐその服を剥いでベッドに押し倒したいくらいだ」

「え？」

「冗談だ」

顔を真っ赤にしてうつむいたフィルを見てこういう冗談はなれてないんだなと実感する

「ナナシ・・・私ナナシになら押し倒されてもいい」

イスカはイスカで冗談が通じてなかった。

その5〜時には逃げることも戦術〜（後書き）

物語がほとんど進んでませんね。

次の回は鍛冶屋で剣を買いましょう！ええ！ええ！そうしましょう！

その〆〆忘れ物はないかい？〆〆（前書き）

鍛冶屋！冒険者には武器が必要ですよね！

今の今まで主人公に武器を持たせるって概念をすっかりしてたよ

武器屋のおじさんも言ってたじゃないか「武器は装備しないと意味無いぞ」って

その6〜忘れ物はないかい？〜

さすがは王都の市場フューデイルの町の比じゃない見渡す限り人人人！

・・・どこに何があるのかもわからんな・・・

イスカは俺の隣にぴったりくっついていて、フィルは前を付き人の人と歩いているもちろん変装はしている他にもこっそりと護衛の方々がいるそうさだ。

「ナナシよ！まずは鍛冶屋だったな！」

「ああ！場所わかるのか？」

「ここは私の庭なのよ？すべて把握してるわ！当然！」

それはちよくちよく城から抜け出して城下へ来てたつてことですよね・・・お付の人たちご苦労様です。

「ついたぞ！ここだ！」

ポルドー商会 鍛冶屋

看板にはそう書かれていた、猛烈にいやな予感がする。

「親方ーいないのー？」

フィルはこっちの気も知らないですでに店の中へ踏み込んだ瞬間ム

キムキな手に抱きかかえられる。

「ラッツシャーセー！おう！フィル嬢ちゃんじゃないか！今日はどうした？また兵士の剣でも折ったか？それともいたずらに使うトラバサミか？そついえばこないだ言つた冒険者から良質な鉱石が手に入ってな今なら伝説の勇者の剣にも負けない一品ができそつだぜ！」

・  
ボルドー商会に入る条件にマシンガントクって入ってるのかな・

「そつじゃなくって今日はこつちのナナシに剣を一本欲しくて」

フィルを降ろすとこちらへやつてきた

「おつにーちゃん！今日は剣をご所望かい？ショット・グレート・レイピア何でもあるが希望はあるかい？」

おや、ここは向こつこの商会と違つてまともなのか？

「片刃の剣つてありますか？」

「オーダー！片刃の剣」 「「「「片刃の剣よろこんでー！！」

「！」「」  
前言撤回！一緒だ・・・よくみたらこの人の顔フューデイルでみた顔と一緒にんだが・・・分身？

「我らボルドー商会！」



くっ！また後ろか！

「いついかなる時でも」

「お客様の身の安全を考え」

「最高の輝きと切れ味を」

「お届けいたします！」

また避け切れませんでした。

よくみたらイスカは侍女の人があらかじめ避難させてる、GJ侍女の人！できれば俺も助けてほしかった

「しまった、ボルドーさんとこの終わっちまったか？」

「いや、まだ始まったばかりだ」

「俺これ終わったらパン屋のあの子に告白するんだ・  
・・・おっといたずらな風が 羽ばたけ白き純白」

「「「みえ・・・ない・・・だと

っ  
「「「

おいおいスカートめくりのために魔法を使うのか・・・

「それで！おにーさん既存の剣の内片刃はここにあるので全部ですがこの中から選びますか？それともオーダーメイドで作りますか？」

そうだな、とりあえず資金を見せてこの中から買えるやつを分けてもらおうかな

「えっと今手持ちがこれくらいなんですがどれが買えます？」

財布をひっくり返す金貨や銀貨と一緒に赤と緑の石もでてくる

「お客さん！この石どこで手に入れたんだい！」

おや、キレイな石だからお守り代わりに入れておいただけなんだが  
単なる石じゃないのか？

「えっとモンスター倒した後に落ちてたんですが」

「そんな簡単にこれが入るはずがねえこれは魔晶石っていつて  
魔力の塊みたいなものなんだ、剣や魔法をつかってもなかなか採取  
できないってんで市場に出回ることはまず無い貴重なものだ人生で  
一度お目にかかれたらいいってレベルの代物だぜ？」

「おや、ボルドーさんの様子が・・・」 「おめで

とう！ボルドーさんは燃える天災へ進化した！」  
イフリート

「久々にみたな結界の準備するぞ」

「oooooooooooooo!!!」

結界が必要になる展開って予想がつかないんだが。

「おうにーちゃん！にーちゃんも武術大会に出るのか？」

「その予定なんだ、気がついたら出場が決定しててそっ・・・」

「なら話が早い！これを使って俺に剣を作らせてくれないか！金は  
いらぬ！俺のこの手が叫ぶんだ、この魔晶石を使って最高の剣を  
作れってなあ！」

熱い！リアルで熱い！なにこの熱量！？

「ああ、おっちゃんの体質でな興奮すると熱を出すんだ・・・奥さんの浮気騒動の時は辺り一面焦土と化した」

え？なにそれ天災レベル！？

「きつと！武術大会には間に合わせる！それまでこいつを使つてくれおおよその形はこれと似たような形になるはずだ！」

「えつと・・・お願いします」

「おっしゃ！！俺はボルドー商会鍛冶屋をやつてるバルドローってんだ！よろしく頼むぜ！てめーら！集まれ！貴族どもの生ぬるい剣作くすてつつてる場合じゃねえぞ！これから俺が・・・」

すごい勢いで魔晶石もつて鉄火場に入つて行つたな

渡された剣を見る・・・赤っぽい刀身を持つ片刃の剣重さはそこそこ10キロくらいかな  
ナイフよりかはマシか

「あれ？あのカカシさん、これ刃がついてないです」

いつのまにかイスカが横から剣を眺めていた。

だよね、これ遠目からみたら単なる剣なんだけど刃がついてないも  
しかしてモンスターを叩き切る剣？

・・・これはめずらしい代物を持つてきたものだ・・・

レオこれ知ってるの？

・・・これは、魔力を使用して切る剣でな、剣に纏わせた魔力によつて間合い、切れ味、をかえれると聞いたことがある。過去の戦場ではバーストフレアという魔法を剣に纏わせて相手の体に触れた瞬間に爆裂させて再生させないという使用法もあつたのだぞ・・・

すごいものなんだな

・・・いや庶民はそれほどつかわんだだけで魔力が潤沢にある貴族共にとつては手入れのいらん便利な道具だろうよ、ただしこれを使うにはそれなりの修練と想像力が必要で今はほとんど使われておらんがな・・・

「さっきのスカートめくり犯は貴方ね！」 「！！！！？？？な  
ぜばれた！！！！！」

「乙女の勲・・・といたいけど魔力の残滓がべつたりなのよ  
！」 「くっ！うかつ！！！」

「女性の敵は速やかに滅びるべし！！滅びろ！乙女の業火！《バーストフレア》」

「こんなところで死んでたまるか！我は行かん！ハーレムという夢  
を得んがため！《疾駆・閃光》」

さつき戦場で使われるとか言われた魔法が目の前で使われています

・・・うむ、いつのまにか世界の戦場は一般家庭まで巻き込んでおつたのだな・・・

地面に開いた穴をせっせと埋めていく周りの人々これも日常なのだろうか。

さっきもらった剣を両手で振ってみる・・・周りを見回して・・・

片手で振ってみるさすがにぶれる、筋力足りてないね

・・・魔法の補助を使ってみろ、過去にはもっと重量のある武器もあったが魔法による軽量化により片手で使用した例がある・・・

そういえばこの剣は魔法を纏わせたりできる剣、ならばアレができるかもしれない。

「ナナシ、フィルが呼んでる」

「お、おう！すぐ行く」

イスカに呼ばれてフィルたちの下へ

昼食を何にしようかと話しながら歩いているとソースの焦げる匂いがする・・・

「じ、このにおいは！」

「どうしたの？」

「良いにおいね」

露天から漂ってきたにおいはまさしく好みソースの焦げる匂い！  
露天をのぞくと中では肉にソースを塗って焼いていた。

「お、いらっしやい！5本で銅貨1枚だよ」

「え？」

「どうしたの？そんなにお肉食べたかったの？」

「故郷にこのたれによく似たものを使った料理があっただけこれとは違っただけだ」

一本もらったが味はソースそのもの悪くはないが、ソースなら好みやたこ焼きが食べたい、ここの生活は東洋というより西洋風なものが多いということはタコやいかを食べる食文化も無いんじゃないかな。

そう思ったら余計にたこ焼きが食べたくなってきた。

この町で武術大会を終えて魔王や勇者を何とかするよりもまず港町へ行こうと心に決める。

城で軟禁状態の俺達だがこうやって外出していいのだろうか見張りはいるとしても、そういうえば王様の様子は適当に過ごしておけというどうでもよさそうな感じだった、まさか俺たちを呼んだのはフィルだったりするのか？ダリルを優勝させたくないというなら俺よりもっと強い冒険者はいくらでもいたはずだ、Eなんてようやく一人前になった程度の実力がSやAのような高ランクより目にとまった理由が未だにわからない。

・・・首輪の件は貴族たちからしたらなんとしても隠したい事実だろうから報告するとも思えんからな、少し対策として今宵から夜

間に魔法の訓練をするか、今のままでは実践では使えんだろうから  
な・・・

肉をほおばり幸せそうな顔をしているイスカをみながらそんなことを  
考えていた、が次の瞬間にはイスカとフィルに引っ張られて祭りの  
喧騒の中へ紛れていった。

城に戻ってきた2人はフィルと分かれてナナシに与えられた部屋に  
いた。

「少し散歩に行つて来る」とイスカに言い残して部屋を出る目的地  
は裏庭である。

・・・ナナシお前の魔力は制御しなければ人を殺める恐れが十二分  
にある、よつてコントロールの訓練から始めようと思う、まずは魔  
力を手に集めよ手に収まるサイズでな・・・

こんなものか？

・・・魔力の量が多いわ！、これの10分の1でも使い方しだいで  
は人を殺せるわ！・・・

軽く出したつもりだったんだが軽く俺の顔より大きいな・・・

・・・魔力をコントロールするのはナナシ自身のイメージと精神力  
だ・・・

お！小さくなった！

・・・ばか者！サイズだけ変えても意味が無いだろっが！もっと魔力を散らせ・・・

そんなやり取りを5時間ほど続けてある程度制御できる頃には月が頭上で冷たい光を放ち、城の中も見回りの蠟燭の光が見える程度になっっていた。

部屋にもどったナナシがみたのはベットで丸くなっているイスカの姿であった。

待っていたけど疲れて寝ちゃったかな、イスカ今日のお祭り楽しそうだったからな。

そつと布団をかけてやり自分もベッドにもぐりこんだ。

・・・ナナシのやつまさかあのような方法で魔法をコントロールするとは我も魔法使いとしては異端とされたが我を宿すことだと思いついた魔法か、これだからナナシは面白い・・・

翌朝、レオにただ剣を振っついては芸が無いと言われて、仕方なくギルド行くことにしました、イスカもギルドに登録しておくという目的もあつたのでついでです。

今回は見張りという名目で一人騎士をつけるならという条件でギルドで仕事を請ける許可を得ました、ただし数日かかるようなクエストはダメだとか。

その騎士様が来るのをこうやって待つてるわけですが、来ませんねー



「イスカ、一日で終わるクエストをやってくるだけだから部屋で待つててもいいんだよ？」

「いいの、私はナナシと一緒にいる。」

「遅れて申し訳ありません！お久しぶりですナナシ様」

そういつて現れたのはゴブリンの巣から救出した人質ーズの一人ベルムンドさんだった。

彼は城の警護兵をしていたまに休暇がたらギルドからのクエストを受けていたという。

「この間は恥ずかしいところをお見せしました、あの時ナナシ様が来てくださらなければ今の私はありませんでした、本当にありがとうございます。うございしました。」

「いえいえ、偶然あの巣を発見して探索してただけですので」

「ナナシ・・・」

「そちらはナナシ様の奴隷・・・ですか？」

急に俺の服をつかんだイスカにベルムンドさんが不思議そうな目を見る、普通奴隷が主人に心を許すことは無い。

「いや、俺の旅の仲間ですよ、こっちはベルムンドさん以前ちよつとしたことがあって知り合った人、でこっちはイスカ、奴隷にされたのを開放しました。」

「奴隷を解放？金を渡して買い取ったではなくて？」

「細かい話は長くなるので省きますが買い取りではなく開放です、ですのでイスカは奴隷ではなく俺の仲間です」

「それは失礼、無礼を申しました、イスカ様」

その場でベルムンドさんはイスカに対して謝罪する。

「え、ええつと・・・気にしてないです」

「そうそう、ベルムンドさん俺の方がどうみても年下だし敬語はおかしいんで様とか取っ払っちゃってください」

「いや、ですが私は今回王からの命を受けて護衛してますので」

「なら前回助けた礼つてことで敬語なくしてください、そういう対応になれてなくてさっきからむずむずするんですよ」

「わかりました」

そんなやり取りをしながらギルドの掲示板をのぞいて見る。

さて一日で終わるクエストでいいものは無いかなつと・・・

「そういえばクエストを受けるとおっしゃ・・・言っていましたかなシはレベルいくつなんですか？」

「レベルEだよ」

「Eレベル!？」

ゴブリンを一匹相手するのは簡単だが巣を攻略するとなると複数のゴブリンを相手するとそのレベルはD-Cレベルとなるましてあそこの巣のゴブリンの親玉は魔法を一切受け付けず自分の剣でも切れなかった相手だ、ベルムンドのランクはCランクでそれ以上だと思っただけに驚きを隠せなかった。

「まあそんなにいそいでランクを上げる必要も無いと思ってるから旅しながらゆっくり上げていこうかと思ってるんだ」

「そうなんですか、お、これなんかどうですか？」

「魔法庁にて片付けの手伝いか、これなら一日で終わりそうだしコレにしますね」

「はい、ではこちらのクエストを受注ですね、御一人ですか？」

「いえ、ベルムンドとイスカの3人です、あとイスカは登録してないので登録したいんですけど」

「わかりました、ではこちらへ」

イスカの登録が済み魔法庁へ向かうと部屋いっぱい箱が積み重ねられていた。

「いやー、君達がギルドから来た冒険者の人？私はウォルター、ウォルター」デビットだ、ここの所長を務めている。」

「ナナシです」「イスカ……です」「ベルムンドと申します」

「早速だけどとりあえず君達にはここの木箱を上回まで運んでもらいたい」

「わかりました」

木箱はおよそ50、結構な数がある、さくさくやっていかないと日没までに間に合わないかもしれない

「ん、これは結構重いですね、イスカさんは大丈夫ですか？」

「大丈夫・・・獣人族は人族ほど弱くないから」

へー、イスカの華奢な体つきしてるのにベルムンドさんが苦勞して持ち上げた木箱を片手で運んでいる、目を疑う光景だわ

「さてと、俺も運ぶかな・・・って重っ！」

イスカがひよひよひよ持ち上げてるのみで自分も簡単だろうと思っただけけどナニコレ超重い。

ギリギリ一個をよろよろ持ち上げる重さだ。

「仕方ない、こういうときこそ魔法だよな。」

昨日の特訓で覚えた魔法《強化》体に魔力を纏わせることにより体を強化する結構ポピュラーな魔法らしい。

体を強化した俺と何も使っていないイスカが木箱をどんどん運び思っただけより早く運び終えることができた。

お礼も兼ねて少し遅めの昼食をおごってくれるというので食堂で「飯を食べていると

「所長！大変です、研究中の精霊獣が暴走しました！」

「なんだとっ、すぐに行く！」

「よかつたら手伝いましょうか？」

「助かる！こっちだ！」

そこにはトラのような獣が雷を放ちと豹のような獣が辺りを凍らせていた。

「あいつらはなるべく生かしたまま捕獲したい、できるか？」

「やってみます」

とはいったもののどうしたものかな

「イスカ、ベルムンドさん魔法は？」

「回復が・・・少し使える」

「ファイアボールぐらいしか使えない」

「イスカは支援、俺とベルムンドさんでアレを気絶させます」

「おう！」「・・・わかった」

ベルムンドさんが剣を抜き虎へ向かっていく、虎が迎撃しようと雷を打ち出す前に ノイズ で妨害する。

ノイズ : ナナシオリジナル魔法、ガラスを引つかく音に似た不快な音を大音量で聞かせる、ただし実際の音ではないため周りには聞こえない。

その間に豹に向けて 疾走する雷 を放つが氷壁によって阻まれる。

・・・守りながらではちがあかな、一気に決めるナナシ・・・

強化 を目、手、足にかけて一気に間合いを詰め氷壁を破壊しその奥にいた豹もまとめてなぎ倒す。

虎の方を見るとベルムンドさんが間合いを詰めれず苦戦していた。

「ずぶぬれ小僧が泣いている、雨に降られてないている！ 濡れ鼠の憂鬱」

濡れ鼠の憂鬱 : ナナシオリジナル、空気中の水分を集めて相手の体をずぶぬれ状態にする。

・・・ナナシ、お主詠唱センス無いな・・・

うるさい、次から無詠唱にしよう。

「はああ！」

虎へ鞘をたたきつけて虎が気絶する。

「いやー助かりました、ところでナナシさん今の魔法は？」

「昨日思いついた魔法なんですけど役に立ってよかったです」

言えない・・・透けたワイシャツってエロイよなって考えたらできた魔法だなんて。

「そうですか、このあとよかったら魔法庁恒例の祭りにナナシさんも参加してみませんか？」

「何するんですか？」

「みたらわかりますよ」

つれてこられたのは体育館ほどある大きな部屋でここの研究員と思われる人たちが2列に並んでいた。

「では、軽く準備体操してください」

ウォルター所長がそう言うと言ったと研究員の人たちが向き合い一方が魔法を打ち一方が魔法で防ぎ始めた。

「とまあこんな感じで魔力順列を決める大会でもあるんですよ、ルールは簡単攻撃側は捕縛魔法を打ち、それをもう一方が防ぐそれだけです」

「さっきの精霊獣との戦いを見てたらナナシ君のほかの魔法も見たくなってるね」

捕縛魔法か目の前でやってるのをみると鎖のようなものが巻きついたり、足元が沼のようになっていたり多彩である

「それじゃあ本番行ってみようか、今回は趣向を変えてこのナナシ君を捕まえた人が一番って事で賞金1000Gだ！ナナシ君は捕ま

らなかつたら1000Gね」

「えっ!?!」

「場所はこの部屋のみ制限時間は10分間!それじゃあ始め!」

いきなりかよっ!研究員の人たちが走りながら詠唱してくる・・・約20人ほど皆さん必死すぎて超怖い!。

「私も・・・ナナシ捕まえる」「なら私も参加いたしましょう」

さらに2名追加!?!?!?

強化 脳内チャット 発動!

脳内チャット : ナナシオリジナル、レオと会話することで思いついた魔法、意識のなかに複数の意識を存在させることで複数の魔法を同時に使用することが可能となる。

光る鎖の対象を変え、突然できた沼を時間をとめることで回避、絡み付いてきた草を焼き払って逃げる!

「やりますね!これならどうですか!狩人は獲物がかかるのをじつと待つ 捕食者の網」

所長さんは蜘蛛の巣のような光の網を作り出すかなり広範囲を対象としているようだ。

「こうなったら逃げ切ってみせるっ!」



足にさらに魔力を込めて急加速して逃れる。

あるものは鎖に巻かれ、あるものは首まで沼につかり、ロープでつるされた者、粘着質な物質にとらえられた者がそこらかしこにいる、ウォルター所長とナナシは向かい合っていた

「まさかここまでやるとは思いませんでしたよ」

「逃げるといった方には全力で逃げますよ」

「そろそろ私の魔力も限界なんでねこれが最後です！飽くなき探求の欲望よ！渴望するは永劫なる時 空間呪縛」

これって時間固定か！ ノイズ 侵食虫

侵食虫 … ナナシオリジナル、相手の魔法に使用されている魔力を分解する。

「まさか 空間呪縛 が破られるとは思いませんでしたよ」

あつぶねえ・・・ 脳内チャット のおかげで助かったー

「あははは」

「時間も残り10秒ですね」

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1・・・

「ナナシ・・・捕まえた」

「えっ!?!」

ぎゅっと抱きしめてくるのはイスカ

「というわけで勝者！イスカさん！」

うわぁーそういえばイスカを見落としてたー

・・・詰めが甘い・・・

賞金1000Gをもらってうれしそうないスカ、さっきまで逆さ吊りになってたせいでふらふらしているベルムントさんと共にギルドへ行き報告し城へ戻った。  
部屋に戻るとファイルがいて

「なんでそんな楽しそうなことに私を誘わないのよ！」

とお叱りを受けた。

その6〜忘れ物はないかい?〜 (後書き)

《空間呪縛》は空間が固定されてるのなら時間も進まないから考えられないの《無詠唱も無理》ではないかという疑問は 脳内チャット という魔法で生まれた意識も魔法効果ということで時間の概念を受けないということ自分で解決しました。

にしてもホントストーリーが進んでないですね。次は武術大会が始まるところまでは進みたい。

行間 く紅き竜は囚われる (前書き)

主人公視線ではなく他のキャラ視線から武術大会編スタートです

行間　く紅き竜は囚われるく

朝、またあの忌々しい人族の顔を見ないといけないかと思うと自然とため息が出た。

不愉快極まりない、なぜ誇り高き竜人族が人族なぞに媚へつらわなくてはいけないのだ！それもこれもこの

首輪せいだ！

あれは3年ほど前

人族の商人としてやってきたグルマという男にこれは世にも珍しい首輪で装備すればどんな魔法であっても

すぐに制御できるようになるかと偽り当時はまだ魔力の扱いに慣れていなかった私は他の者からけなされるの

に耐え切れずついその甘言にのって　従属の首輪　なんぞつけてしまった私が愚かだったのだろう。

あの失敗のおかげで下種な人族売られては玩ばれ飽きれば売られてを繰り返してきた、この首輪には閻神の

加護のおかげで命令に逆らうことはおろか攻撃の意思を主人に向けてることさえできない、何より首輪を無理

にはずそうとすれば閻に囚われる。

もう自由に空を飛ぶことも無いのだろうな・・・。

ははは、もう涙なんぞとうに涸れたと思っておったが我にもまだ流す涙が残っておったか。

まだあとけなさの残る少女のほほを涙が伝う、紅き長髪に真紅の瞳、そして鱗のびっしり生えた尻尾が人族

でないことを証明していた。

「この世を旅立つ時は番となる雄と一緒にという夢や幼子をこの手に抱くことも叶わなかったか。」

ぼそりと呟いたその言葉は他の奴隷達の耳にも聞こえたがほとんどの者は希望を失い目に輝きを失っていた

。

「リムトウス来い！貴様の新たな御主人様になるかもしれない御方が来ている、せいぜいかわいがって

貰えるように尻尾振って媚を売るんだな！」

いつの日か自由になったらまずこいつを殺してやる。

そう決意しながら向かった先にはいつものものようにいけ好かない人族の「貴族」とよばれる生き物が椅子に

腰掛けていた。

「おい、竜人族の上物がいると聞いてきたのにこんな餓鬼を出すとは貴様スフィーリアス家を馬鹿にしている

のか！」

確かに今の私は人族の子供の姿をとってはいるが人族の年齢にすれば百年はゆうに超えているというのにそ

の私に向かって餓鬼とは

「め、めっそうもございません！このような餓鬼の姿をしておりますが見た目はこのような餓鬼でも竜人族

でございます！嘘だと思われるのでしたらこちらの剣でかの者を切り付けてお確かめください、竜の鱗はそ

の程度の武器では怪我はおるか傷一つ付くことはありません。」

近々行われる武術大会に向けて自分の代わりに奴隷に戦わせる奴がいるそんな奴らへの商品の性能確認だそ

うだ、確かにその程度のなまくらでは私の鱗に傷一つつかんが自らの力を見せずに力を誇示することになる

というのはいつ聞いても可笑しな話よ。

私を剣で切りつける貴族の男、剣はぽつきり折れて飛んでいく。

「おお、鉄の剣がまったく歯がたたんとは！よしこいつをもらおう！いくらだ？」

どうやら次の主人はこのあほうのようだな。

「ほら！ついて来い！俺が今日から貴様の主人だ！」

「かしこまりました」

心の中でこの馬鹿がと付け加えておく

私がこのあほうに買われて2日たったがこの「スフィーリアス家」というのはそれなりの地位をもった人族だあ

るらしく、私と同じ奴隷がたくさんいた、種族は人族、獣人族そしてあのエルフ族までもいた。

このエルフはもとは隠れ里にて住み薬や治療を生業としていたらしく道端で倒れたふりをしていた人族に捕

らえられ奴隷となつたらしい。

この家にはあのあほうの他に弟が一人と両親がおるらしいが父親も弟もクズであると他の奴隷の娘達が嘆い

ておつた、母親は優しい性格で他の者がこの家の者で唯一心を許しておる存在だそうだが体が弱く寝たきり

だという。

私と入れ違いのように出て行った獣人族の娘がいたそうだが、なんでもあほうの弟の奴隷であつたがどこぞの



庶民に取られたと大層腹を立てていたとか。  
その話から奴隷の娘たちの間では通りすがりの心優しき勇者様が虐げられる獣人族の娘の美しさに心奪われ

悪の貴族の魔の手から救ってくれたなんていうストーリーが会った  
りする。

どこの誰かはしらんがよくやったと褒めてやりたい、ん？取られた  
？まてまて、私たちはこの 従属の首輪

がついている限り主人はこのあほう共から変わるわけが無い。  
ということは・・・

「まさか、この首輪を破り無事な者があるのか？」

闇神の加護を受けしこの呪具を人の身で破壊したというのか？

もしかしたら私の首輪も壊してもらえるかもしれない、また空を飛  
ぶことができるかもしれない、そんな夢

がリムトウースの中に新たな希望として芽生えた。

ただし彼女は未だ見ぬお人よして獣人族好きな勇者は竜人族の自分  
も救ってくれるのだろうかと少し不安に

なった。

翌日、あほうがやってきて私が武術大会に出るにあたってどんな魔  
法が使えるだけ剣が使えるかと問うて

きよった。

自慢ではないが剣なんぞ生まれてこの方持ったことなど無いと伝えてやる、むしろ我ら竜人族の武器は己が

体であり武器など玩具にしかならんのだが

「そんな武器を使わずに戦うなんてなんて野蛮な！美しさの欠片も持ち合わせてないのか！これだからトカ

ゲは・・・」

貴様の身を包んでいる鎧なんぞこの爪にかかれば絹を裂くよりたやすく真つ二つにできるというのに、貴様

の許しさえあれば実演してやるのに・・・

「魔法は炎術というかプレスしか使えんぞ？」

まあ実は他にもいろいろ使えたりするのだが全部教えてやる必要など無い。

「魔法に対する防御はどうなんだ？水術に弱かったり土の槍には簡単に貫かれてしまったりしないのか？」

こやついったい私を何だと思っているのだろうか？竜人族は生まれ持って魔法に対する耐性が高い、私の場

合は炎とは特に相性がよいらしくマグマの中で泳ぐことが可能だ。

それから武術大会まで剣を使う練習をさせられた。

歯をつぶした剣を使ってカカシを殴ってみたり（カカシがこなごなに砕け散った）

重い棒をもって素振りしたり（衝撃波で屋敷にひびが入った）

と試した結果棍棒のような鈍器の方が相性がいいという結論に達し、手元は柄だが刃の部分が四角い鉄の塊

というものを本番では使うそうだ。

もう両手で数えるほどで武術大会だと思いついた時

「おい奴隷貴様にやる気が見えん！まさかと思うが武術大会ですぐに敗退しようとか考えるなよ？お前は優

勝するんだ、貴様の命より優勝を優先しろよ」

私の命も軽くなったものだ。

「命令するだけでは芸が無いそうだな、貴様が優勝すれば貴様の願いを一つ叶えてやろう。」

え！？ネガイヲヒトツカナエテヤロウ？

「優勝すればこの首輪から開放・・・される？」

「ああついでだ故郷まで送り届けてやろう」

目の前が滲んで何も見えなくなる・・・優勝すれば家に帰れる！

この貴族が出した甘い、甘すぎる餌は今のリィムトウースの思考を「武術大会での優勝」で埋め尽くした。

愚かな竜の娘を見ていたレイナルド・スフィーリアスの兄、ケルテ

ユム「スフィーリアスは暗く静かに笑みを浮かべていた。

翌日からリムトウースはただ勝利を求めてひたすらケルテムの用意する冒険者を負かして力をつけてい

った・・・。

武術大会まで残り2日となった今日、リムトウースがケルテムに用意させた薬草、毒草、鉱石などさまざ

まな物が目の前に並ぶ

「こんなものどうするのだ？」

「私はこれからこれを使って奥の手を作る、これは竜人族にのみ伝わる物だ、だから主人とはいえ他の種族

が見ている前では作れないしばらく一人にしてくれないか？」

「いいだろう！飯などはその扉の前に置いておく勝手に取るがいい、明日またくる」

「わかった」

もし、この奥の手を使うことになる相手がいるとしたら同じく奥の手を使った竜人族か伝説クラスの猛者だ

ろう。

大会前日、ケルデュムに連れられて武術大会の登録をかねて下見に行く。

全身をローブで覆い招待を隠し大会当日まで対処法をとられないための予防だった。

「はい、ケルテュム」スフィーリアス伯爵様の代理奴隷としてリイムトウースを出場ですね承りました」

登録を済ませると下見を始める、魔力による探知に反応は無いおかしな匂いも・・・ないとしたところで強

大な威圧感を一瞬感じる、今の自分なら片手どころか息一つでこの世から消滅させられる程の力、しかし自

分の隣にいるケルテュムも他の出場者達もまったく感じていないようだ、もしかこの大会のレベルは自分と

は比べ物にならないくらい高いのではないか？あれだけ強大な気配を一瞬とはいえ感じないわけが無い、木

に止まっていた鳥はすでにどこかへ飛んでいってしまったこの近くには鳥の声が聞こえない。

「あの、ケルテュム様先ほど何か感じませんでしたか？」

「どうした？戦う前からびびったわけではあるまい？」

やはり隣に立つ人族は感じなかったようだ。  
ん？そういえばさつきから受付の方が騒がしい気がする、何か揉め  
事でも起こったか？耳を澄ましてみると

「怪我人は術者だけか」や「自業自得だよ」等という声が聞こえる。

「それでは帰りましょう」

「もういいのか？」

「はい、下見は十分です、これから明日に向けて魔力を蓄えます」

「では戻ろうか」

たとえどんな怪物がやってこようと私は勝利し私の帰りを待つあ  
の村へ帰るんだ！

家に戻るとなんだか他の奴隷達があわただしく動き回っていた。

「何事だ！」

「お帰りなさいませケルテム様、それがレイナルド様が・・・」

レイナルドの部屋へ駆け込むケルテム、レイナルドは顔と右腕に大きな熱傷を受け痕を完全に消すことはできなかったそうだ。

「レイ、どうしたんだ！次男とはいえスフィリアス家の血を受け継ぎし者がここまでやられるとは相手はど

んな奴だった！？」

「ごめんなさい、ケル兄様、私も武術大会へ参加登録するべく列に並んでいるとあの庶民がいきなり私に向

かって火球を放ったのです」

「なんだと！？例のレイから獣人の奴隷を奪ったというあの庶民か？」

「はい、髪も瞳も漆黒のように黒く腰にグレートソードとソードの中間くらいの大きさの変わった剣を持つ

ておりました、私は悔しいです・・・あのような者に二度もやられさらに私のこの美しい顔に傷をつけるな

んて」

「安心しろレイ、敵は必ずとる！肉片一つ残さず刻んでくれる、スフィリアス家にたてついた事を後悔させ

てやる、だから安心して療養なさい。」

「貴様も聞いていたな？もし対象が武術大会に出ていた場合生まれ  
てきたことを後悔するほど痛めつけて殺

せ、命乞いや降参などは許すな確実に息の根を止める。」

「私は人族の見分けがほとんどつかないできれば対戦相手が対象で  
あつたなら合図等で教えて欲しい出なけ

れば対戦相手をすべて等しく殺さねばならなくなる。」

「いいだろう対象だった場合に《ライト》の魔法を使って貴様に知  
らせてやる」

部屋に戻って、さきほどの話に妙な違和感が残るあのレイナルドと  
いう男、何か隠していないか？と考える

のだが何がおかしいのかわからない。

だめだ、明日の大事な試合の前に雑念は捨てなければ。

あいつらの復讐は言ってしまうえばついでだ、私が今考えなければい  
けないのは明日を確実に勝つこと、途中



で負けてしまえば私は命を奪われる所ではすまないだろうな、いや負けた時の事など考える必要など無い！

私は明日、勝利を重ねて優勝という名の自由へ翼を手に入れるんだ。

「私は、まだ終わってなどいない！明日すべてに終止符を打ち村へ帰るんだ！」

空を見上げると大きいが少しかけた月が見えていた、紅い髪の少女は天に向かい手を突き上げ吼える。

明日、満月の元で私は故郷への馬車に乗っているはずだと自分に言い聞かせながら床についた。

行間 く紅き竜は囚われるく（後書き）

少しずつポイントが上がって行くのはうれしいですね。

こうしたほうがいいんじゃないかといったアドバイスなどあったら送っていただけると作者のスキルアップに繋がるのでとてもうれしいです。

自分で考えた名前なのに間違えていたのを修正しました。

次は主人公視点にもどります

そのフゝおお！勇者よ！死んでしまふとは情けないゝ（前書き）

一話上げることマイリストが一人ずつ増えてます！うれしいね！  
ありがとうございます。

そのフゝおお！勇者よ！死んでしまふとは情けないゝ

だいが楽に振れる様になってきたな。

・・・まだまだ今のナナシの剣技など餓鬼の遊戯に等しいわ、それにほれ昨日騎士の者と手合わせしてもらって思い知ったであろう？その程度では武器のみを使っての勝負では勝てぬと・・・

昨日、騎士の稽古にお邪魔させてもらい、実力が知りたいという大勢の兵士達の希望により模擬戦闘をさせてもらった。

結果は全敗、「それなりに剣を使っているがまだまだ剣に振り回されている」というコメントまでもらってしまった。

もう大会までもう日がないというのに大丈夫なのかな、なんとかダリルは倒してお姫さんの問題を解決してやりたいんだが、最悪魔法を使ってでもダリルには勝とう。

・・・魔法を使えばナナシでも上位までゆくのもたやすいだろう、しかし、それでいいのか？ナナシ武術大会というならば剣のみしか戦わないと言っておったのではないか？・・・

レオ、俺はそこまで聖人じゃないから、むしろ悪役だよ？ずるいとせこいことをしてでも勝ちに行くよ？

だが卑怯な手は使わない。

・・・ん？卑怯な手とずるい・せこい手は違うのか？・・・

まあ、俺なりの言葉遊びだよ

さて今日は大会への参加登録をしに行くんだがうっかり口を滑らせたものだからフィルもついて行くといい出した結果フィルを城門前で待つという羽目になった。

イスカはいつものように俺の隣に立ち腕を絡めていた、何が楽しいのかわからないが尻尾はご機嫌に踊っていた、それに腕にあたるやわらかさを感じるだけで俺は幸せなんだが。

「すまないな！待たせた！」

今日はまた目を惹く格好だった、髪を後ろでまとめて上げて帽子で隠しパツと見ただけでは少年のようにしか見えないその姿だが隣に立っている付き人さんのおかげでわがままな商人のぼっちゃまに見える。

「どうじゃ！これならば私がフィルネシアであるとわかる者もおらぬであろう！」

「もしかするとドレスで来てもばれなかったりするんじゃないか？さつき道行く人に聞いたらフィル王女様はとも物静かでお淑やかな方だそうだ」

「私のその話をきいてなぜドレスを着て歩いてても大丈夫などという言葉が出てくるのだ？」

だってその噂欠片も当たってないじゃないか！と言おうとしたら途中で殴られた。

広場で歩きながらでも食べれるサンドイッチのようなものを食べながら登録するために受付へ向かった。

「う、出遅れたか、仕方ない並ぶか」

受付にはすでにすごい列が出来ていた、その最後尾を探していた時

「見つけたぞ庶民！この間はよくも私に恥をかかせてくれたな！」

周りの人たちがずっと引き俺達とレイナルドを遠巻きに見ている。  
マントを着けたレイナルドがこちらを見てわめいていた、その姿を  
見たとたんイスカの尻尾が下がったのを俺は見逃さなかった。

「これより貴様に裁きの鉄槌を下してくれる！強大なる炎神よ！我が声に応えてその力を示せ！」

・・・愚か者めこのような場であのような上位魔法を使用するとは、  
ナナシこの場所で下手に受け流すと周りに被害が出る！・・・  
わかってる！かといってあたるわけにもいかないし、仕方ないか自  
業自得だレイナルドには来年の武術大会を頑張ってもらうことにす  
るか

「《フレアボール》」

「威力減！《自業自得》」

レイナルドが放った大玉ほどある火球は俺の目の前まで飛んでくる  
と空間に波紋を残して消える、そしてバスケットボールほどになっ  
た火球がレイナルドへ飛ぶ

「なっ！」

とっさにかわそうとしたレイナルドだが逃げ切れずに当たる火柱が起きるが爆風は俺が上へ逃がしたため怪我人は出なかったようだ

「ぎゃあああ！おのれ！おのれ！おのれ！この借り必ず倍返して返してくれる！覚えてるよ！」

ついでに癒してやろうかと思ったのだがさっさと逃げていくその姿を見ると大丈夫なようだ、というかフィルが近くにいる今でなければ障壁で耐えるなどの方法もあったのだがさすがに何発も耐えれないと思ったので早々に負けてもらうことにした。

さて登録をと受付の方へ向くとさっきまで長蛇の列が出来ていたのが数えるほどしか並んでいなかった。

「ふ、今のナナシを見て勝てないと尻尾を巻いて逃げたか」

フィルさんとっても楽しそうですね。

並ぶ手間が省けたのでよしとするかな、そこでフードを被り全身をコートで覆った不審者とぶつかりこける。

「おっと、ごめん」

「ああすみません、急いでいたもので」

「おい！奴隷の分際でなにをもたもたしている！さっさとこい！」

このフードの子は奴隷でアレが主人なのだろう、俺は立ち上がって手を差し出す。

「怪我はないかい？」

驚いた様子で俺を見るその目は真紅だった。

「大丈夫だ、主人が呼んでいるのでこれで・・・ありがとう」

走り去っていく様子が広場で最初に会ったイスカとダブった。

「はい、えっとそれではナナシ様が武術大会に出場されるのですね？」

ちらつとイスカの方へ目を向ける受付のお姉さん

「はい」

「ではこれで登録完了となります、明日はご武運を」

ありがとうと残して城へ戻る。

帰り道フィルから聞いた話だと最近では貴族達が自ら傷つくの恐れ、代わりに戦闘力の高い奴隷を戦わせることが多くなってきたそうだ。自分は傷つくことなく奴隷に戦わせて自分が高い地位に就く、より強い奴隷を飼いならす事が貴族の仕事という人もいるとか。

今椅子に座って本を読んでいるイスカを見る、青い瞳がせわしなく動いている。

こっちの視線に気付いたイスカが「何？」とたずねるが「なんでもない」と返すとまた本を読むため視線を落とした。

イスカの頭をやさしく撫でて離れようとするともっととせがまれしばらく撫で続けることとなった。

たまにはこんな静かな時間があってもいいだろう。



「おい！なぜそこで押し倒さんのだ！」

ここはナナシの部屋の前、少しドアを開けて中の様子を伺っているのはこの城の第二王女のフィルネシア様・・・のはずだ、俺は長いことこの城の警備にあたってきたがフィルネシア王女とはこのような人物だったのだろうか、もっと物静かで窓際で本を読まればかなく微笑んでいらっしやっただあのフィルネシア王女はどこに行ってしまったのだろうか、だがこの活発に行動なされるフィルネシア様のほうが本当のフィルネシア様なのだろう、以前の時々見せたさびしげに見える姿もここしばらく見ていないと侍女達も話していたこれもすべてナナシ様がいらっしやっただおかげなのであるだろうか？

確かにいきなりナナシという冒険者をこの城へ呼べとおっしゃられた時は何事かと思ったが姫にも何か考えがあったということなのだろう。

今しばらく放っておこう扉の前ではしたなくも中の様子を伺う王女を横目で見ながら兵士は思うのであった。

「ナナシー！待ちに待った武術大会当日だぞーいつまで寝ておる！ほらさっさと起きて支度せぬか！ふぎゃ！」

ナナシの部屋に元気よく入りまだ寝ていると思われるナナシを起すためベットに近づくが近づいたとたんベッドの中から抵抗を許さ

ぬ強い力でベッドの中へ引きずり込まれる。

ん？抱きしめられ、え？なに？へ？つと思考が暴走して考えがまとまらない、腕の主はさらにフィルを抱きしめ反撃を許さない。

あわわわ、ままままだ早いわよ？まずは結婚してからって子供を作って子供は男の子と女の子を一人ずつは欲しくてでも先に子供を作るのも嫌ってわけでもなくて、ってあれ？そこで目の前にやわらかい感触があることに気付く。

布団をのけるとフィルの腕をつかんだのはイスカで獣人族の彼女の拘束を解くだけの力はフィルにはない、そしてベッドの上にはイスカしかおらずナナシの姿は無い。

彼女は数分後に素振りから帰ってきたナナシに救助された。

「まったく酷い目にありましたわ、にしてもまだ同じベットで寝ていましたのね」

イスカのやわらかい抱き心地が素晴らしくて離れられませんでした！なんていえるわけもなくナナシは笑ってごまかそうとする。

「ではどうですか？今夜は私のベッドで御一緒にしません？」

そうしな垂れかかりながら問いかけたフィルに一瞬ドキッとしたもののからかわれていると思ったナナシは

「冗談でもそんなこと言ったらだめだぞ、そういつのはフィルが心に決めた人に言ってやるべきなんだから」

「私に魅力が無いから？だから冗談だといってごまかすの？」

俺の服を引つ張り珍しく食い下がってくるフィルに驚いたが

「俺はフィルに魅力が無いとは思わないよ、むしろフィルは魅力的で美しい女性だよ」

真剣にそう思う、磨き上げられた美貌は隠せないものだ昨日も変装はしていたが男性の目を引いていた。

「なら・・・」

「でも王女という肩書きがあるフィルは冒険者の俺のような者が珍しくてそれを恋心と勘違いしているのだろう」

そこでパツと俺から離れるフィル

「ふっ！まんまとだまされたなナナシ！いつも本当に王女なのか？とか魅力が無いなどと言っておったくせに私の魅力にメロメロではないか」

だまされた・・・完全に騙された、もしあそこでうなずいていたなら完全な笑いものになっていただろう、

いや王様の耳に入れば打ち首もありえない話ではない。  
なんて危ない罠なんだ、と冷や汗が出てきたので一度顔を洗おうと水場へ行く。

「ほんとにナナシは愚か者なんだから・・・」

そんな声が聞こえた気がした。

闘技場と呼ばれた武術大会の開催地は人で溢れていた。

フィルは王族として特等席があるからそっちで見ているといい、イスカも一緒に行かないかと誘っていたがイスカはそんな特等席より観客席で見ていると断っていた。

バルドーさんは会場入り口で俺の武器を持って待っていてくれた、彼曰く自信作だそうだ、ただし今ここで現物を確認して欲しいと言われて剣を抜いたところ貸してもらっていた剣の半分くらいの重さしかなくて驚いた、バルドーさんはこの顔が見たかったそうだ。

武術大会は王様の開会の言葉から始まりルール説明、最後に進行説明となった。

周りを見回すと大きな斧を持った筋肉質な男からきらびやかな鎧を着た細身の男もいる、あれは魔法使いだろうか杖を持った者もいる、いろんな者がいるなと思っていたら後ろから声をかけられた。

「おい、あんたが昨日スフィーリアスの貴族を返り討ちにした庶民ってのは」

振り向くと大きな牙を持つライオンの顔をもつ獣人がそこにいた。

「ああ、返り討ちというか自分の身を守っただけだ。」

身長はナナシよりはるかに高い190ぐらいあるんじゃないか？と見上げるするとすぐに笑みを浮かべて

「おお！そうか！そうか！お前が我らの同胞を助けたというシヨミン殿か！」

おっとこのライオンさんは俺の名前がシヨミンだと勘違いしている。

「いや、俺の名はシヨミンじゃなくてナナシっていいいます」

「おっと名を違えるとは失礼した、ナナシよ、俺の名はロウエンという、家名はわけあって話せないすまない」

悪い人ではなさそうだ、握手を求めると驚きながらも笑いながら応じてくれた。

獣人族を平等に扱ってくれる事が珍しくそして自分に対して握手を求めた人族は少ないらしくうれしうれしいと話してくれた。

「では本戦で会おう！」

ここは本当に異世界でした、ライオンと握手できたよー、肉球は少し硬かったけどふにふにしてたー！

・・・らいおん？にくきゅう？・・・

レオはテンションの上がりっぱなしの俺に疑問を感じているらしかった。

武術大会のルールは簡単にまとめると

相手を殺さず気絶、もしくは降参させれば勝ちとなるただし相手が戦意を喪失し審判がそれを確認していたのにもかかわらず攻撃を加えた場合失格となることもある、ただし本戦では死の危険があるので早めの降参を勧めていた。

武器、魔法の使用は許可されているが武器使用の際は戦闘開始前に申請することが必要。

と人族にかかるルールはそれくらいだ

観客席にまで及ぶような魔法は禁止、高位の魔法使いが結界を張ってはいるが危険が伴うため

さすがにすべての試合を1対1で進めるのは時間が足りないので4つのブロックに分けてバトルロイヤルで人数を減らすそうだ、逃げ回っていても本戦にはいけるんじゃないのかと思ったが一定以下の人数まで減らない限りバトルロイヤルは終わらないらしく手っ取り早く終わらすには他の人に眠ってもらうのが一番よさそうだ。

さっきのロウエンさんとは別のブロックか、ダリルは本戦からの出場だからさくつと本戦へ行かせてもらいたいな・・・

「おい見ろよ、人族の餓鬼が混じってるぜ」

「武術大会もなめられたものだな」

「きつと金を惜しんだどこかの貴族の坊ちゃんか奴隷だろう？」

「それでは武術大会予選始め!!!」

ナナシの周囲の参加者はナナシがこの中では一番弱く倒しやすいと思ったのだろう全員が剣を抜いて飛び掛った。

が、ナナシの周囲に張り巡らされた風の幕によって空高く舞い上げられ地面にたたきつけられた。

ナナシは奇襲者が舞い上げられた瞬間に魔法を使う

「抵抗はやめて、おとなしくしなさい《テイザー》」

《テイザー》：地球では電気銃の名を持つその魔法は目標へ向けて電流を流し気絶させるただそれだけの魔法だった

この魔法は地球の警官をイメージするので詠唱の変わりに例の警告を言ってしまう。

電気という概念の無いこの世界では自然の雷やモンスター以外麻痺を与える魔法はあっても電気という魔法が無いらしい。

このブロックの敵は2名、なんでも無いという顔をしている男、障壁を張って防いだ女魔法使いが残っている。

「そこまで！」

もう一撃を加えようとした時終わりの合図が告げられた他のブロックを見てみる、結構派手にやらかしたところがあつたようだ黒煙を上げているブロックやボコボコの穴だらけになっているところもある。

一つのブロックを除いておおむね3人ほどの出場者が出ている、そのブロックは一面血にまみれており死に至つた者はいないということだがそのブロックにいた者は等しく体の一部分を失つたという。

「1回戦は対戦相手が決まり次第行いますのでしばらく選手待機室等でお待ちください！」

このまま連戦でもよかつたのだが血の片付けや穴の処理などあるのではしばらく休憩となったようだ。

「若いのになかなかやるじゃない」「いい技だった対戦の際は正々堂々戦おう！」

と同じブロックの人たちは休憩室の方へ去っていく。

観客席にイスカの姿を見つけて近寄っていく、メリルさんやジョーイさんそしてなぜかフューデイルのギルドのお姉さんがいた

「メリルさんジョーイさんお久しぶりです！イスカ、本戦出場決定したよ！」

「あんたが出るって聞いて久しぶりにこっちまで見に来たんだからね」

「あんた変わった魔法使うんだなーびっくりしちまったぜ」

「ナナシ・・・かつこよかったよ」

「カカシさんー無視するなんてひどいですー」

無視したわけじゃないんですその魅力的なバストはなかなか忘れれるものじゃないですから、ただ、名前を知らないだけなんです

「あー、そういえば名乗ってなかったでしたっけーフューデイルのギルドでー受付してますーセシリアとー申しますー」

「えっと、お久しぶりです」

心を読まれたわけではないよな？

「うふふふふ・・・」

読まれていてもおかしくないのか！？え？受付必須技なのか！？  
と思っただら



「お待たせいたしました！対戦カードが決まりましたので選手の方は本部の方までお越しください！」

おつと行かないとな

「じゃあ行ってくる、また後でなイスカ！」 「行ってらっしゃい」

「いいねー！若いってのはー初々しいじゃねえか！」

少し走るスピードが上がった・・・。

俺の相手は大きな鎌を使うエルフのお姉さんだった。

見るからに重そうな鎌を片手で持ち歩くのをみてエルフって弓以外も使えるんだって素直に感心した。

「それでは！第1回戦一撃でそのブロックの数多の選手を倒したナシ選手この町に滞在する庶民冒険者だそうです！対するはエルフ族の綺麗なお姉様ゾルディア選手！ふとももの深いスリットから男は目が離せない！」

ですよねー、どうやって調べたのか知らないプロフィールを読み上げていく司会者さんあんたとはいい酒が飲めそうだ。

他のブロックの対戦カードが発表されていく

「ねえ、ナシさん？貴方ってもしかしてあのフューデイルで噂の獣人奴隷をかけて貴族と取り合った色ボケお人よし冒険者さん？」

なんかフューデイルに戻るのが怖くなってきたんだけど何その噂!?

「色ボケでもお人よしでもないと思いますけどたぶん俺・・・なのかな?」

「アハハハハ!こんなところでそんな有名な名人に会えるなんて後でサイン頂戴よ!まさかあの物語は現実にあつた話を多少誇張したなんて書かれてるから単なる物語だと思つてたのにホントに黒い瞳と黒髪の冒険者が獣人族の女の子と仲良く話してるんだから、いやー面白い!これだから世の中わからないよねえー」

おねえさんものすごい笑つてるよ、こっちは何の話やらさっぱりなんだがとりあえず後で詳しい話を聞いてみよう

「あーそうそう、噂のユニコーンの騎士さんには悪いけど手足失うくらいは覚悟しててよね?」

ものすごいことを笑顔で言わないで欲しい。

戦闘開始ともに《強化》と《脳内チャット》を起動させておこう、エルフって事は魔法は通用しないと思つておいた方がいいかもしれないな。

・・・いや、あの娘もしや、ナナシ全力で《ノイズ》をあやつに打ち込んでみるといいもしかするともしかするかもしれん・・・

《ノイズ》なんて攻撃力の無い単なる集中力を乱す程度の技なのにそれで勝てるとは思えないがやらないよりはマシか

「それでは!一回戦!始め!」

「バラバラに切り裂いてあげちゃう！」

さっきのお姉さんはどこ行ったの！？ってほど怖い豹変を見て一瞬のラグが起きるそのうちに間合いを詰められる。

初撃を剣で受けてその威力に逆らわずに飛んで距離をとる。

「いい反応するじゃないの、やっぱり戦闘はこうでなくっちゃほらほらあ！つぎいくよお！【残影】！」

ゾルディックが鎌を振るうと反対側から鏡あわせのように影の鎌が現れる。棒高跳びの要領で飛び越えて剣をがら空きの背中へたたきつけようとするが、地面から生えた鎌の影が剣を弾く。

「いいわあ、早く貴方を切り裂いて貴方の血でここを真っ赤に染めてあげる。」

ん？よく見たらエルフ耳の周りに何か魔法を使ってる？

「我はここに願う《疾風の刃》！」

カマイタチが無数に飛んでくる。

「《ストーンウォール！》」

イメージの問題だと思うがレンガの壁が現れてカマイタチを受け止める。

「我はここに願う《風神の息吹》！」

《風神の息吹》：風の弾丸を飛ばす精霊術

レンガの壁が崩れていく

今のは魔法とは違った気がするけどあれも魔法？

・・・いや、あれはおそらく精霊術だと思われる・・・

精霊術？魔法とどう違うのさ

・・・魔法は自らの魔力を消費して力を行使する、一方精霊術は精霊と契約しその精霊に願うことで力を行使する、魔法は使用者の魔力量によって威力等が変わり魔力が尽きれば魔法も使用できなくなるが精霊術はその精霊によって力の差はあるものの願う者によつての差は無いさらに使用の制限も無いが精霊は気まぐれ屋な者が多くよほど気に入られておらんとあのように力を使うことはできんだらう・・・

「何をブツブツ言ってるのかしら？我はここに願う《極寒の風》！」

《強化》した足でサイドステップする今までいた場所が凍りついていく

「まだまだ！我ここに願う《漆黑なる刃》！」

黒い刃が無数に飛んでくる

「《自業自得》！」

黒い刃は空間に吸い込まれて空間に波紋が残りゾルディアの周りに

波紋が現れ無数の黒い刃がゾルディアに向かって飛ぶ、しかしそれをひらりとかわす。

「なかなかやるじゃないの！まさか一回戦からこの子まで使うことになるとは思わなかったわ！我はここに願う《風神の子シルフ》！」

・・・ほお！下級の精霊とはいえ直接召還するとはな、なかなかあの小娘もやるものだな・・・

確かエルフって超長生きする生き物じゃなかったっけ？見た目はあんなお姉さんでも実は100年も200年も生きた婆さんだと言われそうでなんか素直に萌えれないんだよな

・・・ナナシ、おぬし戦闘中にそんなこと考えておったのか・・・

「もう終わりかしら？我はここに願う《影の針》」

地面から無数の針が生えるのを飛んでかわす。

「そこ！」

飛んだところに風の精霊がすかさず風の刃を飛ばしてくる

「《暴風壁》」

予選で使った風の幕を張って風の刃をいなす

「今のをさつきみたいに壁で防いでいたら貴方ごとバラバラになったのに」

「ならば次はこっちから行こうかな《氷槍雨》！」

一面に氷柱が降ってくる

「甘い甘い！【残影】！」

鎌を振るい氷柱を砕く

「ふっ、ならば男性の皆様ごらんあれ！《鎖呪縛》！」

ゾルディアのまわりの床から一斉に鎖が現れ彼女を縛り上げていく  
「おおおおおおお！」という歓声上がる。

「ヴァージョン亀甲縛り」

鎖を絡めつける呪縛術があったのでもしやこれなら出来るんじゃないかな  
いかとおもったら出来てしまったよ

・・・基本的に想像できるものなら魔法は現実に行うことが出来る  
のだからあまりつまらないことに魔法を使うでない・・・

あのナイスバディをなるべく傷つけずに勝つには動きを封じるのが  
一番そしてさらに見ているほうもうれしいものがこの鎖呪縛Ver亀  
甲縛りなのだ！

「くっ」

ゾルディアが鎖によって締め上げられた次の瞬間シルフが鎖を断ち  
切った。

まあそれなりに楽しめたからよしとする。

「よくも辱めてくれたわね！」

「えっと観客にサービスを……」

「だまらっしゃい！我は願う《影刃乱舞》」

突然あたりを黒い刃が無数に現れ飛び交っている強化してなかったら今頃ズタズタだろう。

「もらった！全方位からの【残影】これなら逃げ場は無いわ！」

振り下ろそうとした鎌はその場から動かない。

「鎌が……動かさない!？」

「《ノイズ》」

「いぎいぎい」

ふう、《空間呪縛》で鎌を固定して驚いている間に《ノイズ》を耳に叩き込むという作戦は成功したにしても見事に泡吹いてるね。

……うむ、エルフ族は基本隠れ里に住み隠密や遠見などを得意とする狩人でな耳がとてもよいと聞いたことがあるのだ、今回は聴覚の強化までしておったようだから音で攻撃するなんて思ってもいなかったのであるうな……

「おっと！ゾルディア選手気絶を確認！勝者ナナシ選手！2回戦進

出！」

全身ローブで隠した選手が控え室に帰って行くのを見つけて後を追うようにして控え室に入るとそこにはイスカが待っていた。

「イスカ？」

「おかえり」

「ただいま、じゃなくてなんでここにいるの？」

「あそこからじゃナナシとあんまり一緒にいれないから」

イスカはナナシに回復薬を渡して隣に引っ付くように座る。

そうですね、警備員はいないのだろうか・・・と思ったが、よく考えてみれば今は武術大会で出場者には奴隷もいる主人に会いたいからと選手の控え室に行く奴隷などいないから奴隷は素通りできるのか・・・

「おい、その人族！」

まだこの控え室にいる人族は俺だけだと言っても控え室にいるのは俺とイスカ、そしてフードの選手だ。

少しうるさかったかなと思い

「ああ、すみませんうるさかったですか」

と行ってイスカの方へ向こうとすると



「いや、そんなことではないーっ聞きたいのだがその獣人族も選手なのか？」

「選手じゃなくて単なる観客ですけど？」

「ならばなぜここにいる？こいつは貴様の奴隷だろう？奴隷が人族を好んで付き従うなんて話は聞いたことが無い！」

「イスカは奴隷じゃない！俺の大切な仲間だ。」

「この人は皆獣人」奴隷って思ってるのかと考えたがイスカ首輪してるから余計にそう思われるのか

「え？奴隷ではない？でも首輪をしているぞ？」

「形だけだ」

「でも私はナナシのモノ、ナナシだけのモノ何時如何なる時も一緒にいる」

「いやぁホントに可愛い事言ってくれるじゃないか！その獣耳のついた頭を撫でちゃう！」

「それはすまなかった、こちらの勝手な思い込みで不愉快な思いをさせた」

「ああ別に気にしてませんよ」

「ナナシというのは貴方の名か？すまない名を尋ねる時は自分から名乗るべきだったな、リィムトウスだ、リィムと呼んでくれ」

フードを取り紅く燃える様な髪に真紅の瞳はルビーのような輝きを放っていた。

「ナナシです、こつ見えて冒険者しています、こつちは俺の大切な仲間でイスカです」

よろしくと手を出すとリイムトウスは戸惑いながら質問した。

「私は奴隷だぞ？その上竜人族だ」

「あれ？握手は嫌でしたか？」

おや？竜人族の奴隷さんは握手をしてはいけないのだろうか？

「リイム、ナナシは奴隷であっても差別しない、私も少し前まで奴隷だったけどナナシは私を救ってくれた」

それに・・・とイスカが続けていく

「ナナシは可愛い女の子が大好きだから」

うおい！イスカさん！？とんでもないこと暴露しないでください！  
確かに好きだけど！リイムも美少女だけど！

その言葉にリイムトウスが何かを思い出したようにつぶやく

「もしか、あのお人よしの冒険者？」

うう・・・やっぱりそんな風に伝わってるのね

「多分その噂のお人よしです」

その言葉をきいてリイムトウースはすぐにナナシへ騙されて首輪を付けられた事を話した。

「なるほど、今すぐ取ってあげたいんだけど一度君の主人にあって話をさせてもらいたい、イスカの際は首輪を取ることが出来ればイスカを開放すると約束したから開放したのであって誰でも解放していたらキリがないし単に俺を利用して逃げようとしている奴もいるかもしれないからね」

「そうか・・・」

すっかり落ち込んでしまったリイムトウースの頭をイスカにやるように撫でながら

「大丈夫、リイムが話してくれた事を疑っているわけじゃないんだ、きっとリイムの首輪も取ってあげられる」

「うう・・・」

ポロポロと涙を流しながらナナシの胸に顔をうずめるリイム、ナナシは落ち着かせるように抱きしめる。

とそこで他の参加者が帰ってきた、イスカがさっとリイムにフードを被せた。

「それでは2回戦の対戦カードを発表します！選手の方は集合してください！」

少し声を殺して泣いていたが落ち着いたのだらうリイムは「ありがとう」と言つと控え室から出て行った。

「それじゃあイスカ、行って来るね」

「行ってらっしゃい」

イスカは腕をナナシの首に回し唇を触れさせた。

「おまじない・・・これでナナシは負けない」

こんなおまじないまでもらったら負けるわけには行かないな

「選手の皆様！これより2回戦を始めます！」

えっと目の前には見覚えのあるライオンさんが立ってます。

「よお！ナナシ！運がいいな！俺に当たるなんてお互い全力で殺ろうな！」

百獣の王は百獣の王だったあ！

・・・大丈夫だ、ナナシ何のために特訓してきたのだ「やれば出来る」だらう？・・・

そうだな

「ロウエンさん勝っても負けても恨みっこ無しですからね！」

「その意気や良し！」

「それでは2回戦始め！」

《強化》と《脳内チャット》を始動させて剣を抜いて切りかかる

「先手必勝！」

全力で切りかかるがロウエンは片手で受け止める。

「この程度か？気合を入れる死ぬぞ？【獣王双牙】」

ロウエンが拳打ち込む、前からの打撃のはずなのに後ろからも同時に殴られたような衝撃が走った

《強化》してなかったら今の一撃で身が碎けていたんじゃないだろうか。

「ほう、今のを耐えたか、ならば！」

ジグザグに走り突撃するロウエン左右の揺さぶりをかけて目の前まで来たところで左からの一撃をなんとか剣を使って防ぐが体重差により飛ばされる。

少し飛ばされるが踏みとどまり正面にロウエンはいなかった。

「こつちだ【琥孔】！」

ロウエンの攻撃は背後から突き抜けるように通っていった。

「こんなものか？フィーデルの有名な人だっていうから期待したんだが」

速いな、さすが獣、だがこつちもイスカに勝つって約束したんだ全力で倒させてもらうか。

そんなに有名になりたくないから目立たないようにと思ったんだがこの人相手にそんなことも言ってられないか。

剣に魔力を通す、《強化》を3段階まで上げてロウエンの後ろまで一気に走り剣を振ってロウエンを打ち上げる。

「がはっ、いつの間に？」

空中で向きを変えながら地面に降りようとするが向きを変えた時死角を通してロウエンへ剣を叩きつける。

「《重力の枷》」

《重力の枷》：数秒間対象の重力をコントロールする

打ち付けるのと同時にロウエンにかかる重力を7倍にして1秒程時間差で自分へ《重力の枷》をかけて追撃として剣を打ち付けるとロウエンの体が地面にめりこむ。

「ぐっ！」

パツとロウエンから離れるとロウエンは何事もなかったかのように立ち上がった

「今のはなんだ急に動きが見えなくなっただぞ？それにあの攻撃もあんな攻撃は見たことがない！もつとだ！

もつと我を楽しませろ！」

いやああああ！この人、戦闘狂だあ！

・・・そのようだな、ナナシ足か腕の一本でも切り落とさんと止まらないのではないか？・・・

痕が残りそうなのは遠慮したいんだが

「どうした？今ので終わりというわけではなかるう？こないのであればこっちから行くぞ！」

最速で近づき下からの地面スレスレからすべるように拳をナナシの体へ叩き込もうとするが、そこにナナシはいない、剣の魔力を雷と変えロウエンの脇を打つ、ロウエンの体へ雷が流れる。

「おお！この痛みは雷獣のそれと似ておる！」

これもだめか

「どうしたナナシ、お主の剣には殺気が感じられんぞ？」

「もちろん殺す気なんてないですからね」

「ナナシ、我を相手に本気で言っているのか？」

「当たり前ですよ、これは大会ですルールがあり、殺し合いをする場ではないですから」

「周りを見てみる、それでもまだそんなことが言えるか？」

1回戦とは違って2回戦はあたりが赤く染まっていた。  
どの対戦相手も血を流していた、腕を失っている者もいる。

「1回戦までは血を流す前に終わっちまうことが多いが2回戦からはちがう、気絶なんて手加減は出来ないって事もあるが勝利もしくは死だ」

「それでも……俺は殺しはしません」

「その信念自分が死に掛けても同じことが言えるか試してやろう！」  
剣の魔力を炎へ変える地面を擦りながらロウエンへ向かう下からロウエンへ切りかかる、斬撃を手の甲で受け止めたロウエンは拳を突き出す、半身で交わして魔法を放つ

「《石の槍》」

地面から石の槍が生えるがロウエンはバクテンで避ける。  
剣の魔力を土と風を交えたものへ変えて振る、剣から風の刃を生みロウエンへ迫る、ロウエンは風の刃を拳で叩き潰して攻勢にでる。

「そろそろ決めさせてもらおうか【縮動】」



一瞬でナナシの後ろへ回ったロウエンは手に魔力をためている

「これが我が一族最高奥義【獣牙】だ！」

ロウエンの腕がナナシの体を貫く、大量の血液と呼ばれる液体が流れ落ち地面に水溜りを作る。

ロウエンはその手に未だ鼓動を続ける心臓を握っていたが、その手に力を込め握りつぶす。

そのフゝおお！勇者よ！死んでしまふとは情けないゝ（後書き）

戦闘の途中で切ってみた・・・モヤモヤするね！続きを決めてるだけにモヤモヤする！これが漫画の王道魔法続きが読みたくナール！馬鹿言っでないで続き書きます。

変なところで改行されていたので修正

その8〜初めてのボス戦レベルを上げて（r y）（前書き）

警告！警告！警告！警告！

グロ表現が含まれます！

警告！警告！警告！警告！

過度なグロ表現が含まれます！

警告！警告！警告！警告！

気持ちが悪くなった方はすぐに戻るを押してこのページから戻る事をおススメします

その8〜初めてのボス戦レベルを上げて（ry）

ロウエンはその感触に自らの勝利を確信していた。

その肉体の温度が冷めていく感触、微動すらしなくなっている肉の塊、この塊にもう用はない手を抜こうとするがなぜか抜けない。

後ろから貫いたなのにナナシはこちらを見て笑っている。

なぜだ？ナナシは人族、心臓をつぶされれば吸血鬼ですら消滅する。人族という種族は首が一回転なんてしないはずだ、ならばこれはなんだ！？

「【琥孔】！【獣王双牙】！」

もう片方の腕でナナシの体を攻撃するだが一向に腕が抜ける気配がない、それどころか手の感覚がない。

次の瞬間、腕が抜けなかったのが嘘のように抜ける。

ただし、ロウエンに見えていた部分以外はナナシに刺さったまま、ロウエンには痛みも血も流れていない。

なんだ！？どうなっている？こんな技は知らない！見たことがない！こんな技を

使う奴なんて聞いたこともない！

クククク・・・とナナシは晒う

「貴様は一体何だ！人族というのは嘘であつたか！」

だがナナシは応えない、ただ、ただ、晒い続ける。

「ならば引き裂いてくれる【豹擬爪撃】！」

ななしの体はロウエンの爪によって3つの大きな傷が出来る。もう一度と爪を見るとナナシを切り裂いた部分のみなくなっている。

「一体どんな魔法を使っていると言っただい！【琥穿連撃】！」

一瞬にしてナナシの体は粉々に碎け散る。

だがロウエンの腕も消え去るしかしナナシの笑い声はどこからともなく聞こえていた。

あたりは一面赤く染まっているその中ロウエンは一人立っている、声は聞こえるのに姿の見えない敵。

下を向くと血の池の中にナナシの顔があった、その笑みはこちらの心を見通した

上でこちらを感情のない目でみてあざ笑うかのように笑っている、即座に右足で踏みつけるが、地面などないかのように右足はどこまでもナナシの顔へ沈み、体勢を崩したロウエンは地面に倒れる、右足は付け根からなかった。

左腕も付け根からない、右腕は二の腕から先がない。

残った左足だけでは立ち上がることすら出来ない、近くを見ると先ほどのようにナナシの顔がこちらを見て笑っていた、ロウエンは左足をその顔へ叩きつけ、左足を失った。

腕も足も失ったロウエンの耳には未だ笑うナナシの声が聞こえていた。

立つことも移動することも出来ないロウエンは首を持ち上げて周りを見る、血溜りの中には無数のナナシの顔がありすべてが声を上げて笑っていた。

「やめてくれ！俺の負けでいい！負けでいいから笑うな！黙れえええ！黙ってくれえええ！」

どれだけ時間がたっただろうが、ロウエンは自分が何を求めて戦い何のために生きたのかもわからなくなっていた。

私はだれだ？

ここはどこだ？わからない・・・

もうなにもわからない・・・

そこで世界に亀裂が入る。

「おはようございますどうでしたか？《最果て》は」

そこは武術大会の会場で自分は仰向けに寝ていて体には幾多の捕縛術が施されていた。

「俺は・・・誰だ？」

「おや、ちよいと魔力込めすぎたか？ほらロウエンさん立ってください試合は終わりましたよ」

そくだ！思い出した！俺の名はロウエン、ロウエン「エンフィールドだ！誇り高きエンフィールド国にて王となった者だ！武術大会にて我の力を見せ付けてベルリア国に我の力を示しこの国で起こっている獣人に対する差別意識の改革、奴隷の解放のためにやってきたのだ。

腕を失い足も失ったはずなのに体に傷一つないとは、この人族の少年は我に何をしたというのだろうか？

と言うかこの者の前に立つことが恐ろしくて震えが止まらないのだが王として弱点を見せてはいけないという意識で平気な振りをする。

「もう大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫だ、ナナシ一体、俺にどんな魔法をかけたのだ？」

「それは企業秘密です」

「きぎようひみつ？それはなんだ？我はお前の体を確かに貫いたはずだ！」

「だめですよ！これは秘密ですから」

ナナシは秘密と言い張って教えてはくれなかったが

「ではまたどこかで会えるといいですね」といいナナシを殺そうとした我を友として受け入れてくれた、王であることを隠し、殺そうとした我のすべてを許し受け入れた人族。

「ナナシ・・・か」

会場から去り故郷を目指してロウエンは帰路についた。

・・・で？・・・

で？ってなにが？



・・・ロウエンに使った魔法の話だ・・・

あああれ？反則に近いんだけど、ロウエンさんが【獣牙】を打ちこんだのは土を変化させて作った偽のナナシで気が緩んだ瞬間に《最果て》って名づけた技を使ったのだよ。

・・・その《最果て》とは？我にはロウエンが見たものはわからないのだ説明してくれてもよかるう？腕を偽者に突っ込んだ所まではわかるのだがそのあとロウエンは仰向けに倒れた目を開いたまま、それから何をするでもなく待っていたらあの降参宣言だ・・・

《最果て》はね相手の精神を削る魔法なんだよ、かけられた相手は夢を見るとびつきりの悪夢をね、悪夢は人によつて違うんだけどどんな人でも悪夢を見せ続けられたらやめてくれと頼むでしょ？それがあの降参宣言だったわけなのだ

・・・すべての相手にそれをかけたらいいのではないか？ならばすべての相手は何もせずとも負けを認めて優勝できる・・・

あの時は隙が出来たからできたけど、普通の人に《最果て》を打つても効かないんだ隙があつて初めて使える魔法なんだ、それにこの技はね《従属の首輪》壊した時にその魔法を感じてできた魔法だからあの魔法に近いんだけど、さっきのロウエンさんのようにあまり強くかけると精神の死つまり心が壊れちゃうんだよ。だからあまり使いたくない。

・・・そうなのか・・・

とりあえず控え室に戻ろうか。

こうして2回戦もなんとか突破したナナシは次の相手がダリルだと知る。

「おかえり……」

「ただいま」

リイムとイスカが仲良く話していたリイムも勝利をしたという。

このまま優勝すれば首輪をはずしてもらえろという主人との約束をナナシに話すと当たるとすれば決勝戦、もし決勝戦で当たったなら負けてもいいとリイムと約束した。

優勝には興味はないしダリルが優勝できなかったらそれでいいし優勝するのがリイムならばフィルも無理やり婚約することもないだろ？

……なにせよナナシがダリルを倒さなくてはならんがな……

ロウエンさんに比べればあんな奴たいしたことないさ

……だといいが……

「これより準決勝を始めます！」

「ふん！下賤な庶民の分際でこの高貴な私と戦えるのだからな！神に感謝し我が美しき剣技の前にひれ伏すがいい！」

「それはそれは、この下賤な庶民はせいぜいダリル様の相手ができるよう頑張らせていただきますよ」

「下賤な庶民にしては身分と言うものを理解しているようだな」

「いえいえ、私が理解しているのはダリル様がどうしようもないマザコン野郎だつてことくらいです」

「貴様ー私の母上への愛を愚弄する気が！」

「おや？マザコンが通じるとは思わなかったぞ？」

「そんな滅相もない、下賤な庶民の私にはマザコンの気持ちなどわかるはずもございません」

「まだいつか！」

「ところでダリル様、マザコンの意味を知っておられますよね？どなたからどのように聞き及んでいますでしょうか？」

「フィル王女より母親からはなれることの出来ない腰抜けの事だと教わった！言い残す事があれば聞いてやるぞ？」

「やーい！マザコンー！」

「殺す！」

「それでは準決勝はじめ！」

「ダリルは疾風の如き速さで走る《疾駆》」

《疾駆》：高速で移動できる、《強化》との違いは魔力量によって変化はないが

安定した速さを得られる。

《強化》、《脳内チャット》始動！

「ダリルの剛剣は何物にも阻む事は出来ず敵を葬る！《鬼力充実》」

《鬼力充実》：ある程度の間鬼神の如き力が出せる

「はああ！」

ダリルの横薙ぎの剣を剣で受け止めるが受け止めきれず吹っ飛ばされる。

「まだまだこれからだ！ダリルの放つ刃は相手を切り刻む！《飛翔氷刃》！」

氷の刃が無数に飛びナナシに向かう。

「【残影】」

ナナシの剣が氷の刃を砕く。

「【瞬動】」

ナナシの姿がぶれたと同時に背後から衝撃が走る。

まさか前回の優勝者が新人の庶民に負ける？その事実を観客席にいた貴族達や王族に驚きをそしてダリルには庶民に負けたとあれば公爵の地位を剥奪される可能性もある、なんとしても負けるわけにはいかない。

ダリルはこっそりと懐へ忍ばせておいた薬を使う、今はもう製造法すら定かでない禁断の秘薬、戦闘力を飛躍的に上げることが出来ると言われているが、この薬は3つ連続して使つてはいけなかつた。いいのは2つまでだと念を押されていた。

「ダリルの前には何物も・・・」

「遅いですよ！ダリル様？」

詠唱の途中で顔にナナシの膝蹴りが入る、3回転ほど吹き飛び止つたダリル。

なぜだ！戦闘力は上がっているはずだ！なのになぜこんなにダメーシを受ける？

立ち上がってもう一つ薬を使い剣で切りかかる、ナナシに剣を折られた。

「【獣王双牙】」

前と後ろから同威力の衝撃を受けてその場でひざを就くダリル。

嘘だ、俺は強いんだ、何者にも負けないんだ！そうだ、ここでこいつに勝つてファイル王女を手に入れてこの国の王となる、そう私こそ王にふさわしいのだ！

そしてダリルは3つめの薬を使った。

変化はすぐに起きた、まずダリルの両腕が異常に膨らんだ、足、体と順に

「ははは！我は最強！貴様如き庶民に絶対にまけんのだ！」

ナナシは剣に風の刃をまとわせて足を切るが風の刃は足に傷を負わせる事はできない。

鉄でもすっぱり切れるくらいには魔力込めてるってのに傷もつかないとは

・・・ナナシ、こやつはなにかおかしい一度引け・・・

「にい、にがさぬあい！」

剣をたたきつけた床が砕け地割れが出来る。

なんて威力だよ

《フレイムランス》 《アイスランス》 《サンダーランス》 《アイアンランス》！

火、氷、雷、鉄の槍がダリルへ向かって飛ぶが、火は蹴散らされ氷は砕け鉄は跳ね返された。

これも効かないのなら《空間呪縛》！

空間ごととめようとしたが止まった空間が砕けてしまう。

「庶民の分際で目障りだよ」

右手ではたかれて飛ぶが受身を取り

《フレームレイ》！

フレームレイ：超高温の炎を圧縮しレーザーのように照射する

「熱いなあもう！」

ダリルの振るった腕に吹き飛ばされるナナシ、《フレームレイ》が当たった箇所は少し焦げた程度だった。

「庶民なんぞ我の・・・」

吹き飛ばしたナナシに追撃をかけようと瞬間動きが止まる。

・・・どうした？・・・

うごきが止まった？

「あああああああ a d g j m f p o l l a l : f v o i e n t a  
e n : a o s i v n w」

突然ダリルが吼えると皮膚の色がドス黒い緑色へ変化していった。

何が起きている？

ナナシは今日の前で起きていることを理解できなかった。

唯一ダリルだと証明できた頭はもう肉に埋もれてしまってみる事はできない。

色が変わした後元は胸であつた辺りに目が開き腹には口が開く。

化け物だ・・・モンスターだ・・・

観客席の誰かがそう言った。誰が言ったのか定かでないがぼつりともらしたそのつぶやきは観客達をパニックにさせるのには十分だつた。

我先にと逃げようとする観客達。

「なぜ逃げるんだ！貴様達は私は王だ！王から逃げるものは皆死刑だ！」

元ダリルだつたモンスターはそういうと観客席から逃げようとする人々へ向かおうとする。

「《鎖呪縛》《空間呪縛》《拘束沼》」

ダリルを沼に落としその上から鎖で封じてさらに空間を固定する。

「おいおい、マザコン貴族あんたの相手は俺だぜ？」

「庶民、庶民、庶民、しょみん！貴様は絶対に許さんぞ！」

そういつたダリルは一瞬ですべての呪縛を壊すと落ちていた剣を拾いナナシに切りかかる、ギリギリかわすが次の瞬間、ダリルの中から出てきた剣にナナシは右肩を切られる。

その勢いを保つたまま一回転したダリルに弾き飛ばされるナナシ追撃とばかり飛び上がりナナシを踏みつけるダリル



「どうした？庶民？もう一度だけ聞いてやろう私なんだったって？」

「何度でも言っただけよ、ママが大好きで大好きでたまらないマザコンやろう」

その瞬間ナナシの左腕が胴体から離れた。

「あああああ！」

全身を激痛が走るが血は出ない、切り落とされたが表面は焼かれて炭化しており

血液が流れる事はなかった。

「腕を切り落とした程度の苦痛では殺してやらない、

もっと

もっと

苦しんで

そして

死ね！」

その8、初めてのボス戦レベルを上げて（ry）（後書き）

最近ファフナー見ました、おかげで作品に大きく影響が出ました、  
ここまでグロくならない予定だったのに

その9、上下下左右左右BA、(前書き)

引き続きグロ注意！

その9〜上上下下左右左右B A〜

「どうした！もう声も出ないか！」

眼前に広がるのは化け物と化したダリルと逃げ遅れた人たちが観客席にちらほら見える

「さっきまでの威勢はどうしたあ！？俺様は王だ！王なんだよ！王に齒向かうものはすべてミナゴロシダア！」

ダリルは右腕を失い、踏み潰しても叫び声すら上げなくなったナナシを蹴り飛ばす。

そうしてあたりを見回して初めて気がつく、観客はすべて逃げてしまっていて誰もいない、代わりに騎士があたりを囲み魔法使い達がその後ろで魔法を詠唱していた。

「おい！なんだよ！歓声はどうした！観客はどこへいった！俺を称えろ！俺を崇めろ！俺は・・・あれ？俺は誰だ？俺は一体誰だ？何だこの体は？」

自分の体を見下ろしてもう人と呼べない異形の姿へと変化した自分の姿を自覚する。

「騎士団の精鋭達よ！我らの力を持ってすればあのような化け物も敵ではない！全軍進撃！魔法隊は機を見て戦略魔法を打ち込め！」

騎士達がダリルへと剣を突き立てようとするがその皮膚は剣を受け付けない。

「雑魚が！王に剣を向けるとは身の程を知れッ！」

ダリルの腕になぎ払われる騎士達、それを機と見た魔法使い達は魔法を解き放つ、ダリルを中心とした3m範囲に白色と化した高温の炎が召還される。

「邪魔だ！」

ダリルは腕を伸ばして衝撃波を伴ってなぎ払う。

「貴様ら全員、処刑してくれる！」

それは鎧を着た騎士達はダリルによってなぎ払われ叩き付けられ投げ飛ばされた。

「弱い！よわすぎるぞ！どうした！もう終わりか！俺は王だ！すべては俺の物だ！すべての者は俺にひれ伏せばいいのだ！」

「ナナシ！」

「ああ？」

ダリルが目映ったのは赤い髪の女が動かなくなったマリオネットのようなゴミに駆け寄っていくところだった。

「王である俺を敬い、称えるために駆け寄って来るのならわかるが王の眼前でそのようなゴミクズへ駆け寄るとは貴様も死刑だあ！」

ダリルの左腕が伸びてリィムへと襲い掛かるとっさに剣でガードするがそのまま壁に叩きつけられる。

リイムは口から血を吐き出す、魔法隊がダリルを氷付けにしてその動きを止める。

「ナナシ、首輪が壊せる位の魔力があるんだからあんな化け物倒せるんだろ？私の魔力を使って癒してやるからあいつを倒してくれよ」

リイムの魔力がやさしくナナシの体を包み始める、その時、ダリルを閉じ込めている氷に亀裂が入り氷が砕ける。

「この程度で王であるこの俺を倒せると思うなよ！」

ムチのようにしならせた腕を魔法隊のいるあたりへ叩きつける、障壁を張った魔法使いもいたようだが腕は一瞬の停滞も見せずにくレータを作る。

ダリルの足元で打ち付けた剣が刃こぼれを起こしたり剣が折れた騎士達をダリルはつかみ上げた時

「【琥孔】」

ロウエンがその手を殴る。

「なにやらものすごい殺気を感じて戻ってきてみればナナシ殿は瀕死、騎士隊、魔法隊も壊滅寸前で暴れまわっているこの化け物は一体？」

「また邪魔者かあ！王を殴るとは無礼者め！直接死刑にしてくれる！」

「ぐう……なんという力だ」

獣人族のロウエンの力を知る者たちならばこの光景は奇異なものに見えるはずだ、単純な力ならば獣人族の隣に立つものはいないとされるほど獣人族は怪力の持ち主だ、ロウエンはその中でも1、2を争うほどの実力者であると自覚している。

その自分でもこの化け物が相手だと押されていた。

「【琥穿連撃】」

ダリルはその衝撃に一步後ずさった、その事実にはダリルは激しい怒りを覚える

「俺が押される事などありえない！俺は最強！何物にも負けない！雑魚が何人集まろうと俺には傷つけることなど不可能なのだ！」

ダリルはロウエンを殴り打ち上げると空中にあるロウエンの体を掴んで地面へ叩き付けた。

「ナナシ！ナナシ！」

「リイ・・・ム？」

「もう少し待って！貴方の腕をつける事はできないけれど傷を癒すくらいは出来るから！」

そうか、俺はダリルに右腕を取られて叩きつけられて気を失ったのか。

「リイム！イスカは？」

「大丈夫！知り合いだって言う宿屋の夫婦に任せてきた。」

周りを見ると避難は完了したようでもう逃げ遅れた人はいないみたいだ

騎士達では戦闘にもなっていないようだし、ロウエンさんが頑張ってくれてるけど押されてるな、早く戻らないと

「なんとかアレをなんとか倒さないとリィムとの決勝戦が出来ないよな」

「えっ？」

「ありがとう、もう大丈夫だ」

「でも、傷は完全に治ってないよ？」

「ロウエンさんだけに任せておける相手じゃないんだ」

《強化》 《脳内チャット》 起動！

アレの動きを止める！ 《重力の枷》！ 《鉄の杭》！

ダリルの足の上に鉄の杭が現れて皮膚に当たって止まるが重力の手助けを受けてさらに食い込んでいく！

「があああー！」

文字通り足を釘付けされたダリルはその場にとどまる。



「ナナシ殿！無事だったか！」

「あんまり無事とは言い切れませんでした。なんとか」

「私も手伝おう！」

ロウエン、リィム、ナナシはそれぞれの技をダリルへ打ち込む。

「【獣王咆哮】！」 「【竜炎咆哮】！」 「《雷神の槌》！」

《雷神の槌》：極大の雷が落ちる

ロウエンが掌から白色の玉を飛ばし、リィムは口から火炎を吐き、止めとばかりに雷が落ちる。

「やったか？・・・」

砂煙が立ちこめる中から多少はダメージを受けたダリルが現れた。

「王に向かってこのような攻撃するとはこの狼藉者共め！」

「あれでもダメなのか！」

ダリルが足元の杭を無理やり抜いてこちらへ歩いてくる。

「まずは貴様からだあ！」

ダリルはナナシを掴むと反対側へ投げた、ちょうどそこは入場者の入り口であった。

「ナ・・・ナシ？」

そこにはいるはずのないイスカがいた。

ダリルはこちらにもう一人少女がいることに気がついたようであり、ムとロウエンを弾き飛ばしこちらへ向かってきている。

「イスカ、逃げてくれ！」

「ナナシ？ナナシは私を助けてくれたから今度は私がナナシを助けるね」

隣を通り過ぎてダリルの前に立つイスカ、その足は震えているがしっかりと目の前の化け物を見据えていた。

「ナナシは殺させない！」

「き・・・貴様も狼藉者をかばったな？貴様も同罪だ！死ねえ！」

ダリルの腕はさらに一回り太くなり、イスカに向けてふりおろそうと掲げられた。

やめる・・・助けないと・・・

やめて

デモアシガウゴカナイ

やめてくれ  
カラダニチカラガハイラナイ

やめてくれ  
オレハムリヨクナノカ

やめてくれ  
オレハナニモスクエナイノカ

やめてくれ  
アンナモノナケレバイイノニ

て『やろっ・・・  
・・・すべてを消せば済むだろう？我に任せておけすべてを』消し

世界が  
黒く  
染まる・・・。

「死ねえ！」

誰もが赤き鮮血を撒き散らして潰される少女を幻視する。

いつまで待ってもこない衝撃にイスカが目を開けると片腕でダリルの一撃を受け止めたナナシが立っていた。

「獣人族の娘よ、端へ寄っておるがいい」

ナナシの口から出た言葉なのにナナシとは別人の声。驚きながらもその場から離れる。

「何なんだよお前は！」

掴まれた腕を動かそうとするがびくともしない。

ナナシはダリルを空高く投げ飛ばし

「がああ！」

咆哮とともに口から目に見えない何かが飛んで行きダリルへ当たり爆発を起こす。

「あああああ！」

ナナシが干切れた腕を掴み傷口同士をくっつけると切れていなかったかのように腕がくっ付き変化していく。

リィムは目を疑った竜人族の戦士のような鱗がナナシの体を覆い尻尾が生えている。

焼け焦げたダリルを掴んだナナシは壁に向かって叩きつけ、ダリルの体を扉を開けるように引き裂く。

「馬鹿め！」

ナナシの引き裂いた箇所が口となり炎を吐き出す。

ナナシは一旦下がって間合いを取る、立ち上がったダリルが近くにあった剣いくつかをまとめて大きな槍としナナシへ投げつける。

が、ナナシが右手を前にかざすと槍は黒い壁に吸い込まれて消えていった。

「があああ！」

ダリルの右腕をナナシの爪が楽々と引き裂く。

「ぎゃああ！なんなんだよ！なんなんだよ！お前は！」

ダリルが左手を振るうと十を越える氷の槍が出現し、ナナシに向かって飛ぶ。

ナナシも同じように腕を振るうと黒い幕のような壁が氷の槍を包み込み何事もなかったかのように消える。

ナナシの額に角のようなものが生えると同時にナナシが吼える。

「ああああ！」

飛び上がったナナシがダリルの体へ蹴りを入れる、地面へめり込み周りから見えるのは足だけとなったダリルの足を掴むと壁に向かって投げ飛ばした。

よく見るとナナシの手にはダリルの足が握られたままだった。

「返せ！俺の脚を返せえ！」

ダリルの悲鳴にも近い叫びとともに百を越える炎の槍がナナシへ飛ぶ、全ての槍はナナシが一瞥しただけで発生した無数の黒い球体に吸い込まれていった。

「うああああ！」

ダリルは空を飛んで逃げようとする、高速で飛び上がったその姿は他の者には消えたようにしか見えなかった。

「がああああ！」

更なる咆哮により背中に羽を生やしたナナシが空に舞い上がって飛んでいく。

「なんだアレは・・・」

「俺たちの次元を超えてる」

「何だよアレ！化け物じゃないか！」

静まり返った闘技場に響く叫び。

「イスカ殿、貴方はナナシ殿のあの姿を知っていたのですか？」

首を横に振るイスカ

「あれはナナシじゃなかった」

「どういふことですか？」

「ナナシは私をイスカって呼んでくれるのにあの人は『獣人族の娘』って呼んだ」

「一体どういふことなんだ」

「ナナシ・・・」

イスカはナナシの消えていった方向を見ていた。

ダリルは度重なる魔力により近くの森へ降りざるを得なかった。

「何なんだアレは！俺が王だぞ！騎士団もあの庶民も他のやつらも俺に攻撃を加えるとはそんな事は許されるはずがないんだ！」

そこで天を仰いだダリルの目に空からこちらを見下ろす金色に輝く瞳の異形ナナシと目が合う。

「は、ははは・・・何なんだおまえはああああ！」

残りの魔力を全て使いナナシへと放つ、決まった方向性を持たせないまま打ち出された魔力は時に火に時に水に姿を変えながらナナシへ向かう、が今度もナナシの右手から打ち出された黒い球体が全てを飲み込みながらダリルへ向かう。

迫り来る黒い球体を見ながらまったく動けない事に気がつく、体には地面から生えた影のような黒い人型がダリルを捕らえていた。

「離せ！離せええええ！俺は王に・・・」

最後まで声を聞き取る事は出来ずにダリルは黒い球体に包まれて消える。



「終わったか、ナナシをあの娘の下へ届けねばなるまいな」

再び羽を羽ばたかせて闘技場へ戻っていく異形を複数の町の人が目撃した。

その9、上下下左右左右BA、（後書き）

グロ展開に入ったとたん一気にマイリスト数が増えました。  
世界はグロを求めている！って事なのでしょう？

その10〽色恋沙汰は人傷沙汰〽(前書き)

マイリスト10人越えた!やったね!

## その10 色恋沙汰は人傷沙汰

「ナナシ・・・」

ここは城の地下にある牢屋、清潔とは程遠いその場所にナナシは寝かされ、その傍らにはイスカがいた。

異形と化したダリルを倒したナナシはイスカ達のもとに戻ってくる  
と人の姿となり獣人族の娘後は任せたと残して倒れた。

国の騎士、魔法使い達が全力を尽くしてもまったく歯が立たなかつたダリルを圧倒的な力で倒してしまったナナシを王は恐れ、城の最下層にある牢屋へナナシを閉じ込めたのであった、イスカは城の客室に滞在することが許されていたが一日のほとんどを牢屋で過ごしていた。

イスカは蝋燭の光しか明かりのない牢屋の中で先ほどまでの話し合いを思いだす。

「・・・なのでありまして武術大会の勝者はどうなるのでしょうか  
！」

王の間では武術大会についての話し合いが開かれ、開催委員会の者ケルテムム、リイム、ナナシの代わりとしてロウエン、イスカが集まっていた。

「ナナシ、ダリル両名はモンスターである事を隠し参加していたのです！理由は確かではありませんが今すぐにでもあのモンスターを殺

すべきです！」

「いや、早計ではないかケルテム殿、ナナシ殿は我らを救ってくれたではないか、モンスターならばダリルのように我らを殺していてもおかしくなかるうか？」

「私もロウエンと同じ意見だ、ナナシは確かに異形の姿をしていたが私達に危害を加えようとはしていなかった。」

「ナナシは私を助けてくれた。」

ケルテムは自らの奴隷にまで反論されるとは思っていなかったように言葉を失っていた。

「ならばいかがでしょうか？もし決勝戦を行うにしても闘技場があるような状態で行う事は不可能、ナナシ選手の意識も戻っておられない事ですし闘技場を修理し修理が終われば次第決勝戦を行う、ただしナナシ選手の意識が戻らない場合不戦敗という形でリィムトウス選手が優勝するというのは」

余計な事を言いやがってと心で毒づきながらもケルテムは了承したのだった。

さつき聞いた話ではダリルによってボロボロになった闘技場だが5日ほどで完全に元通りとなるらしい。

ダリルの家族であるキリアン一族は公爵でありながらモンスターを息子として国家反逆を企んでいたとされ国外追放となった、死刑とならなかったのはキリアン家は代々王家に使えてきた三貴族のうちの一つで国に多大なる貢献をしていたため、形こそ国家反逆とされはいるがこれからの彼らの身を案じての国外追放だった。

大会の話し合いが終わり、その後王と当事者達により次の話し合

いが始まる、議題はナナシとは何者なのか。  
ロウエンは一国の王として自分ならどう対処すべきだろうかと思いつつ話し合いを進めた。

騎士隊、魔法隊から有力な情報はなくナナシの変化を目にした者も少ないと報告した時リイムが発言する

「私の故郷に『イーツ』という語り話があるんだがその『イーツ』という存在にナナシの変化した姿が似ている気がするのだ・・・です」

王の前ということを出し慌てて語尾に付け加えるリイム

「言葉遣いなどどうでもよい、その『イーツ』という話を聞かせてもらえぬか？」

「『イーツ』というのは私が祖母から教わった話で竜人族を助けた旅人の話です、掻い摘んで物語を説明すると砂嵐と共にやってきた旅人は全身をローブで隠して一夜の宿を取る、その晩、300を越える野党が略奪にやってくるのですが、ローブを着けた旅人が野党を一人で退治するのです、戦いの途中でローブを切り裂かれて出てきた姿を物語の中ではこう伝えていきます、金色の眼、額に角と強靱な尾を持ち、鱗に覆われ皮膚は剣を弾く、翼で飛翔するその者『イーツ』と名乗る」

「確かに報告にあったモンスターの姿と一致する点があるな、その『イーツ』と呼ばれるものはモンスターなのか？それとも我らのような人なのか？」

「そこまで詳しい事はわかりません、ただ野党を退治した『イーツ』

はそのままでここへ飛び去ったとあります、おそらく危害を加えない限りは無害と考えて大丈夫ではないでしょうか？」

「うむ・・・あの戦闘力は恐るべきものだもしアレがこちらに向けられた場合この国は数分と持たずに消滅するだろう、衛兵！あの者を最下層の封魔牢へ」

「なんで！？ナナシはナナシだよ！？ボロボロになっても私や皆を守るために戦ってくれたのに何で牢屋に入れられなくちゃいけないの！」

涙を流してイスカが叫ぶ

「イスカ殿、確かにナナシ殿は我らを救ってくださいました、感謝しておりますですが王の言う事も確かなのだ、イスカ殿もおっしゃっていた通りあの変化の後、彼は別人のようだったと、だったら我々に襲い掛かってくる可能性も捨てきれないのですよ」

「私はナナシを信じてる！誰が何て言ってもナナシはナナシなんだから！」

部屋を飛び出すイスカ、残された者に彼女を止められる者はいなかった。

アレから今日で2日ナナシは目まだを覚まさない、イスカはナナシの胸に耳をつけるあたにかい温もりと共に聞こえるゆっくりとした、けれど力強い鼓動。

「イスカ殿少し休まれてはいいかがか？私がある間見ておきますから、

ナナシ殿が起きられても貴方が倒れてしまったらナナシ殿も悲しみます」

ナナシの額に口付けをして城の与えられた部屋に戻る。

医術士は身体的な問題はなくすぐに目を覚ますはずだと言ったがどうして目を覚まさないのだろうか？

もしかしたらもう2度とナナシは目を覚まさないのでは無いだろうか？

部屋に入ってふとそんな事を思ったとたん体に力が入らなくなる、嫌だ、ナナシに私は救われた、奴隷となっていた私を助けてくれただけじゃない、獣人族の私を一人の『人』として見てくれた、仲間だと言ってくれた、可愛いと言ってくれた。

そんなナナシに私はまだ何も返す事が出来ていない、なのに！このままいなくなっちゃうなんて嫌だよ！

「ナナシ・・・」

ベッドに顔をうずめた、ベッドは一人だと広がったけど寒かった。

「あの大会委員め！いらぬ事を！」

スフィーリアス邸ではケルテムが苛立ちを募らせていた。

弟と約束した庶民らしき人物も見当たらず復讐を果たしてやる事も出来ず武術大会では優勝を決める事もできずもしあの化け物が目を覚ませばリィムには万が一にも勝ち目は無いだろう、準優勝を取っ



たところで家の地位は上がるとも思えないむしろ化け物に負けたと  
いうことで下げられる可能性もある。

「奴隷！貴様なぜあの場で大会の勝者とならなかった！」

「すみません、ですが私は正々堂々とナナシと戦って勝ちたいので  
す」

「貴様はその化け物に勝てるというのか？あの闘技場で何も出来な  
かった貴様が？」

「くっ……」

「奴隷！最悪相打ちでもいいからあの化け物を倒すんだ！さもないと  
貴様を鬨り者にした拳句ゴブリン共の餌にしてやる！」

「はい……」

勝ちを譲ってもらえるとわかっているものもしモンスターに精神  
を支配されていたらと思うと全力で戦わなければならない。  
もしもの時はリィムは『奥の手』を使う覚悟をする。

### 3日目

イスカは城の庭に咲いていた花をいくつかもらい地下牢へ行く。  
ロウエンに感謝を伝えて牢の中のナナシに話しかける。

「ロウエンさんが体拭いてくれたんだってね、これ見て？綺麗な花  
でしょ？このお城で咲いてたのを貰ってきたの」

花を自分の髪に挿す

「どう？似合うかな？ナナシにもしてあげるね？」

ベッドの傍の椅子に座ると語りかけるように話し出した。

「ねえナナシ？ナナシが戦ったおかげでたくさんの人が救われたんだよ？コニード亭の女将さん達も言ってたよありがとって、ナナシ、昨日ベッドで寝たらね、ベッドが広いの！広すぎるの！いつの間にかこんなに広くなったんだろってびっくりしちゃった！・・・なんでいつもみたいに笑ってくれないの？頭を撫でてくれないの！」

イスカはナナシに泣き付く

「このまま一人は嫌だよ、寂しいよ・・・ナナシ」

ナナシの手がイスカ頭の上に置かれる

「ナナシ！？」

「どうしたんだよ、せつかくの美人さんが台無しじゃないかイスカ」

「ナナシー！」

イスカに抱きつかれるナナシ、泣きながら抱きつくイスカに苦しいので離してと言い出せずしばらくそのままにしていたがその苦しさをすらも悪くないなと思った。

ナナシが目を覚ましたという情報は城中に広まり、ケルテムの耳

にも入った。

「くッ！あの化け物め！目を覚ましたか！これで決勝戦は確実に行われるわけだ！クソッ！」

身近にあつた椅子を蹴り飛ばす。

「家の奴隷が竜人族とはいえ騎士・魔術隊がまったく齒が立たない相手では試合にすらなんののではないか？」

ケルテユムはどうすればあの化け物を倒して地位を守る事が出来るかだった、準決勝を成し遂げただけでも十分に快挙でケルテユムの両親も喜び浮かれていたためケルテユムの事が見えていなかった。

こうなればあの奴隷の魔力を暴走させて一緒に消し飛ばして・・・いや、それだと回りに被害が出る、周りに？そういえばあの化け物は確か人の避難を優先したのだったな。ならば・・・

そこへ一人の奴隷がなにやら急ぎの様子でやってくる。

「ケルテユム様、当屋敷にこちらの文のようなものが届けられました」

「相手は？」

「わかりません、裏口に挟まれておりました。」

宛名がケルテユムとなっていた事も含めて怪しいと思ったのだろう、畏の類が無い事を確認して封を切る。

中に入っていた文を読んだケルテユムの表情が変わる。

「おい！急ぎ腕の立つ奴隷を用意するよう奴隷商と連絡を取れ！化物物が目覚めたとしてもこれなら、これならば勝てる！」

ケルテユムの笑い声が館に響き渡った。

「はい、あーん」

「えつとイスカさん、一人で食べれます」

「ダメ、ナナシは怪我人なんだから」

いつも以上にべつたりないイスカに戸惑いつつ自分の気絶していた数日間のことを聞いた。

異形な姿の自分のこと、ここにいるわけ、2日後には決勝戦が待っている事イベントが目白押しすぎて泣きたくなくなった。

「なあイスカ、武術大会終わったら逃げちゃおっか？」

「なんで？ナナシは悪い事してないよ？」

「まあそうなんだけどこのままだと面倒事に巻き込まれそうな気がするんだ」

「悪い事をしてないんだから逃げる必要なんてないよ」

「そうだね・・・」

イスカの頭を抱き寄せ頭を撫でる。

「あー、御両人入ってもいいかな？」

ロウエンさんが牢の前で顔を赤くして頬を掻いていた。

「どうぞぞ?」

イスカはナナシのベッドに腰掛けているのでロウエンは椅子に腰掛けて話をはじめ

「単刀直入に聞こう、おぬしは誰だ？」

「えっと、俺の記憶が正しければロウエンさんにそれを訊ねられるのは2回目だと思いますけど?名前はナナシ、冒険者ですよただの」

「ふむ、ならばあの異形の姿はなんだ？」

「それです、本当に俺が変身したんですか？」

「間違いないこの目で見ておったからな」

「そんな変身したって言われてもねえ、俺はまったく覚えてないし今変身しろって言われても出来ませんよ?」

「そうなのか、ではナナシ殿はこれからどうするのだ?この国を出

て行く気はあるのか？」

そこまで言った所でイスカが止めに入る

「ナナシはまだ怪我人で今やっと起きたとこなんだから」

「そ、そうであつたな」

イスカの全身の毛が逆立ちロウエンさんが押されている、また来ると残して早々に撤退したロウエンさん

武術大会で俺を戦闘力で圧倒した戦闘狂はどこへいったんだろうか？

「ナナシも、もう少し寝ててまだ傷が完治してないんだから・・・」

「ああ。」

ベッドに横になり目を閉じるとまた意識が遠ざかる。

夢の中真つ暗な闇の中に白い光が話しかける。

・・・ナナシ、すまんなお主の体を使って獣人族の娘を助けたのはよかつたんだが、予想以上に力を使いすぎて体が変化してしまった・・・

変化？

・・・そう変化だ、私の使う魔力は特殊でな我にしか扱えんそれを使った事でお主の体が私の魔力を使える体へと変化してしまったのだ。・・・

という事はイスカの言ってた異形の姿ってのはその変化後の姿？

・・・そういうことだな・・・

変化が起きて困る事って何かある？

・・・いや、特にこれといって無い、私の魔力を多用すれば変化するかもしれないがそれ以外は変化は無いはずだ・・・

ならいいか、なるようになるさ！それにレオはイスカを助けてくれたんだからな礼を言わなければいけないのはこっちだ、ありがとう  
レオ

・・・ありがとう、ナナシ・・・

暗い部屋の中窓が無いので昼間なのか夜なのかすらわからないが近くにイスカがいないことから夜だと判断する。

寝転がったまま体の調子を確認する千切られたはずの右腕問題なし、そういえば何でくっ付いてるんだろう？医者がつけてくれたのか？

足、体、頭問題なし！派手に戦闘しない限り問題なさそうだな

そこで通路の奥から声が聞こえる見張りの兵士だろう

「この奥にはあの闘技場で大暴れした怪物が封印されているんだとよ」

おっと俺怪物になったよ？

「そういえばお前も知ってるだろ？毎日あの怪物の世話に行ってる可愛い子！あの子をどこかの貴族が狙ってるって話」

なん・・・だっ・・・！！？

「確かリーデルト公爵の所の三男だったか？昨日あの子と話してる所を偶然みちゃったんだけどさ！すごかったぜ？」

あの広間の所での話なんだけどさと前置きをすると声真似入りで話し始めた。

「おい！お前！その獣人の娘！俺の屋敷で使用人にしてやってもいいぞ？」

男が肩に手を置く

「結構です」

肩の手を払って去ろうとする、断られると思っていなかった男はあつげに取られていたが慌てて追いかける

「貴様！この俺が声をかけてやってるといつのに！」



「貴方が誰であろうと関係ないです」

アレこそ一刀両断ってやつだなすっぱりと断っていたよ

「俺はリーデルト＝スペンカー！リーデルト家の三男だ！」

「そうですか、では私は忙しいので」

男を無視して去ろうとすると男は腰につけていた剣を抜こうとする

「リーデルト家である俺が下手に出ていれば付け上がりやがって！」

「とそこで男が剣を抜く前にあの嬢ちゃんがリーデルトの三男を反対側の壁まで蹴り飛ばしたんだよ」

「ははは！リーデルトの三男って言えばかなりの美形で引く手数多だと聞いたがああ嬢ちゃんには振られたか！」

イスカって強かったんだな、じゃなくてまだ貴族から狙われるのか、俺が有名になるとその分イスカにも迷惑がかかるのか、何か対策を取っておかないとな。

む、イスカの事が気になって眠れなくなっただけ……。

レオ？レオー？レオー？レオーレオーレオーレオーレオー？

……一度で聞こえている……

レオの魔力ってどんな事が出来る？

・・・一言で表すなら『無』だ・・・

無？何も無いって事？

・・・その通り全てを消し去る力だ・・・

攻撃としてはかなり最強の部類じゃない？

・・・無論、我に敵などいないわ！・・・

そっか、身近の人々は結構最強さんでした。

牢屋の鍵はかかってる、か

風よこの城の構造を調べてくれ《サーチ》！

これで現在位置からイスカの位置兵士達の配置まで手に取るようにわかる、ん？イスカの部屋の前に誰か一人いるな誰だろう？扉を護衛してた兵士のおっちゃん？じゃないな部屋の護衛は今まで二人いたけど今の反応は一人だけ。  
そして、今、部屋の中に入ったな！

《風の飛礫》！侵入者を部屋の外へ弾き出せ！

《風の飛礫》：圧縮した風を叩きつける殺傷能力は低いがそれなりに痛い。魔力量によっては壁を打ち抜く事も可能

侵入者が部屋の外へ弾き飛ばされたのを確認してイスカのベッドの周りに防音効果付属で結界を張るが、すでにイスカが自分で張ったと思われる結界を感じる。

逃げ出そうとしていた侵入者へ魔法を放つ、《鎖呪縛》（コマンド：動けばさらに締めつける）

侵入者は天井から吊るされてしばらくもがいていたが動かなくなる。体が干切れるまで締め上げるリミットなしにしようかと思ったが骨が折れるまで締め上げる程度で許してやるよ。

イスカの部屋のドアを閉めて眠りにつく。

明日は決勝戦という前日にもかかわらず牢屋にいますナナシです。

「出してくれてもよくない？俺は怪獣じゃないよ？」

「ナナシ、出なくても大丈夫私が入ってくるから、それと昨日はありがとう、またナナシに守ってもらった。」

「ん？何の話？鎖の精霊さんじゃないかな？」

「ナナシがそれでいいならそれでいい」

「それで侵入者ってなんだったの？」

「リーデルトって家の次男」

「そっか」

兄弟揃ってイスカに惚れたのか、確かにイスカは可愛いもんなあ。

イスカの綺麗な顔を眺めて一人で納得していたのが気に食わなかったのか、ベッドに腰掛けて顔を胸にうずめてくるイスカ、そっと抱きしめて頭を撫でる。

その間にイスカにお守り代わりに魔法を忍ばせておく、これで俺が近くにいらなくても悪い虫は駆除できる！

・・・この魔法は、運が悪ければ死にかなないぞ？・・・

イスカが嫌悪感を抱かなければ発動しないように組み合わせたから大丈夫！イスカに嫌悪感を抱かせただけで犯罪だから！

「ナナシ、私はナナシのモノだよ？」

首を傾げるイスカは最高だね！このまま押し倒そうかな？

「イスカは俺のモノだよ、誰にも渡さない。」

ちゃんと自己主張はしておこう、ちなみに押し倒したり出来ませんよ？ええ・・・わかっていきます、私はへたれですよ

その日はほぼずっとひざの上にイスカを抱いて過ごす。

そういえば王から何かしらコンタクトがあると思っただが何も無いなと気付いたのがその日の夕方、新しい頭の撫で方を考えてた時だった。

向こうから来ないのならばこっちから行こう！

「イスカ、少しどいてくれる？」

ひぎの上のイス力をどかせると牢屋から出るための魔法を使う《ア  
ンロック》  
ガチツという音共に牢の扉が開く

「ナナシどこ行くの？」

「王様に起きましたよって挨拶しに行く」

「なら私も行く」

左腕にくっつくイス力を連れて上の階を目指す。

「き、貴様！どうやって牢屋から脱獄した！」

「魔法で」

「嘘をつくな！あの牢屋は一切の魔法が使えなくなる封魔牢なんだぞ！」

いや、嘘だといわれてもなあ

・・・今のナナシの魔力は我の魔力と同質だからなああの封魔では封  
じる事はできん・・・

ああそういうこと

「どこへ行く！」

「いや、王様に起きた事報告しないとね？明日武術大会だって話し

だし」

「王のもとへだと！？王の命を狙うか化け物が！」

「人の姿してるれつきとした人なんですか？」

「そのようなまやかしにはだまされん！」

ああ、めんどくさくなってきた。

《沼呪縛》

「くっ！体が沈む！」

「さあ先に行こうか」

首を縦に振ったイスカを連れて王の間を目指す途中で会った兵士の皆さんには、《沼呪縛》《鎖呪縛》《空間呪縛》いろいろな技で落とし縛り固めて進んでいく。

王の間へ来た俺に一同が驚く

「あの者は！」 「まさか目覚めたというのか！？」 「化け物が！」

おや、会見中だったか

「謁見終わったら呼んでくださいね？」

ボタンと扉を閉じる。

しばらく近くで《鎖呪縛》で捕らえられている兵士のおっちゃんを

弄るかなと思つた矢先、兵士が飛び出てくる。

「貴様!どうやって脱獄した!」

「魔法で?以下略」

どうしてもよさそうな鎖が適当に兵士のおっちゃんを縛り上げていく

「呼んで下さつたって事は謁見が済んだって事でいいんですね?  
王様?」

王の前でひざまずいている3人を見る、綺麗な顔をしたイケメン、綺麗な魔法使いっぽいお姉さん、そして魔法使いっぽいイケメンきつとどつちかは回復とか担当なのかな?どうでもいいのでシカトする。

「あ、ああ、それで今日は何の用なのだ?」

「たいした用ではありませんよ?起きたって挨拶しておかないとダメかなって思い至つただけですので」

「おい!貴様!このリーデルト様を無視して話を進めるな!大体貴様は何なのだ!王の間へやってきて無礼であるう!」

「おっとそれはすみませんでした何せ田舎者の庶民なもので」

「さつさと出て行け!」

「では、王様?明日は闘技場へ行けばいいのですか?」

「・・・ああ、こちらから案内をだそう」

「早く出て行け！この愚図が！」

「はいはい・・・」

イスカとリーデルトが睨み合っていた、イスカの頭を撫でながらイスカの部屋へと戻っていく。

わざわざあんな寝心地の悪いところへ戻ってやる気は無い部屋に入ったところで兵士の皆さんを解放する。

この部屋のドアは押して入ってくる内開きのドアなのだがドアを閉まった状態で空間に固定する。

部屋の中でイスカが回収してくれた俺の荷物を確認していく、剣も回収してくれていたようだ、それにしてもよく折れなかったよねロウエンさんとかダリルとかあんなの攻撃に耐えるとは結構な業物なんじゃ。

とにかく回収してくれたイスカを褒める意味もこめて撫でくりまわす。

しばらくすると、扉の方から潰れた蛙のような声が聞こえた。

扉を開けると顔を抑えて入ってきたのはフィルだった、固定したドアを勢いで開けようとした結果扉にぶつかったわけだ。

「もう！ひどいじゃないの！あんな罨仕掛けるなんて！」

「いや、もう少し落ち着こうよ王女様？」

「それは無理よ！せっかくナナシが地下から出てきたっていうのにお父様には会った後私を無視してイスカの部屋にこもっちゃうなん



「酷いわ!」

「ほら、地下から出てくるだけであんなに兵士が騒ぐものだから王女なんかと会ってたら串刺しにされかねないし」

「ナナシなら槍で突かれても槍が折れるから安心ね!」

「おや?と思う、話の感じからナナシが変身したことは知っているよ。うだが怖がっている感じがしない。」

「ファイル?ほらほら怪獣だぞ?」

「?を浮かべたファイルは何か思いついたようで」

「きゃーなんとおそろしいけどものなの?わたしのていそすがきけんだわ」

「コケた、床に突っ伏したナナシを不思議な顔で見下ろすファイル。まず、ものすごい演技が下手すぎる、あと姫ならいきなり下ネタに走らないで欲しい。」

「それは反応が間違ってるでしょ?」

「男女が寝室で二人つきり、これは貞操の危機でなくて?」

「イスカが計算に入っていないよ!」

「初めてが3人でなんて・・・やさしくしてね?」

「ちーがーう!」

地団駄をふむナナシの服が引つ張られる、振り返ると

「ナナシ、私も初めてだから優しくして欲しい、出来れば初めては二人がいいけどナナシが3人がいいっていうならそれでもかまわない」

「イスカあ・・・おまえもかあ・・・」

ブーラス今なら君の気持ちが理解できる、見方に裏切られるってこういう気持ちなんだね。

「まだ少し日は高いようですが気にしては負けですわよね？ナナシは服を着たままの方が好きかしら？」

「ホントにいじけるぞ？」

「あはは！悪かったわ！だってナナシがおかしな事言うものだからもしかしたらケダモノになって襲いたってアピールかと思ったのよ」

「王女にするアピールじゃないだろ」

「なんだかドツと疲れた・・・」

「あれ？ナナシもフィルも脱がないの？」

「本気で脱いでいたイスカがそこにいた・・・」

「それすら可笑しくて俺とフィル、そして？を浮かべたイスカの3人」

で笑い転がっていた。

黒い野望が渦巻く武術大会は最終日を迎える。

その10〱色恋沙汰は人傷沙汰〱（後書き）

さていろいろ伏線回収いたしますよー

その11〜 呆然〜

昨日まで快晴であったが武術大会当日は薄暗い曇り空となっていた、まもなく雨が降るかのような空を眺めながら雨はやだなと思ってしまつあたり今日の武術大会は楽なものだ。

なんたつて、結果が決まつてるんだから！

ナナシは気楽な考えと共に城を出るのだった。

スフィーリアス家

ん〜 ふふ〜

機嫌よく装備をつけ武器の確認をしていくリィムを見た一人の奴隷が話しかけた。

「もしかしたら死ぬかもしれないつてのに余裕があるのね？」

「私は死なないわよ！それに今日の結果は決まつてるんだから」

何も知らない人がこの言葉だけを聞けばリィムのことをものすごい自信家だととらえるだろう、しかしリィムの自信はナナシとの約束があるからこそその自信であった。

「何よその自信は、今日の相手はあの化け物じみた奴だつて話じゃないの」

「実はね？・・・」

リイムは奴隷に約束について話す、話してしまったのだ。

奴隷となった者は生涯奴隷から開放される事無くその一生を終える、イスカもナナシがいなければ同じようになっていただろう。

この奴隷もこのスフィーリアス家に奴隷として買われて以来数十年罵詈雑言に時には辱めや体罰にも耐え過ごしてきた。

だが目の前のこの娘は武術大会で少し勝ち進んだだけで開放されると言う、一番困難である決勝という難関を不戦勝という形でクリアして。

「そう・・・おめでとう。」

「ありがとう！」

リイムは気付いていなかった、奴隷の言葉に祝福の意図が含まれていないことを、怨み、嫉みがふんだんにこめられた言葉を送った者は主の下へ足を向けるのだった。

### 武術大会選手控え室

ナナシとイスカはいつものように話をしているとリイムがやってくる。

「ナナシ！調子はどうだ？」

「やあ！リイム、元気そうだね特に問題は無いよ、と言っても今日は少し出て棄権するだけなんだけどね」

「そんな事言わずに私の相手をしてくれよ、あのモンスターを倒した力を私にも見せてくれ」

いや、アレやったらリイムが死んじゃうから・・・

そんな幸せな時間はすぐに終わりを告げる。

「それでは長らく中断されておりました決勝戦を始めたいと思います、最初に登場するのは美しき赤き竜人！リイムトウス選手！対するは一般とはなにを表す言葉だったのか！一般冒険者ナナシ選手！」

選手説明に酷い差がありますよ？

まあいきなり異形の戦士！とか言われても困るものがあるんですが

「選手の方にはこちらの腕輪をつけていただきます」

何の腕輪だろう？モニタリング？

「それでは決勝戦！はじめ！」

ここに決勝戦の幕が上がった、空は一層暗くなっていた。

また始まった、ナナシは大丈夫だと言っていたがやはり心配だと選手入場口付近で見ていたイスカは試合の行方を気にするあまり背後に忍び寄る影に気がつかなかった。

「【炎流】」

リイムの手から炎が噴出す

「《氷城》」

ナナシの魔法でリイムとの間に氷の塊が出現し、大爆発を起こす。

衝撃で壁まで飛ばされてから気付く水蒸気爆発か！あたりを蒸気が覆いこみ視界が悪くなる

「【竜炎咆哮】！」

そこへさらに火球で追撃してくる、火球をかわして飛んできた方向に向けてではなく自分の周りに

「《暴風壁》！」

強風が吹き荒れ水蒸気と背後から迫っていたリイムを弾き飛ばす

「そこだ！」

「甘い！」

ナナシの剣とリイムの剣がぶつかる、火花が散り魔法が飛び交う、自分が全力を出しても勝てないかもしれない相手にリイムの中の竜人族としての戦闘本能が歓喜に震えていた。

そして見てしまう、闘技場の観客席の上に浮かぶ《ライト》の魔法そして頭の中で声が聞こえる。



「そいつが例の相手だ、何が何でも『殺せ!』」

「いやだ、ナナシを殺すなんて出来ない!」

「そうか、ならばこうするまでだ『首輪の主人として命じる!目の前の敵を殺せ!』」

ああ・・・そうか、初めから救いなど無かったのか

そこでリイムの意識は消えた。

突然立ち止まり動かなくなったリイムに違和感を感じたナナシは構えを解く事無く対峙する、

もう相手はいいからそろそろ降参した方がいいってことなのかな?

「まあ、待ちたまえ冒険者君、こちらを見たまえ君の右手、もう少し上だ、《ライト》が目印だ」

《ライト》の魔法の近くにはナイフを持った黒ずくめと意識を失っていると思われるイスカの姿だった

「おっと、騒ぐのは得策じゃない事くらいわかるな? 貴様は降参せずそこに立ってればいい、反撃もするんじゃないぞ? 妙なまねをすればどうなるかわかっているな? 剣はしまわずそのまま構えてもらおうか」

イスカが人質になっている限りこちらは動く事が出来ない、リイム

がこの事に気がついてくれたら・・・

・・・ナナシよ、気付かんか？あの竜人族の娘《従属の首輪》に支配されておるぞ、さっきまでとはくらべものにならん殺気を放っておる・・・

これってもしかして大ピンチ？

「おっとこれはどうした事だ！ナナシ選手急に動きが鈍ったぞ！対するリイムトウース選手はどんどんナナシ選手を追い詰めていく！」

・・・どうしたナナシよ、動きが鈍いぞ？・・・

急に体が重くなったような気がする

「ゴミクス！気付いたようだな貴様のつけている腕輪は特注品でな装備した者を弱体化させる効果を持つ、ああ審判が死ぬ前に止めてくれるとか希望を抱かんように教えておいてやろう！その審判は貴様が死ぬまで試合を止める事は無いぞ！ははははは！逃げる！逃げる！」

鈍った動きではリイムの攻撃を完全に避ける事も出来ずこのままではリイムの剣がナナシを捕らえるのも時間の問題だった。

焦点の合っていないリイムは話すことも無く淡々と剣を振るう。

暗闇の中ぼんやりでリイムは目を覚ます、体の8割は氷に覆われていて動く事が出来ない。

目の前には闘技場の様子が映し出されていた、自分がナナシを切り殺そうと剣を振るう、反撃もせずただ避け、耐え続けるナナシ。

やめてよ、ナナシを殺したくなんか無いよ！帰れなくてもいいから、もうやめて！

リイムの声は誰にも届かなかった。

この試合が始まってどれ位経っただろうか体中から血を流し満身創痍のナナシと感情の無い顔で剣を振り続けるリイム

空は黒雲が立ち込めていつ降り出してもおかしくない天気となっていた

やばい、このままだとリイムにやられちまう、この腕輪さえなければ何時間でもなんとかなるんだが

剣と剣を打ち合う、何合目かわからないやり取りをしたその時リイムトウースに異変が起きる

ん？

リイムトウースの目から涙が零れ落ちる。

剣を振るうスピードに変わりは無いし表情にも変化は無いが涙は確かに流れた。

なあ、レオどう思う？

・・・美女の涙ほど心打たれるものは無いな・・・

それが知り合いだって言うんだからなおさらな

そしてまた、剣同士がぶつかる・・・。

あの奴隷は何をちんたらやっているのだ！あの冒険者は弱化しているのだぞ！さっさとしとめ・・・そうか！  
ケルテムの頭にいつかの言葉がよぎった

「おい奴隷！あの薬を使え！貴様は死んでもかまわんからあの冒険者を殺せ！」

暗闇の中見ているしかないリィムが悲痛に叫ぶ！

「その薬はダメ！やめて！ナナシさん！お願いだから逃げて！」

そして画面のリムトウスがその薬を飲み込む

変化は突如始まった、リムが何かを飲みこんだと思った次の瞬間、リムの姿が消えナナシの体から鮮血が噴出す。

「いやあああああああああああああ！」

リムが作った薬それは竜人族の中に眠る龍の力を呼び起こすものだった。

無表情なリムトウスの代わりに降り出した雨が彼女の頬を伝っていた。

冷たい輝きを放つ剣が赤くどこまでも紅く染まっていた。

その11〜呆然〜（後書き）

実はリイムトウースの登場時からこの子はこれがしたいがために作ったキャラだったりします。

サブタイトルのストックが切れました、どうしよ。

マイリストが少しずつ増えるのはいいけどランキングにこの作品が載ることはないと思われる今日この頃、だって他の作品おもしろいんだもの……。

その12へ転換へ(前書き)

つじつまが合わなくなったりで悩んだ結果遅くなりました

その12へ転換

今日の前で起きている事ナナシから赤い物が飛び散っている。

赤い物？                   それは血液、人の体を流れるもの

ナンド？                   私がナナシを斬ったから

ドウシテ？               ナナシは斬るべき対象だから

チガウ！                   違う、私がナナシを斬ったそれは事実

コレハウソダ、私はきつとワルイユメを見ているんだ！早く目覚めないと・・・。

画面には倒れているナナシと無表情にソレを切り刻む私そして高笑いしているのであろうケルテムが映し出されていた。

「やったぞ！あの化け物を倒した！ハハハハハハハ！」

「勝者リイムトウス選手！」

やったぞ！あの化け物を倒した！これで弟の仇は取れたし、我が家の地位も向上する！

「う・・・ん？」



「目覚めたか！貴様の主は死んだ！この俺様が退治してやった！ハハハハ！」

表彰式を終え、我が家へ帰宅すると奴隷が寄ってくる

「ケルテム様！私は武術大会にて優勝しました、お約束通りこの首輪を外してください！」

は？何言ってるんだ貴様は？俺が武術大会で優勝するほどの戦闘力を持つ奴隷を解放すると本気で思っているのか？

「そ、それでは約束が違う！」

約束？そのような約束などした覚えはないな、明日よりも我が奴隷として働いてもらうからな！ハハハハ・・・！

「ハハハハ、とてもオモシロイモノを見せてもらったよ、とても面白いものをね」

いないはずの第三者の言葉にその場の空気が凍りつく

だ、誰だ！

今まで家にいたはずなのにここはどこだ！そして貴様は誰だ！姿を現せ！

「目の前にいるじゃないですかあ」

闇から溶け出るようにして現れたのはナナシだった

「いやぁ！悪ですねー、リイムのやる気を出すためにあるはずも無い餌で釣り、いざ手に入れたとおもった瞬間指のあいだからするりと逃げる水のように真実を告げる、ああ安心してください、リイムが武術大会に優勝するこれは『真実』ですから」

ケルテムは手に違和感を覚え恐る恐る見ると手の甲、指、腕いろいろな場所から触手のようなものが伸び始めている、ウネウネと

うわぁぁぁ！

慌てて触手の一本を掴み千切ろうとするが激痛が走る

貴様！俺に一体何をした！

「ふふふ、私は何もしておりませんよ？それは貴方の内から出たものの、あなた自身ですよ……くくく」

触手のようなものはどんどん腕から、足から湧き出て足元にたまっていく、足元にたまった触手は水のように溶けあい一つの塊となった、その塊から5つの突起が伸びたと思うと二足歩行でこちらへやってくる

「お……うえあ……い……」

ゆっくりだが確実にこちらに向かってくる不気味なオブジェは目の前まで来るとゆっくりとこういった

「やあ『僕』、君はもういらないよ？僕がケルテムなんだから」

目の前のオブジェは僕と同じ姿となる

「同じ？よく見てごらんよ、自分の姿を」

そこには先ほどの不気味なオブジェが立っていた

！！！！

俺は叫んだつもりだったこれまでのように「何だこれは」とだが出た言葉は人の言葉ではなかった、もしかすると言葉ですらなかったのかもしれない。

「ふむ、少しやりすぎたか？完全に瞳孔が開いてるじゃないか・・・」

ナナシはイスカを抱きかかえて目を見開き天を仰ぎブツブツとしゃべり続けるケルテムの成れの果てを見下ろしていた

うおおおおお！

盛大なる声援共と同時に勝者の名前が叫ばれている

さてと、多少の回り道はあったけど結果オーライかな後はリィムの首輪をはずしてやればいいだけだな

試合後意識を失い選手控え室にいたリイムの首輪を外してやりケルテュムを廊下に放置してナナシとイスカは王都から姿を消した。

スフィーリアス家は優勝を治めた事により公爵の地位を維持する事には成功したものの後を継ぐべき後継者のケルテュムは精神の破綻により外に出ることすらできない状態でレイナルドもしばらくは怪我による治療のため表立って行動できない上顔のやけどの痕が治療前の宣告以上に残ってしまい貴族として美しくないと引きこもってしまった、地位としては最高位にあるものの失脚し覇権争いからの失脚は火を見るより明らかだった。

イスカが姿を消した城ではこんな噂が流れていた、貴族の奴隷にされる事を恐れて逃げ出した、すでにどこかの奴隷商に捕まり売られている、あのモンスターの仲間だとばれて殺された等々、さまざまな噂が飛び交っていたがどれもイスカは死んだものとされておりよくある話の一つだと笑い話となっていた。

ただ一人を除いて・・・

第2王女フィルネシア「ベルリアは今日もギルドに一つの依頼を出してきた。

ナナシが死亡しイスカが消えた、自分の一言の挨拶も無しにあの日闘技場で見ていた自分の前でナナシは腹を切られて死んだように見えた、モンスターだからすぐに消えた等と言う輩がいるようだが自分には信じなかった、きつとナナシは何かしらの魔法を使って消えたのだとだからイスカも追うようにしていなくなったのだと

フィルはナナシやイスカの事を友以上の存在だと感じていた、いつも王族である自分と対話する者達は自分ではなく他のナニカと話しているようにさえ感じていた。位とは関係なくありのままの自分を見てくれる彼らとの時間はフィルにとって初めてであり心地よかった。

この時間はずっと続くのだと武術大会が終われば彼らを自分の付き人にしてでも近くにいて欲しいと思っていた、だが武術大会を境に彼らは私の前から姿を消した、準決勝の時点ですでに私の・・・いや、王都から姿を消すことは決まっていたのかもしれない、助けた人々からモンスター扱いを受け罪人のように牢に入れられたのだから当然だろう、だからこそ私は彼らに謝りたかった、お礼を言いたかった。

「ごめんなさい」、「ありがとう」「この二つの言葉を彼らに届けたかった。

私が第1王女の代わりに王妃という鎖に繋がれて好きでもない権力者の生贄になる前に、ダリルが消え武術大会の勝者も未知の病に倒れているとなれば私は今しばらく自由の身である。

すぐにこの自由も終わりを告げるのだらうけど今しばらく、ナナシが作ってくれたほんの少しの自由を使い私は私で在り続ける、第1王女のように逃げてしまうのもアリかも知れない、彼女と違う点は隣に守ってくれる人がいない事だ。

「ナナシ、なぜ私の隣にいてくれなかったの・・・。」

部屋から空を眺める彼女から溢れた涙が流れた。

武術大会から4ヶ月経ったある日

イスカは隣で頭を抱えている元ご主人様であり大切な人であるナナシを見ていた。

王都ベルリアから逃亡して向かった先は隣国フィルナ王国・・・では無く王都ベルリア、フィルナ王国、魔都イスルギの間を覆っている森、3国に囲まれているこの森はどの国にも隣接している事とAクラス相当のモンスターが住んでいるため滅多な事では人がやつてくることは無いため隠れるにはもってこいだった。

はずだった・・・。

「誰だよ！俺らを探すクエストなんて依頼した奴は！」

何度目になるかわからない叫びを上げたナナシの頭を撫でて沈静化を図ってみる

「イスカにちよっかい出してた貴族か？もしかして魔法を使ったのがばれて俺の抹殺とか？」

あ、ダメだ少しも沈静してない。

「近づいてきた冒険者を片っ端から抹殺してみるか？」

物騒な事言い出したので強制的に落ち着いてもらおう。  
ナナシの頭を抱きしめる。

「むしろ3国まとめてやっち・・・この類に当たるやわらかさ！かすかに聞こえる生の鼓動！イスカこのまま押し倒してもいい？」

「ダメ、今日はまだ始まったばかり…朝ごはん食べよ？」

「わかった、けどその前に近づいてきてる気配があるから片付けてくる」

「いつてらっしやい、ちゃんと帰ってきてね」

普段は誰も来ない森の中だが稀に冒険者がモンスターを狩りにやってきたりするナナシが作ってくれた家は冒険者に発見されないように結界が張ってあるらしい、普通の結界って中にいる人が丸見えで進入を拒絶するだけなので一度ナナシに聞いたことがあるすると、

「大丈夫、これは次元連結システムの（ry）」だそうだ。

モンスターが無理やり入ってくるからあるので近づく強い気配があるときは確認に行くことがあった。

たまに町へ降りて買い物する事もあったが相手から見ると私は人族の娘に見えるように魔法をかけてもらう、最初、獣人族との対応の差が大きくてびっくりした。

「気付かないで去っていったみたいだ」

「そう、じゃあ朝ごはん食べよ？」

「そうだな、ああ、さっきの冒険者が面白い話してたんだが・・・」

ん？

・・・どうした？ナナシ・・・

いや、忘れてるだけだと思っただがイスカはフィルに別れの挨拶したよ…な？

・・・ああ、なんだ、そんなことが・・・

さっきの冒険者がクエストの依頼者がフィルネシアらしいって話で思い当たったんだがあのクエストがイスカに急遽伝えたいことがあったとしたらどうだろう？

・・・ほぼ間違いなく厄介事だな・・・

やっぱりか

この家を作った時防衛用というか警戒用にいわゆる結界を張ってみた用途は空間の切り取り、正しい手順で結界を解かない限り設定された空間は無いものとして扱われて結界外にでる、簡単に言えば本棚で1、2、3と順番に並んでいる本があるとする指を沿わせていくと普通1、2、3の順で指に当たるはずだが結界の効果は1、3となるすなわち2は無いものとして扱われるわけだ。

4ヶ月も経っているのに未だに発見されていないのはこの結界おかげだったりする。



その結界内でもあの生物はやってきた  
実際に会ったわけではないが扉に手紙らしきものが残されていた。

あーてふてふ？

げんきかい？ぼーい、君にはたのしませてもらったよ、ところで、  
可愛いハニーをもらったぼーずにおいらはすこおーん！しばかり、  
ほんのすこおーん！しばかりじえらしっちゃってる  
わけよう、と言うわけでハーレムなんぞこさえてオレツチにメロン  
メロンになっちゃう予定の美女を奪った勇者とかいうくそやるうと  
家にひきこもっちゃって根暗街道まっしぐらの魔王とか言うのをち  
よいとズバットやっちゃってくれない？

ワシとぼーいで世界にちえんじざわーるとさせてあげないかな？や  
つてみない？殺っちゃわない？

とそのあと長々と文章が続くんだが大体そんな感じだ

この手紙を読むまで別世界から来て自分の世界の事を忘れてた事に  
驚いたが、正直今もこの世界に戻りたいとは思わない、なぜなら元  
の世界に戻ったらイスカのような耳や尻尾の人に会うことが出来な  
いから！勇者と魔王つてのには興味があるな、いっそ全て支配して  
獣耳ワールド作るか！獣耳を愛するものが集う町貴族は耳と尻尾持  
ち事が最低限のルールとか・・・実現したいな。

起こせ！下克上！耳尻尾持ちが貴族として上階級を占めて人族が下  
級に落とされる

・・・その案だとナナシは下級扱いだぞ？・・・

耳、尻尾に囲まれるなら下級でもかまわない！今も下級扱いだしね

・・・ならば耳や尻尾を持つものを集めて集落を作るのはどうだ？  
国を作るより楽に囲まれる事が出来るぞ、だが全ての耳、尻尾持ち  
を集めるとなれば世界のバランスが崩れるぞほぼ全ての奴隷がいな  
くなるのだからな・・・

おーけいおーけい！それじゃあ世界に喧嘩売るための準備をしまし  
ようか

と言うわけで始まった世界に喧嘩を売ろう作戦なんだが

その作戦を始める前に例のクエストのせいでなかなか動きたくても  
動けない状況にあった。

そして今に戻る

「ナナシ・・・パンくず付いてる」

「おつとありがと、イスカ、クエストを何とかしつつ俺の俺による  
俺のための楽園を作るのに一番いい方法ってなんだろうな」

「ナナシが王様になれば全部ナナシのもの」

「・・・ソレだ！、とりあえず魔王も勇者もいなくて近場のベルリ  
アから制圧してみるか」

「久しぶりにフィルにも会えるね」

自分勝手な世界征服が始まります。

その12へ転換へ（後書き）

その時の気分でストーリーが進むからもとの予定からどんどん話はずれていく……。

獣耳、尻尾大好きです。

その13「世界征服はコツコツと??」(前書き)

一段落したせいで次の展開に困ってしまった

その13〜世界征服はコッコッと〜

「いたぞ！こつちだ！」

フィルナ王国は深夜にもかかわらず真昼のような明るさだった。もちろん太陽が出ているわけではない、松明、ライトの魔法光源はいろいろだったが、その所有者達は皆ある者を追いかけていた。

「ノフィスは武具通りへ行つたぞ！」

《ノフィス》：2、3ヶ月前に突如として現れた盗賊、盗賊と言えばある程度の人数が集まり略奪、殺しを行うものとされていたが、その者は違った。

たった一人で誰も殺さず獲物を奪う。必ず何かしらで顔を隠して現れ、所有者に一言告げてから逃げている。

「こんばんは、ノフィスです、獲物・・・もらって行きますね？」

男の声だった、女の声だった、そんなことはないモンスターの声に違いないなど、ノフィスに関していろいろな情報はあったものどもれも数が多過ぎてどれが正しいものなのかさえ判別不可能だった。

「追い詰めたぞ！ノフィス！さあ今夜こそ牢屋へぶち込んでやる！」

捕り物はクライマックスを迎えていた、路地の突き当たりで黒い口  
ーブをまとい布で顔を隠したノフィスを囲む数十人の見回りの兵士  
達、ノフィスは今夜の獲物の入った麻袋を担ぎなおすと空を指した。

「追い詰めた？空ががら空きじゃないか」

兵士達の中には魔法使いもいたが皆人族で空を飛べるような者はい  
なかった。

盗賊が空を飛んで逃げるなど聞いたことが無い、そんな魔法が使え  
るのならば城に召抱えられ、盗賊などしなくても暮らしていけるか  
らだ。

ゆえに兵士達は想像すらしなかった盗賊は走って逃げるものだと決  
め付けていたから

「それでは・・・ごきげんよう」

ノフィスは走った、空を。

まるでそこに地面があるかのごとく。

兵士や魔法使い達はその姿を見送る事しかできなかつた、魔法を使  
ったと啞然とした者、何も出来ずに呆然とした者、とっさに魔法を  
放った者もいたがノフィスに当たる前に何かに当たり届かなかつた。  
今夜も逃げられてしまった兵士達が目を向けるのは、「残念でした、  
次はがんばろう！」と書かれた壁だつた。

「追っ手はいない・・・か」

森の中を盗賊は森の奥へと進んでいった。

ノフィスの噂はすぐに広まった、ギルドもノフィスの情報、討伐に賞金を掛けた

が冒険者達は相手にされ無かった、いや、遊ばれるだけだった。

槍の得意な竜人族の冒険者は槍で突こうとしたが槍を奪われ後日リボンを付けて返された。

弓の得意なエルフは気配を隠して矢を射たが素手で掴まれた、2本目を射ようとするも矢束に矢が固定され矢が抜け無かった、数時間後には何事もなかったかのように矢束から矢を抜く事が出来た。

魔法を使った人族はいつされたのかもわからないうちに顔に落書きされた、その落書きは3日は消えなかった。

等々被害といった被害は無いのだが精神的にダメージを残すノフィスのやり方に冒険者達は一部を除いてかわらなくなった。

ノフィスが奪うとされる《獲物》になる条件は、これまでの獲物から察するに貴族の屋敷の侍女もしくは奴隷だという。

過去に貴族の令嬢が、ノフィスと出くわした事があったそうだが、令嬢には何も告げず傍にいた侍女へのみ質問したそうだ。

町ではある噂が人から人へと語られる。

あの盗賊はどのような場所であっても、薄幸の星の元に生まれた者の前に現れ、蔑まれるだけの生活から助けてくれる使者で、私欲を肥やす貴族は、かの盗賊により天罰を受ける、このような噂まで立っているから私欲を肥やしていた貴族達はなお一層警備を固めてい



った。

「うん、見事に作戦通りだな」

・・・そのようだ・・・

町のオープンテラスから町の様子を観察しながらそうつぶやいた。

事の始めは世界征服だった、耳・尻尾のために世界征服しよう！なら何が必要だろう？世界を征服するのだから征服する国が必要だ！この国には国が3つもあるぞどれを選ぶか？どの国がこの計画に役立ちそうなのかまったく情報が無い！情報が無いなら全てをゼロにすればいい！そうだ！ゼロから始めるならば情報なんか無くても国が作れる！

国があっても人がいなければ国として成り立たない！ならば今の国に嫌気が差している人たちを集めよう！おや？そうすると耳・尻尾組も集まるのではないか？これはいい案だ！さっそく実行しよう！まずはフィルナ王国だ！

ということでもナナシは、《盗賊》として使用人や奴隷等に片っ端から聞いて回っていたのだ。

「君は今幸せかい？」と・・・

NOと答えれば獲物として我が家へ御招待、YESと答えればそのままさようなら、中には怯えて話せない者もいたが、そういった人は一時的にお持ち帰りしていた。

これまでのところYESといった奴隷達はいない、ちなみに犯罪を犯した者はNOと言っても「そう？ご奉仕頑張って！」といって放置がしている。

「そろそろ第2段階といきますか」

第一段階は明らかに不当な扱いを受けている使用人達が対象だった。第二段階の対象は貴族、それも権力に屈せざるをえない状況にあるもの達。

フィルナ王国において、権力は家が持つものとされているつまり、過去に何かしらの貢献をすれば、その家の人間ならば誰でも同等の権力を得るのだ、生まれたばかりの赤ん坊ですら公爵家に生まれれば生れ落ちたその時から公爵と同等の権力を持つ。

市場で顔立ちの整った娘がいた、運悪く馬鹿貴族の目に留まり側室として捕らえられた。

なんて事も珍しくないのがこの国である、そういったこともあり最初この町へ着いた時は、イスカとナナシ二人で市場を見て回ったのだが《侯爵》を名乗る馬鹿に出会った。

イスカの美貌に目がくらんだ貴族は、彼女が獣人族という事もありナナシの前でこういった。

「私は侯爵家のくである！その娘を私の奴隷とする、その男！その娘を私に差し出せ」

イスカを差し出せ？寝言は寝てから言おうか？

「寝言は寝てから言いやがってくださいませ私達は冒険者です、旅の途中ですのでこれにて失礼しますクス貴族様」

ナナシにしては我慢した方だと自画自賛した

「貴様！私を侮辱したな！おい！お前ら！あの男を殺してあの娘を捕らえる！」

十数人の護衛の人たちが手に剣を持ってやってくる。

結果は火を見るより明らかだった、無双だった。ただし、無双したのはナナシではなく、

イスカだったが

獣人族は元々魔力が少ない、代わりに純粹な力ならば竜人族とも引けを取らないといった特徴がある、そこにナナシの寵愛とも言える付加魔法により、魔法抜きならば勝つ事はたやすいという超戦士イスカが誕生した。

目にも留まらぬ速さで、騎士の懐へもぐりこみ一撃をもって鎧と剣を砕く。

魔法を使う相手ならば勝てないかもしれないが、負ける事も無いそのための付加魔法ですとナナシ談

数分後には、呻き声を上げる騎士達とナナシに撫でられ尻尾を振っているイスカの姿があった。

貴族にはたあつぷりとお願ひして、今日の事は内緒にしてもらいなきを得たのだが、毎回これではイスカの精神に悪いという事で、イスカが町へ出る時はナナシ同伴のもとフード着用で出かける事になった。

話を戻して第二段階はその貴族達の中でも苦しい思いをしているもの達がいるのではないかという事だった。

「それじゃあ始めようかノフィスによる選別第二段を」

その13「世界征服はコッコッと」(後書き)

大晦日に更新だあ！

その14「やるなら何でも堂々と」(前書き)

年越しまでに間に合ったー  
かなり短くなったのは御愛嬌

その14〜やるなら何でも堂々と

誰もいない路地裏から空に向けて魔法を使うと空に巨大なノフィスが現れた。

「ご機嫌よう！フィルナ王国の皆様これより皆様に素敵なおプレゼントを差し上げましょう！」

次の瞬間フィルナ王国に住む全ての人の前に黄色の玉が現れる。

「貴方達、今の生活は幸せですか？権力を傘に娘を取られても何もいえなくてもいいですか？権力者の息子というだけで子供に、馬鹿にされても幸せですか？もし今の生活から抜け出したいと思うのなら、目の前の玉を取り割ってくださいその気持ちがお本物ならば貴方達を迎えに参ります、たとえどのような場所にしようとも、それでは」

そして第二弾の幕が上がった。

つまりこないだのイスカのように連れ去られた人々は嫌々したがっているはずだ、ならばその場所を自ら申告してもらおう、という作戦だ。

この玉は割った人の心を伝えるもの、権力により悔しい思いをした記憶がナナシへ流れ込んでくるこれを《脳内チャット》で救出対象になりえるかどうかを確かめていく。

この方法一般人が行うと情報量の多さに廃人となる可能性があるが《脳内チャット》を使い情報量を分割、制御して抑えている。

「予想通り、貴族の以上となると助けを必要とする……ん？」

……どうしたナナシ……

「反応のひとつが城から出てる」

ありえないことだと思う、城に奴隷はいなかったし侍女も虐げられるような者は、いなかったはずだ。  
となるとこの反応は……

「王族？」

……あのふんぞり返ってる奴らが虐げられるようなことはあるまい……

「よし、今日の獲物は城の反応にするか」

……ところで今夜もアレをするのか？……

「ははは、愚問だアレは俺の楽しみだからな！」

落日……朱に染まっていく空、家に帰っていく人々、そして！教会の屋根の上にたたずむ盗賊！

「さて、仕事しますか！」



城の城壁を越えて内部へ潜入する、植え込みに隠れて小声で話す

「さて、本日御紹介するのはコレ！」

・・・えっと、あーそうだ、こほん・・・のふいすさんこれはふうのいとじゃないのか・・・

「この糸はなんと魔力で出来ているのです！」

・・・おお！それはすごいですねこれならばかんたんにきれることはないでしょう・・・

「いえいえ！それだけではありません！この糸には睡眠属性が付与されていて触れた者を安らかに眠らせる事ができるのです！」

・・・でもおたかいんでしょう・・・

「そこは勉強させてもらいました！なんと銀貨1枚！」

・・・きれにくだけじゃなくてすいみんぞくせいがついてぎんかいちまい？これはおやすい・・・

「まだまだ！今ならなんとこの痺れ針もつけてお値段そのまま銀貨一枚！」

・・・これはおとくですな・・・

「今すぐお電話を！電話番号は獣耳は114114（イイヨイイヨ）まで！」

・・・ナナシ、このデンワバンゴウというのは何なのだ？・・・

「ははは、キニシナイキニシナイ！」

城の廊下を歩いていた兵士の一人に、糸をかけ吊るし上げる！そしてピンと張った糸を一度鳴らす

「この音は外せないね・・・」

・・・わからん、ナナシ眠った兵士を吊るし上げる意味は何なのだ？・・・

「キニシナイキニシナイ」

糸を引つ掛けて眠らせたり、吊るして眠らせたり、いろいろ眠り糸を使って進む、睡眠者が二桁に突入したところで昼間の反応の出ている部屋の前まで来た。

「この扉の奥に今回の獲物があるのか、それにしても王族ってもっと高いところにいるイメージだったんだけど外れたな」

そこは地上何十mの塔の上ではなく、1階の隅の部屋だった。

「さて何が出るかな？」

扉を開ける・・・あけ・・・あ・・・あけ・・・開かない！？

・・・まあ当然鍵がかかってるだろうな・・・

「くう！ちよございな！鍵があるつとも俺の毒牙からは逃れられんのだ！」

・・・キヤーナナシノアクダイカーン芝居はいいからとつと開けんか・・・

「おぬしも悪よのう」

鍵穴周辺を魔法でくり貫き鍵の意味を失くしてドアを開く、マスターキー必殺な  
んちゃって

部屋には女性と思われる影が一つだけあった

「・・・誰？」

その15 殺人遊戯 (前書き)

投稿したつもりが出来てませんでした。

## その15 殺人遊戯

窓の無いその部屋に、その女はいた。

鎖が幾重にも巻きついた状態で、表情の無い顔をこちらに向けていた。

「どうした？いつものように次の抹殺対象を教えるがいい、抵抗はせぬよ、いやこの呪具のせいで抵抗もさせてもらえんといったほうが正しいか」

表情を一切変えずにそう告げてきた女はそれ以上は話さずこちらの反応を見るようにじっとこちらを見ていた。

・・・まさかこやつはドールズなのか？・・・

ドールズ？レオそれはいつたいな

何なんだ？と問おうとした時女は口を開いた。

「レオ？私がかかりますか？虚無の、リリースでございます」

・・・やはりドールズか、それにしてもその姿はどういうことなのだ、Rシリーズというのは？・・・

「今の私はこの呪具により私の自由は著しく制限されており、情報を漏らすことが出来きません、申し訳ありませんが虚無様、ここであったのも何かの縁でございます私を破壊してくださいませ」

・・・なんだと？ドールズはマスターの命を最上とし完遂するまで

屈しないのではなかったのか？・・・

「私もドールズとしてそう在りましたがこの呪具を着けられてからあの人族の命令に逆らう事が出来ない、このような醜態をさらすくらいならば私を破壊してくださいませ、人族の玩具として玩ばれるのは耐えられません」

・・・呪具とは？もしや従属の首輪か？・・・

「詳しくは知らんが私の首についているものがソレだ」

・・・ナナシ、頼むあのドールズを助けてやってくれ、我の古き友なのだ・・・

「おいおい、レオ何言ってるんだよ、今回の目的は救出だけ？今夜も盗賊ノフィスがするつとこの子をいただいでいきましようか！」

・・・感謝する・・・

「何を言っている人族！私はもう人族になぞ使われたくない！」

・・・リリスよ、この人族、ナナシならばその呪具を外す事ができるかも知れぬのだ、ゆえにもうしばらく辛抱してくれ・・・

「本当なのでしょうか？虚無の、いや今はその言葉を信じようと思えます、その人族！今の私は自己を制御できんゆえに拘束した状態で運ぶとよい」

「わかった」

鎖を切り芋虫のような状態のまま、リリースを麻袋へしまっ。城の中には眠った者しかいないので気にせず正門から出て行く、そこではったりと出会う。

「あー、こんばんわ？昨日振りです」

「貴様！ノフィス！警邏隊っ！警邏隊っ！ノフィスだ！」

しまった、もう少し警戒するんだった昨日の見回りの兵士とつつかり鉢合わせかよ

それから増える事増える事、最初は二人だった兵士がいつのまにか4人6人と増えて今では昨日以上にいるのではないだろうか・・・

「昨日の失敗を生かして、今夜の見回りの範囲は空も含まれているぞ！今夜こそ貴様の最後だノフィス！」

いやあ仕事熱心なこと、今日はこの後呪具の解除もあるから早めに終わらせようかな

「闇の中にて後悔の念と恐怖に悶えるがいい《蟲穴》」

夜の闇で足元がそれほど見えていなかった事も幸いして目の前に開いた大きな穴に落ちていく兵士達

「うわあああ！」 「体中を虫があああ」 「鎧の中に入ってきたああ」

「いやああああ」 「くあwせdrftgyふじこー」  
「p」

穴の中から聞こえてくる悲鳴、大人数で押し寄せたせいで前がよく見えず、どんどん穴へ落ちていく兵士達、レミグスってこんなのだったなあ・・・と思いつつささと逃げるナナシ。

城まで戻ってきたナナシは最下層で何があっても対処できるように人払いをして呪具を解除していった。

リリースに着けられていた呪具は従属の首輪とは違うものの使われている術に大きな違いは無かった。

「おお、これで私は自由だよ、やくマスターの命を遂行できる、礼を言いたいのだが虚無の、そろそろ姿を見せてくれてもよかるう？」

・・・ドールズよすまない、私はすでに体を失っていてな、お前の前にいるナナシの中に間借りしているのだ。・・・

「あの殺しても死なない、死ぬ時は世界が終わる時、神すら殺せないと言われた貴方様が肉体を失っていたとは、もしや貴方様が肉体を失ったのは人族の『かつぶる』とやらのせいでしょうか？」

カップル？なぜカップルがレオを殺せるんだ？

・・・ドールズ、それは違うぞ確かに我はカップルを見ていてあの雰囲気の中では頭が痛くなり苛立ちのあまりすべてを消し去りたくなるとは言ったが言葉のアヤというものだ・・・



「そつでございましたか」

「えーっとできればレオ紹介なぞしてくれたらうれしいんだけどそろそろ部外者から関係者くらいにはなりたいんだが」

「……すまない、彼女はドールズと言って大昔のエルフ族が作りし戦闘ゴーレムだ、我が知っているタイプと異なっているので後継型という事だろう、リリスよ、お主の前にいるのが我の宿主ナナシだ我とほぼ同じ力を持っておると思えばよい……」

「ナナシ様先ほどは見事な浄化術で私のボディにダメージを与えることなく呪具を破壊していただき感謝しております」

「いえいえ、助けられてよかったです」

「……して、リリスよ今のお主の主はどのような命を下しておるのだ？……」

「はい、本当ならば人族の前で命を話すなど許されぬ事なのですが虚無様の前であるので特別お話させていただきます『ベルリアのダリル＝キリアンの抹殺』でございます」

ダリル……キリアン？

「……リリスよ、お主の命の相手なのだが……」

「はい、もしや虚無様は対象に関して何か御存知なのですか？」

「……その男ならば数ヶ月前に、ナナシによって葬り去った……」

「そうでしたか、お手数ですがその記憶を共有してはいただけませんか？対象がいないことを確認すれば私の任務も終わりますので」

「・・・ナナシよ、目を瞑ってくれぬか？リリスに任務が終わっている証拠を与える・・・」

ああ、わかった

このときナナシは、どうやって記憶を渡すのか聞いていなかった、と言うより自分がダリルを倒した記憶が無いので、レオに全て任せていた。

「ナナシ様申し訳ありませんがもう少し屈んでいただけませんか私では届きません」

そこで首に手が回される感覚があり、口にやわらかい感覚が伝えられる・・・

驚いて目を開けるとナナシの頭をしっかりと固定してキスしているリリスが映った。

「・・・ナナシ、目を閉じている、目からの情報が混じるとやりにくい・・・」

キス・・・されてる・・・イスカ、ごめんよ・・・俺、汚されちゃった・・・

そんな感傷に浸っていたら口の中に何かが入ってきた。

コレは！？舌！！？？あの伝説のディープキス！？

【ディープリッツ】：恋人同士にのみ許される超必殺技、独身なら  
ばリア充爆ぜろ、と呪いの言葉を吐いてしまおうという。

目の前のリリスはイスカとはまた違った美人でビスクドールのよう  
なクールな美人と言った感じなのだがまさかこんなに情熱的なキス  
をいきなりされるとは思わなかった！クールな人ほど内に秘めた思  
いは激しいと言う事ですね！

「虚無様、共有感謝いたします、確かに消滅を確認いたしました、  
次の命を受けますのでしばらくお待ちください。」

なあレオ、リリスさんは一体何してるんだ？

・・・おそらく彼女のマスターと連絡を取っているものと思われる。  
・・・

「ナナシ様私のマスターより伝言を預かっております。どーもあー、  
こんばんわあうちの子助けてくれた上に、キリアンの馬鹿どもやっ  
ちやってくれたそうでありがとうなー、それでお礼と言っちゃなん  
やねんけど、この子もらったってくれへん？虚無のにーさんならこ  
の子任せられそうやし、人族の子も子供はでけんけどこの子は上手  
やで？それはもう死ぬくらいにそんじゃまたなー」以上でございま  
す」

エルフのイメージが！っていうか死ぬほどって何！？やったら殺ら  
れるの？

「それではナナシ様、私はこれより貴方様のモノでございませう、以  
後よろしくお願いいたします」

・・・よかつたなナナシ、ドールズ初の人族マスターだぞ・・・

「つきましてはナナシ様私の名前をいただけませんか？」

「名前？リリスじゃないの？」

「リリスとは名ではなく私の型に過ぎません、ですので私に名をくださいませ」

名前ね、銀の長い髪に緑の瞳出るところは出てる美人さんにつける名前ってどんなのがあるだろうか、あー覗き込むようにこっちを見ないでくださいイスカとは違ういい匂いがするう・・・

・・・ナナシ、彼女の戦闘方法や武器などから考えてみてはどうだろうか？・・・

それはいい案だ！

「それじゃあ名前はつけるけど今はいい案がないからすこし戦闘方法をを見せてくれる？」

「かしこまりましたマスター、ですが私が戦闘において用いるのは、ルーン、およびこの鎌、そして私の体に埋め込まれた暗器でございます、あまり見せびらかすものではないのですが」

ルーン？

・・・ルーン文字を使った魔法の略称の事だ、今の世界にはほぼ残っていない魔法の一つで文字を媒体とし詠唱を必要としない魔法だ、主にハイ・エルフくらいしか使う者が残っておらんが強力な魔法だ

と聞いている・・・

「ん、ちょうどいい近づいてくる反応が4つあるな」

「こちらでも確認しました、魔法使い2剣士1狩人1と思われます」

「一人で対処できる？」

「おまかせを」

答えると同時に姿が消える、あと残ったのは宙に輝く文字だった。

「ほんとにこのあたりなんだろうな！このあたりにドライアドがいたって？」

「まちがいねえ！おれはこの目で見て確認したんだ！緑の体に大きな花をつけた娘だった、あれは近くに棲家があるにちがいねえぜ」

その冒険者達は貴族の依頼を受け森の中にいたというドライアドの捕獲にやってきた、ドライアドとは上半身は美女だが下半身は根を持つモンスターであり頭に大きな花を持つのが大きな特徴である、言葉を解するほどの理性をもち温厚な性格ゆえこのような密漁に遭うこともあった。

冒険者達は自らが狩る側で、自らが狩られるとは夢にも思わなかった。

「お、森を抜けたか、おい、あそこを見る」

「ドライアドじゃないみたいだがいい女じゃねえか！」

森を抜けた先には小さな滝があり、冒険者達はそので水浴びしている女を見つけるとついでに『捕獲』しようところそりと近づいていく、

！？冒険者達の気配に気付いた女は慌てて逃げ出す、すぐに冒険者達は回りこんで行く手を阻んだ

「よお、綺麗なお嬢さん俺たちと遊んでくれよ」

剣士の男が女に手を伸ばし掴んだ瞬間、男の腕が消える

「あ、がああああ！」

剣士はひじから先が無くなった痛みでのたうちまわる。

「この女何しやがった！」

狩人の男がナイフを振りかぶって切りかかる、が狩人は7つの肉の塊へと変化した。

二人の魔法使い達には女が魔法を使った様子がなくなぜ剣士と狩人がやられたのかわからなかった。

魔法使いたちは自分達が二人がかりで、魔法を使えば逃げる事くらいの間はできると考え、《ファイアーボール》《ウインドストーム》を使うために詠唱を唱えたが声が、音が出なかった。

全ての音が消えれば詠唱は出来ない、詠唱できなければ魔法は使えない、ナナシのように無詠唱で魔法が使えるれば使えなくは無いのだが今の二人はできなかった。

魔法使い、魔法が使えなければ、ただの人

ただの人は断末魔をあげるも音とならずにこの世を去った。

「お見事、今のがルーンか」

「はい、このように私の中に内蔵されているルーンはほとんどが対魔法使い用に設定されております」

「ほお、最初の二人を倒したのは糸なのか？」

「お分かりになりましたか、アレは私の魔力を使い作り上げた糸でございます」

「糸か、いい名を思いついた！『アラクネ』ってのはどうだ？」

「『アラクネ』・・・マスターよい名をありがとうございます、これからよろしくお願いしますね、ではマスター最後にマスターの魔力を少し分けてくださいませ」

とまた突然唇を奪われた・・・。  
もうお嫁にいけない！！

アラクネにはイスカの護衛として城を任せるのがいいと思いながら右腕をしっかりと固定して離そうとしない人形を視界に納めてゆくりと城へ戻っていくナナシだった。





その15 殺人遊戯 (後書き)

コメント、感想、要望、いろいろおまちしております。

その16〜亀裂〜（前書き）

さてそろそろ終わりに向けて話を閉じないといけないんですがどうやって終わらそうかな？

## その16〜亀裂〜

「マスター、ベルリアにて不穏な動きがあります」

城に住み着いたアラクネは冥土、いやメイド兼イスカの護衛を任せ  
ている。

任せた結果この服装がメイドの正装ですと、黒いメイド服を身に着  
けていた、銀の髪と黒いメイド服は、かなり似合っていた。

「不穏？あの国には反乱を企むような貴族は、残っていないか  
ずじゃなかったっけ？」

あの国を去ってから情報屋から、情報を仕入れていたがソレらしい  
情報は、なかったと記憶している。

「いえ、貴族間の権力争いではなく、マスター好みの『騒動』で  
ございます」

騒動って事はどこかでモンスターの異常発生でも起きたかな？

「それで、規模と発生予想時間、ベルリアの戦力は？」

「規模はランクB程度、発生時間は二日後ではないかと、ベルリア  
騎士・魔法隊共に8割と言ったところでしょう、後は冒険者がどれだ  
け集まるかですね」

B程度ならばベルリアの防衛戦力だけで十分戦えるか、それほど面  
白くなりそうも無いな。

「マスター、今回はマスターが動かざるを得ないようです。」  
「ん？どういうことだ？」

「ベルリアは国内貴族に戦力として召集を掛けていまして、今のところどの貴族からも奴隷を最低一人は出しているようです、そのほかにマスターの軍を率いているのは、今までに見た事の無い姿だそうで『できそこないのウサギ』と言う表現が一番しっくりくる外見だそうです。」

ナナシはその言葉を聞いてコケた。

「アラクネさん、その情報からなぜ俺が戦場へ行く事になるんだ？」  
アラクネは何を言ってるんですか？という風な顔を見ると真面目な顔になっていった。

「マスターはおっしゃいました、面白い事には全力を尽くせ、どんなに馬鹿げている事でも全力でやればその姿は笑いが取れると」

「ああ、そんな事言ったな、で？」

「ですから、私とイスカ様のために、笑いを取ってきてくださいませ」

きつと、できそこないのウサギと戦うマスターは笑えるはずですが、と無表情なのに恍惚としているようにみえる顔で、アラクネは言い切った。

「あほかぁー」。」「

「とうりやり取りをしたのが昨日」

・・・誰に説明しておるのだ？・・・

「いや、傍観者？」

・・・ふむ、そうなのか？・・・

ナナシたちはベルリア附近の丘から様子を伺っていた。

「しかし、アラクネの話ではモンスター軍はBランクって話だったよな」

「はい、確かにそのように報告いたしました。」

「俺の目が幻術にかかってなければランクAのファイアドラゴンが見えるんだが」

「確かにファイアドラゴンがいますね3体」

モンスター軍はランクBどころかA、下手したらさらに上かもしれない程に増えていた。

「これはベルリア滅ぶんじゃないか？」

「マスター追加情報です、ベルリアの一部貴族が逃げ出しました」

「ナナシ・・・どうするの?」

イスカが不安そうな目で見上げてくる。

正直ベルリアが滅んだところで痛くもかゆくもない、今回ここへ来たのは戦闘するに当たって、無理やり戦わされる奴隷達の救出が、目的だったりする。

「アラクネ、どれくらいまでなら相手できる?」

「魔法使いであれば何人でも」

なるほど対魔法戦術人形は伊達じゃないのね

「イスカとアラクネはお互いカバーしあってお姫様の方を頼むわ」

コクリとうなずくイスカとスカートのすそを軽く持ち上げて礼をするアラクネ、欲しいものは殺してでも奪い取れて格言があった気がする、格言通り奪わせてもらいましょうか。

森の中

「ぬっふっふ、平和と言う名の猛毒に侵された者どもを、葬り去る事など我ら』はうすだすと』にとってはたやすい事よ!」

「悦に入っているとこ悪いんだが邪魔するよ」

「ぬう？あんだだれだい？」

モンスター軍のど真ん中であるこの場所へ来ようと思ったならばモンスターの大量の中歩いてくるか地面を掘ってやってくる、もしくは空からやってくるしかなかったが、できそこないのウサギの前に現れた黒ずくめの男は、不敵な笑みを浮かべて立っていた。

「久しぶりだと言つのに誰とは酷いじゃないか」

「小僧、いや悪餓鬼くらいには成長したようだな、で？なんのようでい？おいらに指図できるのは置いてきた女房と花街の小町ちゃんだけでえ」

「まあ話くらい聞けよ？俺はお前達、埃共はつすたすとがあの国を落とそうがかまわれないが、その前にすこし頂いておきたいものがあるんだ」

「光物が欲しいなら早い者勝ちだつて墓場のじいさんはいつてたぜえ？」

できそこないウサギはタバコをくわえ、火をつけようと懐へ手を入れた瞬間タバコの先に火がつく

「なあに、財宝や武器が欲しいわけじゃないただあんたらが攻めるタイミングを俺に出させて欲しいのさ」

「人族であるてめえに俺らの指揮をさせるつて事か？」

「いや違うな、動き始めるタイミングだけ俺にさせてくれればいい、

もしこの案を呑んでくれるのならばお前達をやつらの側面から攻撃させてやる」

「てめえを信じられるって保障はどこにある？」

タバコの煙を吐き出して笑いを浮かべてウサギがたずねる。

「そんなものは無いさ、ただそうすれば戦場は混沌とする、ただそれだけさ」

「いいねえ、面白いつてのは大事だぜ、ただなこちらも長い間待ってやれない事情がある」

「隣国からの応援か」

「その通り」

「援軍の足止め30分も付け加えてもいいだが魔都の情報をよこせ」

「40分だ」

「いいだろう」

ウサギとナナシは手を結ぶ、ウサギのあまりの手の短さにナナシはしゃがむ必要があるはたから見るとふれあい広場で戯れているように見えなくも無かった。



「配置から察するに空のドラゴンを牽制しつつまずは奴隷達を突っ  
込ませてモンスターの足を止めてそこへ奴隷もろとも戦術魔法でふ  
つとばす、多少なりともダメージを与えたところで騎士達を投入し  
て退治するといったところか」

「では始めようか最終章、ベルリアの幕引きを」

その16〜亀裂〜（後書き）

最近よく思うのはメインタイトルが偽りしかないって事なんだ。

その17〜冥土乱舞〜（前書き）

アクセス数が増えるのはいい事だと思います！

## その17〜冥土乱舞〜

「さて、目的のフィル様はどこにい、らっしゃるのでしょうか？」

「大丈夫、この人たちを倒していけば、その内会える・・・たぶん」  
無表情気味な獣人は爪を光らせと無表情な人形は身の丈以上の大鎌を持ちゆつくりと兵士が待ち構えている城へと歩いていった、二人とも黒いメイド服を身にまといつて。

「貴様ら何者だ！貴様らのようなくっ・・・」

城の外周を警戒していた兵士がイスカ達に気付くが気付いた事にはすでに彼女達の間合いに入っており全ての台詞を言い終わる前にイスカの一撃で意識を刈り取られた。

「襲撃者だ！警戒しろ！相当な実力者だぞ！」

仲間がやられた事をいち早く察知した兵士の一人が叫ぶ。

「おや？私達、相当な実力者だそうですね？イスカ様」

「そう、ならその期待にはこたえないと・・・ね？行きましょ？アラクネ」

城門の前で構えていた数人の兵士達が、イスカ達を取り囲み切りか

かる、アラクネはその鎌で兵士を武器ごとまとめて真つ二つに切り裂く。

イスカの目の前にいた一人が吹き飛び門に突き刺さって痙攣する。

「軽く飛ばしただけなのに・・・」

「マスターの愛の力ですね」

自分達が全力で攻撃を加えているのにもかかわらず、舞っている埃を落とすように、自分達を倒していく目の前の敵はゆっくりと、だが確実に城の内部へと進行していた。

数人がかりでようやく開く城門はバターののように切り裂かれ用途を成していなかった。

「・・・奴らを《拘束》せよ！」

数人の光の縄がイスカとアラクネに巻き付き動きを止める。

「・・・煉獄の炎よ我らが敵を焼き尽くせ《ブレイズフレイム》」

動きが止まった所で、隠れていた他の魔法使い達が現れ、イスカ達へ業火を放つ。

「温いですね、私の防御壁はこの程度では崩せませんよ？」

アラクネの前には文字が、輝きイスカ達を囲むように防御壁が出現していた。

「ならば、動けない貴様の命もらった！」

光の縄で、動けない今がチャンスだと思ったのだろう、手に大剣をもった兵士がイスカ達へ切りかかる。

「マスターの昨日お作りになったイスカ様への愛のこもったクッキ  
ー『オープンなどに負けぬ私の愛の結晶』より甘いです」

鎌の部分に仕込まれた刃により、光の縄は5センチ間隔に切り刻まれていた。

「にゃーん・・・でございます」

アラクネがそうつぶやきながら刃を収めると、切りかかった兵士の大剣だったものは形を、猫の形にかえていた。

「~~~~雷よここへ来たりて我らの敵を排除せよ《サンダーボルト  
~~~~」

全ての魔法使い達が雷の呪文を唱えるがアラクネの障壁はびくともしなかった。

「多少面倒になってまいりました、《皆様御静粛にお願いいたします》  
~~~~」

アラクネが自分の前に出ていた文字を変えると障壁を姿を消し、城の中にあつた喧騒も同時に消えた。

「アラクネ『ぐっじょぶ』静かになった」

「『きょうえつしじく』・・・でございます」

魔法使いたちは、口をパクパクとさせるだけで魔法を使えず、兵士達も口をパクパクとさせているが声は聞こえなかった。

「はい、その兵士様の御質問にお答えいたしましょう、私が使っているのは音を消す魔法、よって貴方様方の罵声、悲鳴等々一切の雑音を排除させていただきました」

アラクネが説明を続ける中イスカは片っ端から兵士を殴り飛ばしていた、イスカが殴れば、兵士がトラックに轢かれた様に中を舞う様は異様の一言だった。

普段城を巡回警護する彼らは、自分達ではこの二人に勝てないとわかりながらも、舞い散る鮮血の中きっちりと正確にスカートを捌き命を狩っていくアラクネと、黒いメイド服が線のように残像を引きながら懐に入り込み、吹き飛ばしていくイスカの威圧に負けて、逃げるといふ選択肢すら取れなくなり、ただ呆然と立っているだけのものも少なくなかった。

「《解呪》！！」

「気を引き締める愚か者どもが！！！！」

そこにはローブをまとった男と剣を担いだ筋肉隆々の男が立っていた。

「おや、私の魔法が破られましたね、イスカ様お気をつけくださいませ、あの者達は少なくともここにいる者よりかは、強敵のようです」

「わかった」

「わははははは！襲撃者と言うから見に来てみればなんとも可愛らしい襲撃者ではないか！嬢ちゃんたち2人で、我らが城を落とすに来るとはなんとも愉快！それに比べて、我が兵達ときたらなんと情けない！こんな嬢ちゃんたちの相手も出来んとは！」

「油断成されるなあ。獣人の娘なにやら付加魔法を使っているようですし、鎌使いの方が底がしれん、私が鎌使いを貴方様は獣人の方をお願いします」

「心得た！」

ロープの男はアラクネに向かって5つの光の矢を放つ、筋肉の男はイスカに向かって切りかかっていった。

「おそらくこの二人がここの大物であると思われ、さっさと片付けてマスターから御褒美をいただきましょう。」

「うん、ナナシに褒めてもらおう・・・」

筋肉男の剣をスレスレでかわして、先ほどまでのようにイスカは拳を叩き込むがこれまでと違い、クッションを殴ったような感触が返ってきた。

「ふん、今の一撃良くぞ避けた！だが貴様の一撃では我が鉄壁の防御は碎けんかったようだな！」

「今のは本気じゃなかった・・・7割くらい」

「ワシも全力でガードしておらん！5割と言うところか」



「4、5」「なんの3、5」・・・

筋肉男とイスカはお互い剣、（拳）をかわしつつお互いの立ち位置を入れ替えながら言い合いを始めた。

「あらあら、イスカ様も負けず嫌いですね、で貴方は強いのでしょうか？」

「魔法使いに言葉はいらん魔法を打ち合えば優劣なぞすぐにわかると言つものよ」

「ふふふ、では刈り取って差し上げますわ」

数え切れないほどの光の矢が展開され雨のようにアラクネへ降り注ぐ、アラクネは必要最低限の矢のみを打ち落としながらロープの男へ接近していくが、突然炎の壁がその行く手を遮る、炎の壁に向かい文字を走らせると炎の壁は水となりあっさりと消える、消えた先から多数の鉄の矢が飛んでくるの鎌で弾く。

「なかなか面白いですね、私が近寄らせていただけなのは」

「小娘、魔法使いをあまりなめる出ないぞ」

ロープの男が何かつぶやくと天井や壁から水の竜が出てきた。

「あらあら、マスターも芸達者ですけど、貴方もなかなか芸達者ですのね」

右、右、左、右足、右足、左足、左、右・・・

剣を振り回しつつ蹴りや拳を交えてやってくる相手に、イスカはなかなか踏み込めずにいた、素手で戦っていたイスカにとって、剣は受け止められない物であるためかなりの熟練者である筋肉男に苦戦していた。

「どうした、嬢ちゃんもうおしまいか？」

「まだまだこれから・・・ッ!？」

足元にいた気絶した兵士に躓いたイスカに筋肉男はここぞとばかりに剣を両手で持ち一刀両断にしようと振り下ろす。

「な・・・我が剣を受け止めただと？」

イスカの両手には手甲のようなものがはめられており筋肉男の剣は

イスカに届いていなかった。

「むう、結局つかっちゃった使わなくてもいけると思ったのに」

「イスカ様ー本日の賭けは私の勝ちのようですね、マスターとの添い寝権はいただきましたよ」

「うん、わかった・・・全部、この筋肉たるまが悪いもう手加減なんてしない」

私は不機嫌ですオーラ全開のメイドイスカが筋肉男の剣を弾き距離を取る。

「まさか我が宝剣デュランダルが弾かれるとは、嬢ちゃんその手甲一体何だ？」

「教えない」

先ほどまで以上の速さで拳を繰り出すイスカに圧倒されつつも筋肉男はその拳を捌いていく

「【ツープア】起動」

イスカの言葉に反応して手甲が光り輝くとイスカの姿がブレる。3人となったイスカが3方向から同時に攻撃を仕掛ける。

「面白い事してくれるじゃないか！【旋風陣】」

3人のうち2人のイスカが切り刻まれて空に溶ける様に消えていった。

「甘かったなッ！これが本物だ！」

地をすべるように走ってきたイスカに振り下ろされる刃はイスカを捕らえたように見えるが地面を叩いた。

「遅いです【スリーカード】」

ほぼ密着した状態のイスカが4人となる、そこから筋肉男が気絶するのに数秒もかからなかった。

「イスカ様、せっかくマスターが考案された《二人の愛の邪魔者撃滅拳》<sup>よめ</sup>は使わなかったのですね」

「アレは威力がありすぎて殺しちゃうから」

「御優しいことです、私の方はつい楽しくなってしまうって相手の形がなくなってしまうましたわ」

二人は世間話をするような軽さで死屍累々となっている広間を抜けて先へ進んでいくのだった。

その17 冥土乱舞 (後書き)

アラクネもイスカもクールキャラだった、筆者はクールキャラ好き  
だったっけ？

その18〜波状〜（前書き）

キャラ同士の話し合いを書くのは楽しいですが、どうも兵士側の会話を書くのが難しい・・・。

## その18〜波状

王都ベルリア、長い歴史を持ち、これまで幾度と無くモンスターとの戦闘を繰り返し、そして勝利してきた。

「そう、難攻不落の要塞 だった、その戦歴も今日までだ、今のベルリアにそこまでの防衛力は無い、モンスターはいたが強固な守りゆえめつたに攻められる事無い、慢心は油断を生み、油断は致命的な弱点となる。」

「マスター、いい感じの所すみませんが敵勢力が、こちらを発見したようです」

現在、ベルリアの門から少しはなれた地点にいるのはナナシ一人だった、なのにアラクネの報告が入った。

「えーっと、アラクネさん？一体どこから見ているんでしょうか？」

「マスター御自身の右隣をご覧ください・・・もっと下でございませ、もっと」

ナナシの隣には30センチ程のサイズになったアラクネがいた、先刻見た姿と同じ黒いメイド服を着て、ナナシと同じくベルリアの方を見ていた。

「本体、アラクネにより徹夜して作成されました、小型汎用人形ミニアラクネ、略称チビクネでございます、アラクネほどの戦闘力はありませんが、アラクネでは対応できなかった、マスターのハアハアしながら愛でる用途にも対応できるボディを手に入れました。」

おや？いつの間にか俺、人形をハアハアしながら愛でるおかしな性癖が付いている、目から汗が出てきたよ……。

「マスター？」

「ああ、アラクネ……帰ったらお仕置きだ。」

「そんな熱いまなざしで見つめながらお仕置きだなんて、期待で体が火照ってしまいますわ。」

もうやだ、アラクネって戦闘人形だったはずなのに。

……このような反応をするドールズは我も初めて見る、戦闘特化され感情無く魔法使い達が手も足も出せずに、血祭りにあげられていく様は醜悪な戦場においても美しくあつたな……

どこか懐かしむようなレオの言葉を聞きながら、足元に置いておくと、間違つて踏みそうなチビクネを肩に乗せようと持ち上げた。

「マスター、私の魅力に負けてハアハアしたくなりましたか？胸部と臀部に使われている素材は、最近発見された新素材で出来ており、人族並みのやわらかさを再現しております。」

持ち上げたところで俺は膝から崩れ落ちた、なんでこんな変なところばかり頑張ってるのアラクネさぁん！！???

「アラクネからの伝言その1、イスカ様の手甲作成時のついでに作ったチビクネちゃんですので、そのような手間はかかっておりません」



イスカの手甲は俺が作ったという事になっているがアラクネ作である、アラクネ曰く、自分はマスターの所有物で、不器用なマスターの代わりに工作をするのも私の仕事です。そうです。ちなみにチビクネもずっと無表情のままですよ？

「そうですか……。」

そうです、と返すチビクネを肩に乗せながらノフィスの仮面被って声を上げる。

「俺は盗賊ノフィス、声無き叫びに応じてここに参上！」

「チビクネ推参！」

最近武器屋で買った剣を空へ突き上げるポーズもとってみる、チビクネはチビクネで複雑なポーズをとっていた。

ソレを確認したのだから兵士からの返答は

矢と魔法だった。

雨のように降り注ぐそれらを《ストーンウォール》を使い防ぐと目論見通り奴隷達のいる『捨石』部隊が出てきた。

「チビクネお目当てが出てきたぞ」

「これからマスターの、卑怯極まりない反則技によって、戦場が混乱の渦に包まれ阿鼻叫喚の地獄となるのですね、ああ、マスターそのような熱視線を向けられては照れてしまいます、それでは行ってきます。上手に出来たらご褒美くださいね。」

最後までテンションが高いまま、レポートで跳んでいった人形を見送るともう目と鼻の先までやってきていた 獲物 達に向けて魔法を使う。

「指令官！第一陣の半分ほどが一瞬で消滅しました！」

「なにっ！魔法による攻撃か!？」

「いえ、魔法なのは確かなのですが、消えたのは一区画の兵士ではなく、兵の塊に穴が開く様にまばらに兵が消えていったのです。」

迫り来る兵士に、魔法の効果を及ぼすならば少しでも数を減らそうと、範囲内の者全てに効果をもたらすはずだが、いちいち選んで効果を与える事など、そんな精密な魔法を使える魔法使いは、ベルリアはもちろん三国中探しても一人いるかどうかというレベルだった。

「指令官！城壁内に敵が現れました！」

「数は!？」

「一人、いや一体です！」

「一体?どういうことだ！」

「人形です！城壁内に突如として現れた人形が魔道具、魔法陣、武

器防具などの備蓄武器を破壊して回ってます！」

「人形一体に何をてこずっている！さっさと倒してしまえ！」

「それが、相手は小さく剣が当たりにくく、その上、人形付近では魔法が使えないのです」

「そんな事など聞いていない！さっさと何とかしろ！」

「指令官！」

「今度は何だ！」

「モンスター共が動き出しました」

司令室が報告を受けた頃モンスターの軍勢は、城門から出てきた第二陣の側面からの奇襲を成功させていた。

「マスターの方も成功したようですね、では私もさっさと逃げましょうか、その前にこの部屋は……あらあらあ？」

チビクネの見つけた部屋は城門に備え付けられた大砲用の火薬が置かれた保管庫だった。

「これで……よしっと、ではチビクネ愛しのマスターの元へ帰還します！」

ようやく追いついてきた兵士達が最後に見たのは、開け放たれた火薬庫の扉と輝く文字、そして壁に書かれた一言「見よ、兵士がゴミ

のようだ」だった。

モンスターに奇襲を受け、城門の一部が吹き飛んだのを見て兵士達は慌て、我先にと逃げ出した、混乱を極めた戦場で輿に乗り、できそこないのウサギは腹を抱えて笑っていた。

「目的のものは手に入れた、チビクネ損傷は？」

「無傷でございます」

「イスカの方はどうなったかな」

「アラクネが付いておりますので無傷だと思いますが、反応はまだ城の中ですね」

「なら迎えに行きましょうかね」

「了解しました、ところでチビクネは任務をきっちり遂行しました！ご褒美を要求します！」

「・・・要求を聞こう」

「チビクネでハアハアしてください」

「お前の欲求だったのかよっ！」

照れるような仕草をするチビクネに突っ込みを入れつつノフィスは城へと駆けていった。

その18〜波状〜(後書き)

読む人が一気に増えてびっくりしたよ！

その19〜王都壊滅〜(前書き)

ハーレムって3人もヒロインがいればハーレムですよ。

## その19〜王都壊滅〜

ベルリア城まで、特に妨害らしい妨害も受けず、チビクネへの褒美：  
撫で回しを消化しながら、来れてしまったわけだが、この先  
イスカ達はどんな状況になっているのだろうか？

予想その1、イスカ達が城の兵士に無双中

予想その2、その1とは逆に大苦戦

予想その3、フィルが見つからずに搜索中

予想その4、どれでもない真実は小説より奇なり

どれだろうか？個人的には、その3じゃないかと思うんだけど、ど  
うなんだろうか？

門をくぐりぬけて、倒れている兵士をまたぎ、踏み付けながらどん  
どん奥へと進んでいく。

「あゝチビクネとしては〜その5、この城の地下に眠っていた守護  
獣が復活した！とか希望です〜」

それもいいなあ、それにしてもイスカといい、チビクネといい、な  
んでこうも撫で心地がいいんだらうなあ  
ナデリナデリと人形の頭を撫でながら、地獄絵図と化している広間  
を抜けていく。

「マスター、この先からイスカ様達の反応があります。」

この扉の向こうか、なんか殺気とか魔力とか感じるなあ、開ける前に扉を開けた後のことをシュミレートしとくか。

扉をバーン！、イスカとアラクネを確認して、一番近い奴の肋骨をバーン！

「ソレです！」

チビクネの賛同も得られたようだしこの手順で行こうか。

「それじゃあ、その1！扉をバーン！」

扉が轟音を立てて吹き飛んでいく。

「イスカとアラクネの状態確認！」

イスカもアラクネも怪我していないようだな。

「一番近い奴の肋骨を・・・」

「・・・まてまてまてまて！」

む？せつかくシュミレートまでした手順を妨害されたぞ？

扉の先にはイスカ達の他に、おそらく服装その他装備品から、王族等の防衛組だと思われる者達と、見たことの無い覆面の者達がいた。ちなみに肋骨が、バーンされそうになっていたのは、覆面の方々の



内の一人。

「なんですか！覆面してるくせに！肋骨の一本や二本バーンてされてください！」

チビクネは、俺の肩の上で理不尽な文句を垂れ流していた。

防衛組がいるのはわかるが、この覆面集団はいったいどちら様だろうか？

「はっ！まさかこの覆面集団さん達はっ！」

「知っているのかチビクネちゃん！」

何か知ってそうなチビクネにノッてみる、覆面集団達の視線が俺の肩に集中する。

「この城の地下に封印されていた古代怪獣では！？」

「『『そんなわけあるかっ！！』』」

なんだ？イスカ達や防衛組も突っ込んだぞ？

「そつだぞ、この覆面さん達はきつと城の・・・」

俺の言葉に再び覆面集団達の視線が集まる。

「黒子さん達だろうっ」

「『『武器を持った黒子がいるかっ！！』』」

「なら守護獣の線があやし・・・」

「くくくくないっ！！！！」

なんだろう、予想以上に突っ込みが多くて楽しいなコレ。

「我らは、ベルリア王の命とその杖を頂きに来たのだ！」

「あーそう？でイスカ達は目的のモノは手に入った？」

覆面さん達の目的がわかったのでイスカ達にミッションの遂行状況を確認する。

「フィ・・・獲物は、この城の最上階に匿われているんだけど、その扉を開くのにあの杖が必要。」

イスカさんフィルって言いかけたね、別に気分だけの問題だから言っちゃっても問題ないんだけど、真っ赤になって照れてるイスカも可愛いなあ。

「マスター、マスター、皆さんが待ってますよ？」

おっと、いけないチビクネの言葉に現実へ帰ってくる。

イスカの尻尾と耳をもふリップしてたぜ。

『もふリップ』：もふもふ＋トリップの事、すなわち耳の裏側を手の甲でこすってみたり、尻尾に頬ずりしてみたりという妄想全開だったわけです！

「えっと杖、奪って扉開けて杖は覆面さん達に上げるんじゃないダメな

の？」

「マスター？せっかく盗賊を名乗っているのですから財宝は全ていただいでいかないと」

アラクネさんやる気満々ですね。

杖を渡したくない防衛組、杖が欲しいイスカ組、杖と命が欲しい覆面組の3竝みになっているわけか。

というかアラクネが覆面組を抑えてイスカー一人で防衛組倒すのはダメなのか？

「我らは影！我等の攻撃は何者にも止める事は出来ん！」

声に出てたみたいだけど律儀に答えてくれたな。

「おい！その黒ずくめの者よ！私を助ける！私はこの国の王だぞ！」

あの王様は俺がイスカ達と会話してたのが聞こえてなかったのか？

「あー中年のおっさんを、助ける趣味はないので却下で、イスカ？こっち抑えるから奪っちまえ」

その声と同時にイスカが防衛組へと駆ける。

覆面達も駆けようとするが妨害を入れる。

「《氷槍雨》 《ストーンウォール》」

覆面達を取り囲むように壁が出現し氷柱が降り注ぐ。

壁の向こうへ消えた覆面達への止めとして《ファイアボール》を打

ち込む。

石の壁は爆発の衝撃で砕け散る、残ったのは倒れた覆面組数人、さつきみた数より少ないような？

目をイスカの方へ向けると守っていた騎士達を打ち砕いて王へ手を伸ばしているところだった。

「さあ、抵抗は無意味、杖を渡して。」

イスカの最終通告に杖を渡そうとした王の腹部より剣が生えた。王の体から生えた剣はその勢いのままイスカへ向かうがアラクネにより弾かれる。

「残念、どうせならこの王と共に邪魔者を、一人でも排除したかったんだけどね、杖は確かにいただいたよ」

覆面の一人が俺の魔法を潜り抜けて王を抹殺し、杖を奪ったのか。

「イスカ！怪我は無いか？」

「うん、アラクネが守ってくれたから無傷。」

「アラクネありがとうな。」

「いえ、これもメイドの仕事ですので」

さて杖は取られたがフィルまで取られるわけには行かないし、上へ急いじうか。

最上階の籠城中のお姫様を助ける方法は、

「フィールーいるかー？」

「その声！ナナシ？お父様はどうしたの？」

おっ覆面はフィールまでは持っていていかなかったようだな

「王様は・・・死んだよ、覆面の奴らに刺されて。」

「そうか、なら杖は？持って無いの？」

「そうその杖なんだけどここの扉って杖がないと開かないんだってな」

「えっと、私も昔、お父様に杖の事を教えていただいた際に何をしても開かなかったのを覚えているわ」

「魔法でも破壊できなかった？」

「まったくだめだったわ」

「それはこつち側から？それとも内側から？」

「外側からよ」

なら試す価値はありそうだな。

「試しにそっちからこの扉開けてみてくれないか？」

するとガチャリと軽い音を立てて扉は開いた。

思ったとおり、あの杖は外から攻め込んでくる賊から、身を守るためのシエルターの鍵、本当ならこの中に入る人間が持ち込むのが正しい使い方なのだろう。

「開いた」 「開きましたね」

「あれ？え？開いた？」

鍵をかけた扉は開かないものという固定概念があるから外からダメなら内側もダメだろうと思いついていたのだな。

「うまくいったのはいいのですが、もし開かなかった場合どうしたのでしょうか？」

「アラクネいい質問だ、もしコレで開かなかつたら、俺が魔法で扉の周囲をまとめて消すつもりだった」

あくまで扉が破壊できないのだから効果の出る部分に穴を開ければいいのだ。

「ナナシ、この部屋は耐魔法の付加がかかっており並大抵の魔法ならば傷も付かんぞ？」

うん、内側から開いてホントによかった！

「それから、な？ナナシ・・・」

えっ？何この雰囲気！？愛の告白？

「私に黙っていなくならないで、本当に悲しかったのよ、明日も一緒に笑っていられると思えた人が、突然いなくなつた私の気持ちわかる？」

フィルはナナシに抱きつくと馬鹿と声を上げて泣き出した。

町の外の防衛もそろそろ破られる頃だろうか、いざとなればモンスタ―も蹴散らせばいいかと考えながら、泣きじゃくる小さな王女様を抱きしめた。

その19〜王都壊滅〜（後書き）

明日からまた更新速度が落ちると思います。

それでも気にしないぜって方は気長に待っててくださいね。



その20〜レッツハイキング〜（前書き）

獣耳＋尻尾＋冥土服Ⅱ筆者のジャステイス

## その20〜レッツハイキング〜

「バカアアアアア!!!」

「ほらほら、口を閉じてないと舌を嚙んじゃうぞー」

イスカ、アラクネ、ナナシ、そしてナナシに担がれているフィル、4人は現在全力でのマラソンの最中だった。

4人は、拠点の城から数キロ離れた山奥へと来ていた。事の始めはフィルから聞いた情報だった。

『この山の、どこかにもすごい宝が、隠されてるらしい』

まずこの情報にアラクネが反応した。

「お宝という事は私の仲間、もしくは武器があるのかもかもしれません」

次に、『お宝の他にも美容に効果のある魔道具があるらしい』

これにはイスカが反応した。

「お宝と聞いて無反応なんて、盗賊の名折れ」

じゃあ3人で行つといでーというナナシの台詞に

「「「ナナシも行くの!」「」」

とう言う事で付いてきたのだが、山に登り始めて数分で足をひねって動けなくなったフィルを背負うこととなり、イスカがなんとなく手を上した先に、モンスターの本巣があり現在に至る。

「「どうやら撒いたようだな」

背負われているフィルはともかくイスカは息一つ乱れていなかった。

「マスター、イスカ様の心配は結構ですが私の心配はしてくださらないのですか?」

何の事だろうか?人形だから疲れることも無く、魔法も使えて、話術にも長けたアラクネさんに何の心配をするのだろうか?

「その顔は、まったくわかっていないようですねマスター、こないだの戦闘での報酬をお忘れですか?」

「ワスレテナンカイナイヨ?」

「・・・それならばいいのです」

アラクネ達ドールズは、他の生き物からの向けられる感情を糧とし活動しているそうで、契約者以外からの感情も糧となるが、契約者から向けられる感情の方が効率よく糧となるそうだが、数あるドールの中でもアラクネと相性がよかつた感情が『愛情』らしい、ゆえにこないだの勝負の褒美は「恋人イスカに向ける愛情とは言わないまでも、ソレに近いレベルの愛情を私にもください」だった。恋人と言っていたのに、イスカというルビが見えたのは幻覚だったのだろうか？

「ナナシは、渡さない」

イスカがナナシの右隣に引っ付く

「イスカ様、耳と尻尾がいつまでもイスカ様だけの、アドバンテージだと思わないことですね」

ん？人形であるアラクネは人族を模しているため獣人族のような耳や尻尾は付いていない、まあ当然だ。

「私達は『ドールズ』人形でございます、ですのでこのような事もできるのでございます」

そついうとアラクネは、何も無い空間に手を突っ込み、獣耳と尻尾を取り出した。

「「「!?!?!?!」」」

取り出された耳と尻尾はアラクネの髪と同じ銀色をしていた。

「これがドールズの真の恐ろしさです！」

取り出した獣耳と尻尾を装着していくアラクネ、どういった構造になっているのか耳はピクピクと動き、尻尾も動くようだ。

「これが対マスター用装備アラクネ獣人フォームでございます」

いろいろ気になる点はあるものの獣耳メイドさんが二人になりました、眼福です、撫で練り回したい・・・超撫で練り回したい、二人まとめて撫で練り回したい！

「マスターがハアハアしています！そのままチビクネを撫で練り回すといいです！」

獣耳と尻尾を出した空間に繋がっているのだろう場所からチビクネがアピールしていた・・・あつアラクネに押し戻された。

「ガアアアア！」

おや？

もしかしてモンスターをやり過ぎすためにもぐりこんだこの洞窟は、モンスターの巣だったのか？

奥から現れたのは熊に似たモンスターだった。

「アレはこの辺りの山岳地帯に生息する『アグーマ』ですね、その肉を使ったグマ鍋は大変美味だと聞いています、筋力が発達しておりおいしそうですが油断は禁物です、お腹がすきましたね多少の魔法を使う事も確認されています、マスター狩ってきてください。」

途中から、唇ごはんの催促になっていた気がするが、気にしたら負けだよな。

アグーマに近づき頭を吹き飛ばそうと拳を出した時、カウンター気味にアグーマの腕がナナシを薙ぎ払った、吹き飛び壁に激突するナナシ。

「言い忘れていましたがアグーマは普段おとなしいのですが怒った状態だと戦闘力も格段に上がると聞きます」

むう、油断したぞ、思った以上にアグーマが速かった。

気を取り直してもう一度アグーマの懐へ飛び込む、アグーマの右腕を交わしてわき腹へ2発の拳を入れる、左腕を振り上げたアグーマの頬へを右側から拳を叩き込む。  
拳を受けたアグーマは首がほぼ真後ろを向いた状態で倒れた。

「う、お父様のマントと一緒に洗われた服など着れませんわっ！」

父が娘に言われて傷付く言葉ベスト3に入っってそんな事を叫びながらファイルが目覚めた。

「あら？ここは…そうですね、宝を求めて山に登っていてモンスターがお父様のパンツを・・・」

その先が気になるが聞かないでおこう。

「フィルムもご飯食べるか？」

「いただきますわ」

アグーマの解体は、イスカがすばやくやってくれました。森での生活で、それなりに出来るようになったとはいえ、イスカの方が早く正確に切り分けていく、彼女曰く、切るべき場所が見えるそうだ、おそらくどこをどう切ればうまく切り分けれるかと言うのを本能的にわかっているのだと思う。すごいね獣人族！

昼食を終え山登りを再開した一行は6合目あたりに差し掛かっていった。

「私の聞いた話だとこのあたりに洞窟があつてその奥にお宝があるらしいんだけど」

鬱蒼と茂る木々を掻き分けて進んだ先にはぼつかりと開いた大きな洞窟があつた。

魔法で明かりを出し、どんどん進んでいくと壁自体が発光している広間に着いた。

「なんだここは？これまでの洞窟とは違って壁も地面も、人工物のような、自然物にしては滑らかすぎる」

広間の真ん中には一際大きな石が置かれていて何か文字のようなものが見える。

「えつとなになに？『良くぞここまでやってきた、ここに至るまでに培われた友情……』」

「待った！」

フィルが石に書かれた文字を読み上げていくのを止める

えー、ここまでできてそのパターン！？友情こそ何物にも変えがたい宝であるってパターン？

急激に熱の冷めていくのを感じながら周りを見渡す。

何もわかってない顔をしているフィル、予想通りといった感じで親指をぐっと上げているアラクネ、石に書いてある文字の続きに期待しているイスカ。

「ごめん、続けてくれていい」

「そう？えつと続きは『培われた友情をもって我が守護獣を倒してみせよ』……守護獣？」

おや？予想とは違うな守護獣ってどんなのが出てくるんだ？

石に書かれた文字を読み終えた時、左側の壁が開きさらに地下へと続く階段が現れた。

細く一人がギリギリ通れる程の幅しかない階段を降りる、順番はナシ、イスカ、フィル、アラクネだ。

「だいぶ降りた気がするけどこの階段っていったいどこまで続いているのかしら？」



「この先に巨大な生命反応があります、おそらく守護獣ではないかと」

「どんなのだろうか？楽しみ」

そんな話をしていた矢先、壁に文字を発見する。

「何か書いてある、」この言葉を目にした者よ、主には怠惰を与えよう『怠惰ってなんだろうか？』

文字を読み終えた時、階段はその姿を変え急な坂道となりナナシ達は滑り落ちていった。

その20〜レッツハイキング〜（後書き）

アグー豚＋熊⇨アグーマ、安直ですね今日の晩御飯にアグー豚が出  
てきたので小説にも出してみました。

その21〜喪失〜（前書き）

その21を考えながら作っているとエンディングがうっすら見え  
てきました。

## その21〜喪失〜

『キヤー』

一般的に叫び声を表すこの文字を、イスカ達は叫んでいた、ただし全て同じ言葉なのに意味が、まったく異なつてに聞こえるのはなぜだろうか？

フィルは一般的な恐怖から来る悲鳴、イスカは楽しさから来る叫び、アラクネに至つては棒読みである。どれ位長い間滑つていたのかわからないが坂の下はまたもや広間だった。

「さっきの石の話だと、ここに守護獣がいるはず」

イスカが周囲を警戒している

「この部屋に他の生物の反応はありません、この下に反応があるのでおそらく何かしらの仕掛けがあるものと推理いたします。」

仕掛けで思い至つたのは仕掛けの王道『落とし穴』だ、今回の場合この下にいる守護獣とやらへ至る道なのだと考える、手分けして仕掛けのスイッチを探すため、ナナシとフィル、イスカとアラクネに分かれた、もしイスカの方が先に守護獣と戦う事になった時の事を考えてイスカに予防のための魔法をかけておいた。

二手に分かれて搜索を開始した。

「いやあ！へびいー」

開始早々トラップを発動させフィルが蛇まみれとなる。

「おーろーしーてー」

突然現れた縄に足を釣られて逆さ吊りなるフィル

「・・・」

仕掛けとなっていた床を踏んで水浸しになるフィル

「おかしいわッ！」

「おかしければ笑えばいいじゃないか！」

「意味が違うわッ！」

「で？何がおかしいんだ？」

「私だけ罠に引っかかるのって不公平だと思うの！」

「あっはっはっ！」

「何で笑うのよッ！」

「確におかしかったので笑ってみた」

「バカア！」

地団駄を踏んだフィルの足がスイッチを踏み抜く、するとこれまでナナシ達の体を支えていた地面が消え、自由落下を始める。

「《浮遊》！！」

咄嗟にフィルを抱えて魔法を使う、《浮遊》本来魔力を使ってふわふわと浮く魔法なのだが今回はゆっくりと降りていくように設定してある、フィルは腰を抱えるように持たれているのが不満なのか顔を合わせないようにしていた。

ゆっくり降りていくと底が見えてくる、これまでの部屋とは違い壁には明かりが付いていた、地面に降り立ちそつとフィルの目を手で覆いこちらを見つめているソレに向かい合う。

「あーフィルは見ないほうがいい、きっとの方がいいそんな気がする」

「なによッ！私には見せれないっていつの？いいから見せなさいよ！」

バタバタと手を剥がそうとするフィル

「なら、見ても後悔するなよ？」

「いいから見せなさいよッ！」

俺の手を払いのけたフィルが、見たのは俺たちを一口で食べれそうなほど大きな蛇だった。

「またへびーッ！」

「ほらいわんこっちゃんい」

チロチロと舌をだしながらこちらへじりじりと、よってくる蛇を警戒しながらフィルへ指示を出す。

「フィルなるべく離れるなよ？守ってやれなくなる」

「わわわかかってるわよ」

OK、全然大丈夫でないことがわかった。

後ろにいるフィルを守りながら巨大な蛇の相手をする・・・難易度高いな

相手に攻撃させるとマズイ！こちらから攻めまくるか！

「《アイスランス》」

蛇がこちらへ突撃してくるのにあわせて氷の槍を召還して飛ばす。蛇に向かって鋭利な氷がいくつも飛んでいくが、蛇に当たった氷は砕けてしまう、ナナシを喰らおうとする蛇の一撃をかわし、着地の瞬間を狙った尻尾による攻撃を避ける

「まだまだッ！《氷塊》」

大きな氷の塊が出現して蛇を押しつぶそうとするが蛇の尻尾の一撃を受けて砕け散る、その勢いのまま薙ぎ払う尻尾による攻撃を避ける。

「《アイスストーム》」

全てを凍てつかせるであろう魔法は蛇の尻尾を一瞬で凍らせ、さらに辺り一面に砕けた氷の破片が散らばっていたこともあり、部屋の温度はどんどん下がっていき蛇の動きも目に見えて遅くなっていた。

「止めはお任せください」

いつのまにか現れたアラクネの鎌が蛇の頭を二つに切り裂いていく。真つ二つに切り裂かれた蛇はしばらくのたうち回っていたものの、その動きも緩慢になっていきやがて動かなくなつた。

「マスター、守護獣もとい今晚のご飯が手に入りましたね」

「いや、なんか呪われそうじゃないか？」

「ナナシ、せつかく倒したんだから食べないとあの蛇に悪い」

たしかに生き物を殺したんだからその命を無駄には出来ないよな・  
・と思つていたら蛇の亡骸が黒い液体となり地面に染み込むようにして消えた。

やめてっ！そんなナナシがモタモタしたから逃げられちゃったじゃないって目をするのはやめて!？」

「イスカ、アラクネ？、戦闘してない私が言うのもおかしいんだけどそのあたりで許してあげたら？」

「「「おかしければ笑えばいい【よ【】と思います【】「「「



「なにこれ！？何でこんなに息ピッタリなの！？」

「では番人も排除したことですし宝物をいただきに行きましょうか」

「えっ！？スルー？」

「ほらフィルも遊んでないで行くぞ？」

もはや人語ではない何かを叫びながら暴れているフィルを見て、今はこんなでも一応王女だったんだよなと感慨深く眺めていると暴走したフィルに蹴り飛ばされた。

蛇が元々いた場所の奥に死角になるように隠し通路がありその奥は一面金貨に包まれていて台座にはまった3つの宝石があった、台座には【愚かなる者に災いを、賢き者に祝福を】と書かれていた。

「この場合、愚かなる者って言うところの宝石に手を出したものだよね、何も取らずに帰れって事か？」

「マスターの考えで間違いようです、台座にはこの宝石を外すと発動する仕掛けがいくつも見受けられます」

「ナナシ、奥に何か落ちていないか？」

部屋の片隅、よほどしっかりと確認しないと見落としそうな所にブレズレッドが落ちていた。

「アラクネ、あれに罫は？」

「見受けられません」

ブレスレッドを拾う、銀色のブレスレッドは内側に文字が刻まれており、魔法の加護が付加されているようだ。

「装着者を守る効果を持ったブレスレッドのようですね」

「私はナナシにもらった物があるから、フィルが持つてるといいよ」

「私ともらっちゃってもいいの？」

「ええ、私が持つていても発動しないと思いますし、フィル様のようなドジッ子・・・失礼、超ドジッ子が持つているのがよいかと思われます」

「言い直してさらに酷くなった！」

「申し訳ございません、人形なので嘘がつけないのでございます」

「それ余計に傷つくッ！」

「ふふふ、冗談でございますよ、フィル様は聡明でございますから」

「冗談なら・・・」

「まあ、嘘ですが」

「人形なのに嘘ついた！そして何が嘘なの！？」

「それよりもフィル様よろしいのですか？」

「これまでの話をスルーして急に真面目な声を出さないで、で？何なの？」

「皆様に置いて行かれてしまいました」

「ちよつとおおおお！待ってよおおお！」

ナナシはアラクネとフィルが問答し始めたので、イスカと二人で出口を求めて先へ進んでいた。

トンネルから抜けだしたナナシ達を待っていたのは杖を奪っていった覆面の方々だった。

「待っていたぞ、『化け物』さんよ！」

覆面の一人がナイフを片手に一歩前へ出る

「何か用なのか？こつちとしては、あの杖に興味はないし、王様の敵をとる気もないんだがな？」

真実を軽い感じで話しながら、相手の出方を見る。

「相変わらず庶民風情が偉そうな口をツ！私を忘れたとは言わせんぞツ！」

「・・・誰だっけ？」

「きつさまあ！我が名はレイナルド！レイナルド！！スフィーリアスツ！偉大なるスフィーリアス家の次男だツ！」

レイナルドの手には覆面の人たちにより奪われた杖が握られていた。

「ああ、そんなのもいたっけか・・・」

正直、ダリルの方が印象強すぎて覚えていなかった。

「貴様に焼かれたこの顔の怨み、今ここで万倍にして返してくれる！『時空の杖よツ我が魔力に応えその力を示せツ』《堅時空牢》」

レイナルドの言葉に応え、杖が輝きだす。

「ダメツ！」

大抵の魔法ならばナナシに傷一つ付ける事などできない、何せ《無》の魔法は効果対象を全て『無』にすることが出来る。

だからナナシは動かなかった、動かないというミスを犯してしまった。

獣の第6感なのか、乙女の直感なのか、イスカは咄嗟にナナシを突き飛ばした、『ナナシにこの魔法を受けさせてはいけない』その直感を信じて。

強化、付加効果を受けたイスカに突き飛ばされたナナシは、木を3本ほど巻き込んで吹き飛んだ。

「何するんだよ、イス……カ？」

起き上がったナナシが見たのは、一抱えはありそうな黒い水晶に閉じ込められたイスカの姿だった。

「イスカツ！お前いつたいイスカに何をした！」

「チツ！獣が邪魔しやがって！貴様もそんな獣の心配より自分の心配したらどうだい？次は貴様の番なんだからなッ！」

再び輝きだす杖だが、杖から魔法が使われる事は無かった。

「ぎゃあああああ！」

杖を持っていた右腕はいつのまにかナナシの手の中にあつた、レイナルドの右腕からは忘れていた事を思い出すかのように血液が噴出した。

「ぎゃあぎゃあ騒いでるんじゃないよ、さつさとイスカを元に戻せ」

「はっ！誰が貴様の言葉など聞かっ！と言いたいところだがかけた魔法くらいは教えといてやろう、私が使ったのはベルリア王家秘

奥中の秘奥魔法《堅時空牢》、対象の周囲ごと時間を切り取る魔法だ！どんな防御もこの魔法の前には無意味！さぞ悔しかろう！化物と呼ばれた貴様にかけてやるつもりだったが貴様にかけるよりそちの獣にかけたほうが貴様には堪えたようだなッ！」

それだけ言うとレイナルドは魔法で逃げ去る。

「申し訳ありませんマスター！おや？イスカ様は・・・まさかこれはイスカ様ッ！？」

「これはイスカなの！？イスカ！イスカ！」

アラクネとファイルが遅れて追いついてきたが、全てが遅すぎた。

「おい、貴様」

覆面の一人がまだ残っていたようだ、イスカがこんな姿になってしまつて動揺してるのか俺は・・・

「俺はこれから独り言を言う、コレは貴様への助言ではないあの娘は紛れも無く強者だった、その娘に対する敬意を払つて一つ言わせてもらおう、今貴様が持っている『時空の杖』はただの媒体にすぎずあの魔法を解く事は出来ない、ただ『魔王』と呼ばれた者ならば、もしかすると何とかできるかもしれない、その杖ももとは奴の持ち物らしいからな、『魔王』は現在、魔都イスルギにいると聞く」

「なぜ、そこまで教える？」

「あの娘とは再戦の約束をしていてな、こないだは不覚をとつたものの、貸しは返さねばならない、それだけのことだ。」

覆面の人が去った後にはクリスタル化したイスカとアラクネ、フィール、ナナシが残る、誰もがイスカを見つめるが何も言わなかった、数分が過ぎ静寂を破ったのはナナシだった。

「アラクネ？イスカを、イスカを家へ運んでやってくれ、家に着いたら今度こそイスカを全ての敵から守りぬけ、手段は問わない守りぬけ」

「かしこまりました、全力を尽くします」

アラクネは、イスカを抱えて魔法を使い転移した。

「クソオオオ！イスカア！」

地面に崩れ落ち涙を流すナナシを同じように涙を流しながら抱きしめるフィール。

二人はしばらくその場にて涙を流した。

遠くに見えるは魔都イスルギ、『魔王』と呼ばれた者がいると言われた場所である。

その21〜喪失〜（後書き）

イスカ封印です、暫く獣耳や尻尾封印・・・おのれ！レイナルド！  
耳尻尾の怨みは恐ろしいと知れ！酷い最後を迎えさせてやるっ！  
（予定）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9719y/>

---

痛みとウサギと追いかけて

2012年1月9日00時52分発行